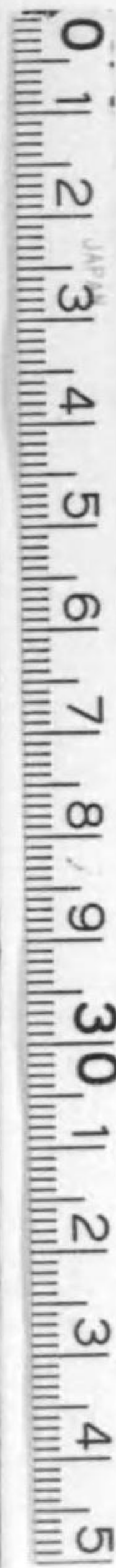


321

144



始



321
144

産業調査報告書

第十一卷

(農事試験、農事指導)

北海道廳



本調査ハ主トシテ左記ノ主査及委員之ヲ擔當調査セリ

農 事 試 驗

主 査 農學博士 大 島 金 太 郎
委 員 窪 田 森 太 郎

農 事 指 導

主 査 農學博士 大 島 金 太 郎
委 員 崎 知 二 郎

大 正
3. 12. 16
内 交

農事試驗

目次

第一 農事試驗場	一
一 沿革	一
二 目的及所在地	四
三 組織	五
四 經費	九
五 事業ノ要目	一一
六 事業ノ成績	一四
七 將來ノ事業	四二
第二 農事試作場附種苗圃	四九
一 沿革	四九
二 目的及所在地	四九
三 組織	五〇
四 經費	五〇
五 事業ノ要目	五一
六 事業ノ成績	五四
七 農事試作場ノ將來	五四
八 模範農場ノ設置	六〇

附種苗圃.....六一

第三 測候所.....六七

一 沿革.....六七

二 目的及所在地.....六八

三 組織.....六九

四 經費.....七〇

五 事業ノ要目.....七一

六 事業ノ成績.....七一

七 測候所ノ將來.....七四

第四 結論.....七六

農事指導

一 沿革.....七九

(一) 普通農事指導.....七九

(二) 畜産指導.....八一

(三) 蠶業指導.....八二

二 組織.....八二

(一) 普通農事指導.....八二

(二) 畜産指導.....八六

(三) 蠶業指導.....八七

三 指導方法.....八七

(一) 講習講話及實地指導.....八八

(二) 品評會.....八九

(三) 模範農業經營指導.....八九

(四) 新來移民指導.....九〇

指導經費.....九〇

指導成績及効果.....九三

(一) 指導ノ成績.....九三

(二) 指導ノ効果.....一〇八

將來ニ於ケル指導機關ノ組織.....一一一

將來ノ指導方法.....一一三

結論.....一一四

農
事
試
驗

産業調査報告書

(第十一卷)

農事試験

現在本道ニ於ケル農事試験ニ關スル機關ハ國費支辨ニ係ル農事試験場ノ外地方費ヲ以テ農事試作場ヲ設ケ又別ニ農事試験ニ密接ノ關係ヲ有スル測候所ヲ樞要ノ地ニ設置セリ今左ニ逐次此等各種機關ノ過去現在並ニ將來ニ就テ述フヘシ

第一 農事試驗場

一 沿革

明治二年本道ニ開拓使ヲ置カル、ヤ、北海道開拓ノ第一要義ハ農業的富源ノ開發ニ在リトナシ大ニ農民ヲ保護移住セシメ、又屢々農具種子等ヲ海外ヨリ輸入シ農事ノ獎勵ヲ爲スト共ニ、龜田郡七飯村及札幌官園ニ試験場ヲ置テ農事ニ關スル諸般ノ試験ヲ施行シ、札幌農學校亦諸種ノ試験ヲ行ヒテ貢獻スル所尠カラス、後明治二十二年、上川郡旭川ニ農事試作場ヲ創設シ、二十六年札幌郡白石村、同郡真駒内、龜田郡七飯村ニ稻作試作場ヲ設ケ(七飯村二十七年廢止)白石試作場(後農事試作場ト改稱シ真駒内ヲ其分場トス共ニ明治三十五年廢セラレ)ニテハ特ニ蘭草ノ試験ヲ併セ行ヘリ又石狩國幌向原野及對雁原野ニ泥炭試験地ヲ置キ更ニ主ナル農村ニ就キ篤志農家ヲ選ヒ農事委託試験ヲ開始シ二十八年十勝農事試作場ヲ設ケ三十四年札幌ニ北海道農事試験場ヲ置キ、三十六年本道火山灰地方農事ニ關スル特殊ノ試験ニ著手シ、四十年北海道廳立上川農事試験場北見分場ヲ開キ、續テ委託輪作試験ヲ開始シ、四十二年北海道廳立渡島農事試験場ヲ設ケタリ、四十

三年新ニ本道經營案ノ確立セラル、ヤ、地方費ニ屬スル前記上川、十勝、北見、渡島ノ四農事試驗場及札幌農事講習所ハ總テ國費ニ移換セラレ、北海道農事試驗場ヲ本場トシ、之ニ火山灰地試驗、泥炭地試驗ノ外委託及輪作試驗事業ヲ併合シ其他ハ悉ク之カ支場タルニ至レリ、此ノ他四十三年度ヨリハ地方費ヲ以テ新ニ檜山、膽振、天鹽、釧路、根室ノ各地方ニ農事試作場ヲ設ケ、北海道農事試驗場ニ於テ之カ監督ヲ爲セリ

又蠶業ニ在リテハ明治四年開拓使ニ於テ札幌郡丘珠村ニ蠶室ヲ設ケ養蠶ヲ試ミ、同八年札幌區及龜田郡大野村ニ養蠶場ヲ設ケ、管内ノ子女ニ飼育ノ方法ヲ傳習シ併セテ各種ノ試驗ヲ行ヘリ、明治十九年北海道廳ヲ置カル、ヤ漸次官業ヲ民業ニ移スノ方針ヲ採リ、二十一年大野村養蠶場ヲ侯爵徳川義禮ニ拂下ケ、札幌養蠶場所在地ハ其位置病院敷地ニ適セルノ故ヲ以テ之ニ使用セララル、ニ決シ、翌二十二年札幌區ニ蠶室及貯桑室ヲ新築シ改メテ札幌蠶業傳習所ト稱シ爾來改稱ヲ重ネテ今日ニ及ヘリ左ニ更ニ本支場ニ就キ略述セン

一 北海道農事試驗場本場

明治三十四年四月、國費ヲ以テ札幌ニ北海道農事試驗場ヲ設置セラレ、三十五年ヨリ試驗事業ニ著手セリ、四十一年農事指導區域ノ定メラル、ヤ當場ニ第二農區駐在技術員ヲ駐在セシメラル、四十三年度ニ至リ本道農事試驗機關ノ連絡統一セラル、ニ及ヒ、其本場トシテ大ニ事業ヲ擴張セラレタリ

二 北海道農事試驗場上川支場

明治二十二年上川郡旭川町一條通ニ設置セラレタルモノニシテ、當時上川農事試作場ト稱シ、地積約五町歩ヲ有シタリ二十八年水田ニ反歩ヲ開發シ翌年始メテ稻作試驗ヲ行フ、三十年鐵道名寄線ノ敷設セララル、ヤ恰モ其線路敷地ニ當レルヲ以テ旭川町六條通ニ約十六町歩ノ地ヲ相シテ移轉シ、三十四年十月地方費所屬トナリ、府縣農事試驗場規程ニヨリ北海道廳地方農事試驗場ト改メ、三十七年四月旭川市街ノ膨脹ニ伴ヒ現今ノ位置ニ移轉セリ、四十一年北海道廳立上川農事試驗場ト改稱セラレ、第三農區駐在技術員ヲ置カル、四十三年四月國費所屬トナリ其組織ヲ改メテ現今ノ名稱トナレリ

三 北海道農事試驗場十勝支場

明治二十七年北海道廳ニ於テ十勝測候所ニ命シ農作物ノ試作ヲ行ハシメタルハ、抑モ當地方ニ於ケル農事試驗ノ嚆矢ニシテ、二十八年四月新ニ地ヲ河西郡帶廣村ニ相シ、國費ヲ以テ十勝農事試作場ヲ設置セララル、是レ實ニ當場ノ起源ナリ、三十四年地方費所屬トナリ北海道廳地方農事試驗場十勝分場ト改稱セラレ、三十九年附屬高丘試驗地ヲ札内原野ニ置キ、四十年當場内ニ於テ模範農場經營ヲ開始ス、此ノ歳農事指導員ノ分擔區域ヲ定メラル、ヤ當場ニ第四農區駐在技術員ヲ置カル、四十一年北海道廳立十勝農事試驗場ト改稱セラレ、四十三年四月國費所屬トナルニ及ビ其組織ヲ改メテ現今ノ名稱トナレリ

四 北海道農事試驗場北見支場

當場ハ明治四十年五月地方費ヲ以テ設置セラレ、當時北海道廳地方農事試驗場北見分場ト稱シ、四十一年四月北海道廳立上川農事試驗場北見分場ト改稱セラレ、四十三年四月國費所屬トナルニ及ヒ其組織ヲ改メテ現今ノ名稱トナレリ、第五農區駐在技術員駐在ス

五 北海道農事試驗場渡島支場

明治四十二年地方費ヲ以テ設置セラレ、當時北海道廳立渡島農事試驗場ト稱シ、四十三年四月國費所屬ニ移換セララル、ニ及ヒ其組織ヲ改メテ現今ノ名稱トナレリ、第一農區駐在技術員ヲ置カル

六 北海道農事試驗場蠶業講習所

明治八年開拓使ニ於テ札幌濱益通(現今北一條西八丁目)ニ札幌養蠶場ヲ設置シタルヲ本所ノ濫觴トス、明治十五年三縣分治ノ制ヲ布カル、ヤ養蠶場ハ農商務省ノ主管ニ移リ、十九年更ニ北海道廳ノ主管ニ移ツル、明治二十二年四月現今ノ位置ニ轉シ、札幌蠶業傳習所ト改稱シ始メテ道内ヨリ傳習生ヲ募レリ、三十四年北海道地方費ノ實施ニ當リ地方費支辨ニ移サレ、府縣農事講習所規程ニヨリ北海道廳農事講習所ト改稱ス、三十七年四月空知郡市來知村ニ附屬桑園ヲ新設シ翌年事務所ヲ設ケ技手一名ヲ在勤セシム、四十一年一月北海道廳立札幌農事講習所ト改メ、四十三年四月國費所屬トナリ其組織ヲ改メテ現今ノ名稱トナレリ

二 目的及所在地

本道農産ノ増殖改良ニ關スル各種ノ試驗竝ニ調査ヲ行ヒ其結果ヲ廣ク一般農家ニ知ラシメ、傍ラ良好ナル種苗ヲ育成配布シ優良品種ノ普及ヲ圖ルヲ以テ主要ナル目的トシ、本場ニ於テハ専ラ普遍的ノ試驗及調査ヲ行フト共ニ、重要作物ニ關スル試驗竝ニ模範作ニ力ヲ致シ、支場ニ在リテハ各地方重要作物ニ關スル試驗竝ニ模範作ニ主力ヲ注ギ、蠶業講習所ニアリテハ育蠶栽桑ニ關スル試驗及調査ヲ行ヒ併セテ講習生ノ養成ニ從事ス、本支場ノ所在地左ノ如シ

本場

石狩國札幌區北十八條西十一丁目

イ、泥炭試驗地

石狩國札幌郡琴似村宇發寒

ロ、火山灰試驗地

膽振國勇拂郡安平村宇早來

ハ、園藝試驗地

石狩國札幌郡琴似村

ニ、委託及輪作試驗地

本試驗地ハ其目的農事試驗機關ノ設置ナキ地方ニ對シ作物ノ適否耕作ノ模範及合理的輪作試驗等ヲ行ヒ其成績ヲ直接農民ニ示スニアルヲ以テ其位置ハ隨時變更ス

上川支場

石狩國上川郡永山村

十勝支場

十勝國河西郡帶廣村

附高丘地試驗地

十勝國幸震郡幸震村

北見支場

北見國常呂郡野付牛村

渡島支場

渡島國龜田郡大野村

蠶業講習所

石狩國札幌區北一條西十九丁目

附市來桑園

石狩國空知郡三笠山村宇來知

三 組織

現行北海道農事試驗場ノ組織ハ左ノ如シ

一 北海道農事試驗場規程

第一條 北海道農事試驗場ハ左ノ事務ヲ掌ル

農産増殖改良ニ關スル試驗

農業上ニ關係アル物料ノ分析鑑定及調査

種苗配付

講話及講習

第二條 北海道農事試驗場ニ左ノ職員ヲ置ク

場長

技師

屬手

技師

第三條 場長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ北海道廳長官ノ指揮監督ヲ承ケ場中全般ノ事務ヲ掌理ス

第四條 技師技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ場務ニ從事ス

第五條 屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第六條 北海道廳長官ハ必要ト認ムル地ニ北海道農事試驗場支場ヲ置キ本場ノ事務ヲ分掌セシム

第七條 北海道農事試驗場ニ蠶業講習所ヲ置キ蠶業ニ關スル試驗及講習ヲ爲サシム

第八條 北海道農事試驗場支場ニ支場長蠶業講習所ニ所長ヲ置ク

第九條 北海道農事試驗場同支場及蠶業講習所ノ位置及名稱ハ別ニ之ヲ告示ス

二 北海道農事試驗場事務分掌規程

第一條 北海道農事試驗場本場ニ種藝部、農藝化學部、病理昆蟲部及庶務部ヲ置キ場務ヲ分掌セシム

第二條 種藝部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

- 一 普通作物並ニ特用作物ノ試験ニ關スルコト
- 二 園藝作物ノ試験ニ關スルコト
- 三 模範作ニ關スルコト
- 四 耕地(火山灰地泥炭地等ヲ含ム)及農具ノ改良ニ關スルコト
- 五 委託試験ニ關スルコト
- 六 農事調査ニ關スルコト
- 七 種苗育成及配布ニ關スルコト
- 八 實習生ニ關スルコト

第三條 農藝化學部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

- 一 土壤ノ試験及調査ニ關スルコト
- 二 肥料ノ試験及調査ニ關スルコト
- 三 農作物及農産物ノ化學的研究ニ關スルコト
- 四 農産物製造ニ關スルコト
- 五 農業上ニ關係アル物料ノ分析及鑑定ニ關スルコト

第四條 病理昆蟲部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

- 一 植物病害ノ試験及調査ニ關スルコト

二 害益蟲ノ試験及調査ニ關スルコト

三 雜草ニ關スルコト

四 種苗鑑定ニ關スルコト

第五條 庶務部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

- 一 職員ノ身分進退ニ關スルコト
- 二 官印及場印ノ保管ニ關スルコト
- 三 公文書類ノ接受發送及保管ニ關スルコト
- 四 會計ニ關スルコト
- 五 報告書ノ編纂及刊行ニ關スルコト
- 六 他部ノ主宰ニ屬セサル事項

第六條 北海道農事試驗場支場ニ於テハ左ノ事項ヲ掌ル

- 一 管内ニ於ケル重要農作物ノ試験ニ關スルコト
- 二 模範作ニ關スルコト
- 三 耕地及農具ノ改良ニ關スルコト
- 四 委託試験ニ關スルコト
- 五 農事調査ニ關スルコト
- 六 種苗及種卵ノ配布ニ關スルコト
- 七 支場員ノ身分進退ニ關スルコト
- 八 官印及支場印ノ保管ニ關スルコト
- 九 公文書類ノ接受發送及保管ニ關スルコト

十 會計ニ關スルコト

第七條 北海道農事試驗場蠶業講習所ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

- 一 桑樹ノ試驗及調査ニ關スルコト
- 二 蠶兒飼育試驗及調査ニ關スルコト
- 三 蠶病ノ試驗及調査ニ關スルコト
- 四 製絲ニ關スルコト
- 五 蠶種桑苗ノ配付ニ關スルコト
- 六 講習生ニ關スルコト
- 七 所員ノ身分進退ニ關スルコト
- 八 官印及所印ノ保管ニ關スルコト
- 九 公文書類ノ接受發送及保管ニ關スルコト
- 十 會計ニ關スルコト

第八條 左ニ掲クル事項ハ各其主管ニ於テ之ヲ分掌ス

- 一 講話及講習ニ關スルコト
- 二 質疑應答ニ關スルコト

三 北海道農事試驗場本支場員一覽表 (大正二年現在)

場	技師	屬	技手
本場	三		一
上川支場	一		二
十勝支場	一		三

北見支場
渡島支場
蠶業講習所

四 經費

北見支場	一
渡島支場	一
蠶業講習所	八
合計	一一
同三十九年度	二
同四十年年度	一
同四十一年度	三
同四十二年度	二

明治三十八年ヨリ同四十二年ニ至ル各農事試驗場ノ經費ヲ示セハ左ノ如シ

國費

年度	經費
明治三十八年度	九,一九〇,〇〇〇
同三十九年度	一,一三七,〇〇〇
同四十年年度	一,三六二,〇〇〇
同四十一年度	一,五二八,〇〇〇
同四十二年度	一,四六三,〇〇〇

地方費

年度	上川農事試驗場費	十勝農事試驗場費	北見分場費	渡島農事試驗場費	農事講習所費	農事試驗委託費	計
明治三十八年度	四,五二八,六七九	四,一九七,三三三			一,〇〇七,五三三	一,〇〇六,六七〇	一,九八〇,八〇四
同三十九年度	五,二八〇,四二四	五,三〇五,〇六三			九,九一六,六五〇	九,八一五,二二七	二,四三三,六六四
同四十年年度	五,六七八,五七四	五,八九二,一六一			九,九一五,六五三	一,六二二,五三七	二,五七五,六六七
同四十一年度	八,〇八八,〇〇〇	七,四二二,〇〇〇			一〇,二四三,〇〇〇	一,六三三,〇〇〇	三,〇五一七,〇〇〇
同四十二年度	五,九八八,〇〇〇	七,四二二,〇〇〇			一五,二四三,〇〇〇	七,九三,〇〇〇	三,五九七,〇〇〇

更ニ明治四十三年度地方費試驗場費ノ國費移換後大正二年度ニ至ル本支場經費ヲ示セハ左ノ如シ

蠶業講習所	北見支場	渡島支場	十勝支場	上川支場	本場	年度			
						明治四十三年度	同四十四年度	大正元年度	同二年度
事務費	事務費	事務費	事務費	事務費	事務費	計業務		計業務	
						給	費	給	費
52,700	26,500	15,300	8,150	6,385	3,600	96,800	97,940	120,200	109,600
5,380	4,220	1,700	7,638	6,536	2,800	58,650	58,650	57,689	53,050
5,306	4,060	1,060	1,388	6,936	2,988	93,300	93,300	89,200	89,200
48,750	46,470	5,510	8,488	6,342	3,510	112,180	112,180	112,180	112,180

事業費	年度			
	明治四十三年度	同四十四年度	大正元年度	同二年度
124,000	134,200	134,480	133,170	

五 事業要目

本場及各支場ニ於ケル事業ノ要目ヲ舉クレハ左ノ如シ

一 本場

- (一) 種藝及園藝ニ關スル試験
 - イ、重要農作物品種試験
 - ハ、種子ニ關スル試験
 - ホ、收穫ニ關スル試験
 - ト、豊凶考照試験
 - リ、委託試験
- (二) 農藝化學ニ關スル試験
 - イ、土壤及肥料ニ關スル試験
 - ハ、農産製造ニ關スル試験
- (三) 病理及昆蟲ニ關スル試験
 - イ、農作物病害及雜草驅除豫防ニ關スル試験
 - ロ、農作物害蟲驅除豫防ニ關スル試験
- (四) 模範作 標準栽培法ニヨリ重要作物ノ良品種ヲ栽培シ以テ耕種ノ範ヲ示スモノトス
- (五) 農事調査

- イ、重要農作物品種及分布ニ關スル調査
- ハ、特殊土壤ニ關スル調査
- ホ、土地改良ニ關スル調査
- ト、農作物害益蟲ニ關スル調査
- ロ、水田用水量調査
- ニ、肥料及土壤ニ關スル調査
- ヘ、農作物病害及雜草ニ關スル調査
- (六) 種苗育成 從來試驗ノ結果良好ト認メタル重要作物ノ良品種ヲ育成シ原々種トシテ町村又町村農會ニ配付シ果樹苗木ハ一般農家ニ配布ス
- (七) 新品種育成 本道重要作物ニ對シ偶發的變異利用法及純系分離法或ハ人工交種法ニヨリ新種ヲ作り更ニ最モ優良ナルモノヲ撰出シ以テ各作物ノ改善ヲ圖ラントス
- (八) 農事指導 試驗並ニ研究ノ結果ヲ廣ク本道農民ニ知ラシメンカ爲メ適當ナル時季ニ篤志農家ヲ本場ニ集メ實地ニ就テ講話ヲ爲スノ外各地ニ場員ヲ派シテ講習講話又ハ實地指導ヲ爲サシメ或ハ印刷物ヲ刊行シテ廣ク一般農家ニ配布ス
- (九) 農事實習生養成 甲種農學校卒業者若クハ之ト同等以上ノ學力アルモノニシテ本道ニ於テ農業ニ從事スルノ志望確實ナルモノヨリ實習生ヲ募リ農事ニ關スル實務ヲ練習セシム
- (一〇) 依頼分析並ニ鑑定 公衆ノ依頼ニ應ジ土壤、肥料及農産ニ關係アル物料ノ分析並ニ種苗鑑定ヲ行フ
- 二 上 川 支 場
- (一) 普通畑作ニ關スル試驗及調査
- (二) 田作ニ關スル試驗及調査
- (三) 模範作
- (四) 種苗及種卵ノ配布
- (五) 講話及講習

三 十 勝 支 場

- (一) 普通畑作ニ關スル試驗及調査
- (二) 田作ニ關スル試驗及調査
- (三) 高丘地ニ關スル試驗及調査
- (四) 模範作
- (五) 模範農場經營
- (六) 種苗及種卵ノ配布
- (七) 講話及講習
- 四 北 見 支 場
- (一) 普通畑作ニ關スル試驗及調査
- (二) 田作ニ關スル試驗及調査
- (三) 薄荷製造ニ關スル試驗及調査
- (四) 模範作
- (五) 種苗配布
- (六) 講話及講習
- 五 渡 島 支 場
- (一) 普通畑作ニ關スル試驗及調査
- (二) 田作ニ關スル試驗及調査
- (三) 重要果樹蔬菜ニ關スル試驗及調査
- (四) 模範作

(五) 種苗配布
(六) 講話及講習

六 蠶業講習所

- (一) 講習生ノ養成 生徒定員ハ本科四十名、別科二十名、修業期間ハ本科二ケ年、別科八ヶ月ニシテ、本科ハ蠶業ノ學理ト實地トヲ教ヘ、別科ハ同ク簡易ナル學理ト實地トヲ授ケ以テ將來蠶業ニ關スル實務ニ當ラシメントシ、兩者共ニ學資補助トシテ一ヶ月金六圓ヲ給與ス、卒業後本科ハ四ケ年、別科ハ二ケ年間本道ニ於テ蠶業ニ従事スル義務アルモノトス
- (二) 栽桑ニ關スル試驗及調査
- (三) 育蠶ニ關スル試驗及調査
- (四) 蠶病ノ試驗及調査
- (五) 模範桑園ノ經營
- (六) 桑苗及蠶種ノ配布

六 事業成績

北海道農事試驗場創立以來既ニ十星霜ヲ閱シ其間力ヲ諸種ノ試驗及調査ニ注キ成績ノ舉レルモノ甚タ多ク又廳立各農事試驗場ノ北海道農事試驗場支場タルニ至リテヨリ日向淺シト雖モ幸ニシテ成績ノ見ルヘキモノ亦乏シカラス本道農業ノ發展ニ貢獻スルトコロ蓋シ甚タ大ナルモノアリ今最モ顯著ナル試驗調査其他事業成績ノ要旨ヲ録スレハ次ノ如シ

一 重要農作物ニ關スルコト

從來行ヒタル試驗ノ結果收量品質共ニ優良ニシテ本道ノ各地ニ適スト認メタル重要農作物ノ良種ヲ舉クレハ左ノ如シ
 稻 本道ニ於ケル主ナル米作地ハ渡島、石狩ノ二國ニシテ、渡島國ニ於ケル米作ノ起源ハ遠ク二百餘年前ニアルモ、石

狩國ニ於テ之ヲ行フニ至リシハ近年ノ事ニ屬シ殊ニ本道中最モ米作ニ適セル上川地方ノ如キハ水田ノ開發勃興以來未ダ二十年ニ滿タス、而シテ渡島國ニハ古來奥羽地方ヨリ移入セル稻種ノ外、篤農家ノ選出セルモノ若干アリテ比較的多數ノ品種アリ石狩國ニ於ケル現時ノ主要品種ハ僅々二三種ニ止リ悉ク早熟種ニ屬セリ、即チ上川地方ニ於テハ「坊主」種主位ヲ占メ「赤毛」種「黑毛」種之ニ亞キ、札幌地方其他ハ「赤毛」種ヲ本位トス、此等ノ稻種中「赤毛」ハ札幌地方ニ於テ最モ早クヨリ栽培セラレタル良種ニシテ渡島國以外ニ於テ米作ノ行ハル、ニ至リシハ一ニ此稻種アリシニヨルノミナラス「坊主」「黑毛」等ノ良品種ヲ分生セル等、本道米作上多大ノ功績アル品種タリ
 本道産米ハ概シテ小粒ニシテ光澤ニ乏シキ等府縣産ノモノニ比シ遜色アルヲ免レズト雖モ渡島地方産ノ米ニ至テハ其品質頗ル優良ニシテ、上川地方ノ如キ亦近年良品ヲ出スニ至レリ
 今本道ノ各方面ニ適スル良種ヲ示セハ左ノ如シ

品 種 名	摘 要
有 芒 種 赤 毛	本道ノ大部ニ適スル優良種ナリ
無 芒 種 坊 主	稻熱病ノ被害少キ品種ナリ
水 稻	
有 芒 種	
魁 毛	赤毛ニ比シ早熟種ヲ要スル地方ニ獎勵スヘキモノ
十 勝 黑 毛	
井 越 早 稻	
松 田 早 稻	渡島地方ニ獎勵スヘキモノ但シ必ス二種或ハ三種ヲ共ニ栽培セシムル様注意ヲ要ス
津 輕 早 稻	

大麥 本道ニ於テ二角種、六角種共ニ栽培セラレニ角種ハ主トシテ麥酒釀造用トシテ消費セラル、外多少食用トシ六角種ハ専ラ食用ニ供セラル孰レモ春蒔ヲ普通トス優良品種ト認メタルモノ左ノ如シ

品種名 摘要

大麥

春蒔二角種

ゴールデンメロン 莖強健倒靡ノ患少ナシ

二角シユヱアリエー 冷氣ニ堪ユル力強ク優良ナル醸造用ノ大麥ナリ

ハ ン ナ 栽培シ易キ醸造用大麥ナリ

エバンダイユ 莖短矮ニシテ倒靡ノ患少ナク本道北部ノ氣候ニ適ス

シユワンハルス 熟期早ク豊産ナリ檜山地方ニ最モ適ス

春蒔六角種

エルハルト、フレデリックセンズ 莖長大ニシテ稍ヤ弱キモ收量品質共ニ優良ナリ

裸麥 食用トシテ本道各地ニ栽培セラレ其耕作反別ハ燕麥ノ次位ヲ占メ大麥及小麥ノ耕作反別ヲ合シタルヨリモ遙ニ多シ本道ニ於テ優良種ト認メタルモノ左ノ如シ

品種名 摘要

丸 實 收量多ク子實豊圓ナリ

兩 莖強健ナリ

小麥 本道氣候風土ハ小麥ノ栽培ニ適シ到ル所良品ヲ産セサルナク其品質概シテ府縣産ノモノニ勝リ頗ル製粉用ニ適セリ秋蒔春蒔共ニ行ハル、モ春蒔種ハ品質收量共ニ秋蒔種ニ及ハス優良品種ハ左ノ如シ

品種名 摘要

小麥

秋蒔種

マーチンズ、アムバー 冬損ノ患少シ

ドートンズ、ゴールデンチャップ 莖強健豊産ナリ

春蒔種

札幌春小麥

ミネソタ百六十三號

燕麥 本道特産ノニニシテ麥類中耕作反別最モ多ク家畜特ニ馬匹ノ飼料トシテ麥類ニ冠タルノミナラス人ノ食用トシテ

亦可ナリト雖トモ目下専ラ陸軍用馬糧ニ供セラレ又莖稈ハ藁ノ代用品トシテ俄ノ製造ニ用ラル

本道ニ於ケル燕麥ハ始メ其種子ヲ米國ヨリ輸入セルモノニシテ現時農家ノ栽培スルモノ數品種アリ孰レモ春蒔ナリ優良品種ト認メタルモノ左ノ如シ

品種名 摘要

燕麥

總狀穗種

一粒付ノ

ナイヤガラ 莖強ク豊産ナリ

二粒付ノ

ホワイトベルジウム 莖強シ

ホリス、ホース 莖稈稍弱

片穗種

二粒付ノ

アメリカン、クライデスデール 莖強ク豊産ナリ

ロングス、ホワイト、ターター 莖特ニ粗剛ナルニヨリ特別ノ地方ニ限リ獎勵スヘキモノナリ

玉蜀黍 コレ亦本道特産ノ一ニシテ明治初年ニ種子ヲ米國ヨリ輸入セシ以來各地普通ニ之ヲ栽培シ生食ニ供スルノ外馬糧ニ用ユ、酒精釀造ノ原料ニ供シ又多少米ニ代用スル等其用途頗ル多シ

現時本道ニ栽培スル硬粒種(Flint corn)ヲ最トシ甘味類(Sweet corn)燻發種(ハセキビ)Pop corn)ハニ亞キ粉質種(Starch corn)亦多少栽培セラル馬齒種(Dent corn)ハ熟期遅ク成熟不充分ナリ優良品種左ノ如シ

品種名 摘要

品種名 摘要

玉蜀黍

ロング、フエロー 硬粒種ニシテ種實黃色八行種ニシテ本道ニ最適スル良種ナリ

札幌八行 同

ゴールデン、バンダム 甘味種ニシテ生食ニ最適セル良種ナリ

白色八行 硬粒種ニシテ種實白色代用米ニ適スト稱セラル

大豆 本道重要作物ノ一ニシテ諸作物中耕作反別最モ多シ品種頗ル多シト雖トモ其優良種ハ左ノ如シ

品種名

摘

要

大豆

大豆 品種名

- 大谷地 早熟種ニシテ豊産ナリ
- 赤莢 中熟種ニシテ豊産ナリ
- 白小莢 早熟種ニシテ豊産ナリ
- 甘露 本道南方暖地ニ獎勵スヘキモノナリ
- 鶴ノ子 同
- 中生黒大豆 豊産ナリ
- 吉岡大粒 早熟種ニシテ收量稍小サキモ品質良好ナリ

小豆

小豆 品種名

- 小豆ハ大豆ト共ニ本道作物中重要ナル位置ヲ占メ其耕作反別ハ大豆ニ亞ケリ優良品種左ノ如シ

小豆

小豆 品種名

- 圓葉 早熟種ニシア品質良好ナリ
- 劍先 同
- 早生大納言 晩熟種ニシテ本道南方温暖ノ地方ニ適ス
- 早生大粒 最早熟種ヲ要スル地方ニ獎勵スヘキ限定品種ナリ
- 茶殻早生 同
- 早生圓葉 同

蕎麥

蕎麥 品種名

- 蕎麥ハ本道各地ニ栽培セラル、重要作物ニシテ優良品種左ノ如シ
- ハムブルグ 晩熟洋種ニシテ子實豐圓品質良好ナリ
- 尻別 早熟種ニシテ子實極メテ小ナリ

薄荷

薄荷 品種名

- 赤丸

最モ普通ニ栽培セラル

亞麻

亞麻 品種名

- ベルギー
- ベルノ

茶葉

茶葉 品種名

- 黄色中形(エロイインタ、メヂエイト) 家畜用

胡蘿蔔

胡蘿蔔 品種名

- ベルギー大白(ライジホワイト、ベルギアン) 同

燕青

燕青 品種名

- 札幌白 人畜兩用
- 札幌紫 同

瑞典燕青

瑞典燕青 (センダイ燕青) 同

牧草

牧草 品種名

- チモシー、オーチャード、グラス。ケンタツキ、プリユググラス
- メド、フオックス、テール、トール、オートグラス。レッド、トツ
- オインレツス、ブロムグラス。レッド、クロバ。ホワイト、クロバ。ルース

重要農作物ノ耕種法

重要農作物ノ耕種方法ニ關シ從來試驗ノ結果ヨリ得タル所ヲ表示スレハ左ノ如シ

種類	播種法	播種期	播種法	畦巾	株間	反當播種量	反當肥料	耕耘	收穫期
大麥	撒播	融雪早々	播	一尺五六寸		四五〇	過堆五百貫	約孕三回迄	自七月中旬至八月中旬
燕麥	撒播	融雪早々	播	一尺五六寸		六〇	過堆五百貫	約孕三回迄	自七月中旬至八月中旬
秋麥	撒播	九月上旬	播	一尺五六寸		四五〇	過堆五百貫	約孕三回迄	自七月中旬至八月中旬
玉蜀黍	撒播	五月上旬	撒	一尺七八寸	一尺五寸	三〇	過堆五百貫	出穂後迄約三回迄	自九月中旬至十月上旬
大豆	撒播	五月中旬	撒	一尺七八寸	四寸	三五〇	過堆五百貫	開花前迄約三回迄	自九月中旬至十月上旬
菜豆	撒播	融雪早々	撒	一尺七八寸	四寸	五〇	過堆五百貫	同	自九月中旬至十月上旬
豌豆	撒播	融雪早々	撒	一尺五六寸	同	四〇	過堆五百貫	同	自九月中旬至十月上旬
蕎麥	撒播	九月下旬	播	一尺五六寸		〇	過堆五百貫	花前迄二回迄	七月下旬

蔓性種

札幌黒目 收量多ク性强健ナリ
日本赤 同

玉葱

本道ニ於テ最モ廣ク栽培セラル

甘藍

早熟種ニシテ球形扁圓ノ良種ナリ

アイリリー、スプリング
メーン、ステーアイリリー

アイリリー、サムマー

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

（パーピース、ラビッド、レッド）

（人畜兩用）

（人畜兩用）

二十日大根

ロング、スカレット、ターニツブ
アイリリー、ロングシヨルト、トツブ

南瓜

比較的豊産ナラザルモ其皮薄ク味殊ニ美ナリ

ハツバート

デリシヤス

札幌太葱

千住葱

札幌

クオター、センチュリー

早生千成

早生山茄

果

樹

品

種

名

紅魁。エロー、ツランスペーレント

祝。旭。黄龍

紅玉。柳玉。鳳凰卵。緋ノ衣。青龍。國光。紅斜子。赤龍

早熟種

中熟種

第一 農事試驗場

耐寒性苹果

苹果ハ一般ニ寒地ニ適スト雖モ其間自ラ寒氣ニ對スル強弱ナキ能ハス本場ノ調査ニヨリ本道中特ニ酷寒地方ニ適スト
認メタル良種ハ左記品種ナリトス

早熟種

中熟種

第一 農事試驗場

紅魁。エロー、ツランスペーレント

旭。紅絞

第一 農事試驗場

種類	移植期	株間	肥料	剪定	收穫	摘	要
洋梨	同	四間ニ四間	結果初メノ幼木一本ニ付(下)三升(過)百八十匁 苹果ニ準ス	同	八月下旬ヨリ	同	
櫻桃	同	同	一株ニツキ(下)一升(過)三十匁	十二月前後	七月中旬ヨリ		
葡萄	同	南北四五尺	同	又八月下旬	八月下旬ヨリ		
須貝	同	四方四尺	同	又十月下旬	九月初旬ヨリ		
草	又四月中旬 又八月月上旬	畦間一三二尺	一畝ニ付(下)三斗(過)二貫	五月ヨリ十月迄 庭々草切テ行フ	六月下旬ヨリ		

備考 「下」ハ下肥「過」ハ過磷酸石灰ノ略

三 新品種育成ニ關スルコト

數多ノ農作物品種中多年ノ試驗ニヨリ優良品種ノ確定セルモノ前記ノ如シト雖モ然レトモ稔弱クシテ倒レ易キカ如キ或ハ收量豐多ナルモ熟期稍遅キカ如キ等概ネ多少ノ欠點アルヲ免レス故ニ此等ノ缺點ヲ改善シ更ニ優秀ナル品種ヲ育成スルハ本道農業上頗ル緊要ナル事項ニ屬セリ故ニ先ツ之カ改良ノ方法トシテ本道重要農作物タル麥類大小豆水稻等ヲ一粒播トシ其植物學の標徴及品質ヲ精檢シ良株ヲ分離シ之ヲ他ノ品種ト交配セシメ若シクハ系統的ニ栽培シ以テ早熟豐産ニシテ品質良好且ツ耐病性ニ富メル新品種ヲ育成スルノ外偶然變化ニヨリ表現スル良種ノ發見ニ勉メ以テ其目的ヲ遂行センコトヲ期セリ今育種ニ關スル試驗及調査中既ニ解決ヲ告ケタル事項ヲ舉クレハ左ノ如シ

大小豆ノ受精ニ關スル調査 大小豆ノ花ハ所謂蝶形花冠ニ屬シ昆蟲ヲ招致スルニ適スルモ實際昆蟲ノ媒介ニヨリ受精スルヤ否ヤ若シ果シテ昆蟲ノ媒介ニヨリ受精スルモノトセハ異品種ヲ接近シテ栽培スルトキハ自ラ雜種ヲ生シ品種ノ純粹ヲ失フノ恐レアリ隨ヒテ白花受精ヲ行フト他花受精ヲ行フトノ區別ハ育種上密接ナル關係アルヲ以テ此ノ點ニツキ調査シタルニ大小豆共ニ開花ニ先タチ雄蕊ハ既ニ成熟シテ花粉ヲ放チ雌蕊ニ附著セシムルヲ以テ受精上昆蟲ノ媒介ヲ要スルコトナク受精ノ既ニ結了セル後ニ開花スル順序ナルヲ明ニシ觀察ヲ確メンカタメ大小豆ノ嫩花各十數箇ヲ「バラフキン」紙製

ノ袋ヲ以テ被ヒ昆蟲ノ飛來ヲ防キシニ何レモ完全ニ結實セリ

小豆品種ノ分類ニ關スル調査 小豆ノ品種ハ其諸部ニ赤紫色ヲ帶フルト帶ハサルトニヨリ之ヲ二班ニ區別スルヲ得即チ多クノ赤小豆、白小豆等ハ莖葉莖苞等ノ諸部純綠色ニシテ花瓣ハ黃、黒小豆、斑小豆等ハ諸部赤紫色ヲ帶ヒ花瓣ノ如キモ地色ハ黃色ナレトモ其外面ニハ紫暈アリ而シテ以上諸部ノ毛茸ヲ檢スルニ品種ニヨリテ其形狀一定シ先端ノ鋭尖ナル毛茸ヲ有スルモノト先端鈍圓ナル毛茸ヲ有スルモノトアリ其長短大小ハ部分ニヨリ異ナレトモ二種ノ毛茸相混スルコトナシ

小豆ニ於ケル遺傳現象調査 小豆ニ於ケルメンデル式分離遺傳トシテ判明セルモノ左ノ如シ

毛茸ノ形狀ノ遺傳 鋭尖毛ヲ有スル品種ト圓頭毛ヲ有スル品種トヲ交種セシムルトキハ第一代ノ小豆ハ悉ク鋭尖毛ヲ有スルモ第二代ニ於テハ鋭尖毛ヲ有スルモノ三株ニツキ圓頭毛ヲ有スルモノ一株ヲ生ス

葉形ノ遺傳 劍先型ノ葉ヲ有スル品種ト圓葉型ノ葉ヲ有スル品種トヲ交種セシムルトキハ第一代ノ葉ハ悉ク劍先型ナリ然レトモ第二代ニ至レハ劍先型ノ葉ヲ有スルモノ三株ニツキ圓葉型ノ葉ヲ有スルモノ一株ヲ生ス

四 土壤及肥料ニ關スルコト

本道耕地ノ多クハ新開ニ屬シ比較的地味肥沃ナルノ故ヲ以テ農家施肥ノ念ニ乏シク漸ク收穫ヲ減シ遂ニ地力ノ耗竭ヲ訴フルニ至ルモノ少ナカラス從來試驗ノ成績ニ徴スルニ本道ノ土壤ハ概シテ有効加里分ニ富メルモノ、如ク加里肥料ノ奏効顯著ナラサルモ窒素及磷酸ノ二成分ニ至リテハ其肥効極メテ多ク各種作物ニ對シ基本肥料トシテ施用獎勵セラル、厩肥ニ關シ本場施行ノ試驗成績ニ依レハ厩肥舍内堆積ノモノハ之ヲ掘立小屋内堆積若クハ屋外堆積ノモノニ比シ其含有要肥分ノ量著シク多ク屋外堆積ノモノ、如キハ之ヲ前者ニ比スレハ殆ント其肥料價值ヲ半減シ肥効ノ持續ハ二ケ年ニ亘リ著シキモノアリ普通作物ニ對シ三百貫乃至五百貫ヲ施用スルヲ以テ適量トスルヲ認メタリ而シテ本道ニ於ケル一農家ノ耕作反別ハ比較的廣大ナルヲ以テ一二頭ノ役畜飼養ヨリ産スル厩肥、堆肥ノミニテハ尙ホ地力ノ維持上困難ナルヲ免レサルヲ以テ綠肥ヲ以テ之ヲ補フノ必要アリトス

綠肥トシテハ青荳大豆、青荳クロバ、青荳野草等各其肥効顯著ニシテ作物ニ吸收セラル、要肥分ノ割合三割乃至六割ニ

及フヲ認メタリ而シテ此等ノ中大豆ヲ間作スルハ最モ簡便ニシテ其法夏作成熟前ニ畦間ニ反當一斗内外ノ割合ヲ以テ種子ヲ播下シ主作物ノ收穫後充分生育繁茂セシメ秋期之ヲ鋤込ムモノトス

磷酸肥料トシテ其肥効最モ顯著ナルヲ過磷酸石灰トス過磷酸石灰ハ各作物ニ對シ奏功大ナルモ之カ單用ハ往々惡結果ヲ來スコドアルヲ免レサルヲ以テ特殊ノ場合ヲ除クノ外ハ必ス厩肥堆肥ト配合施用スヘキモノニシテ其配合量ハ厩肥三百貫ニ對シ三貫乃至六貫ヲ施用セルモノ收量最モ多キヲ見タリ

又土壤ノ酸性ハ農作物ノ生産ニ至大ノ影響ヲ及ホスモノニシテ甚シキモノニ至リテハ全ク作物ノ生育ヲ沮害スルモノナキニアラス如斯土性ノ地亦本道ニ乏シカラスシテ之カ調査ハ今尙ホ繼續施行中ニ屬スルモ從來ノ調査成績ニ徴スルニ壽都郡黒松内、歌棄郡熱郭、磯谷郡南尻別、岩内郡發足、余市郡赤井川、虻田郡俱知安、同郡東俱知安、同郡眞狩、同郡狩太、空知郡岩見澤、同郡砂川、同郡江部乙、同郡歌志内、同郡芦別、同郡瀧川、上川郡當麻、同郡神樂、同郡東旭川、同郡美瑛、同郡鷹栖、同郡比布、同郡永山、龜田郡厚岸内、石狩郡厚田濱益地方、雨龍郡一已秩父別地方、天鹽國上川郡多寄、士別、上名寄、中川郡下名寄、苫前郡天鹽、燒尻、初山別、留萌郡留萌、鬼鹿、天鹽郡天鹽、遠別、増毛郡増毛、釧路郡釧路、厚岸郡厚岸、北見國宗谷郡宗谷、稚内、禮文郡香深、枝幸郡枝幸、根室國花咲郡婦羅理、冲根郡、瑤瑤瑠、目梨郡植別、千島風連別、藥取等各地ニ亘リ強酸性ノ土壤ヲ見ルモ其他ノ地方ニ在リテハ未タ其甚シキモノアルヲ見ス

酸性被害ハ土壤全酸度ニ相當スル石灰ヲ施用シ酸性ヲ中和スルニ依リ能ク除害ノ目的ヲ達スルコトヲ得ヘシ酸性強烈ナル場合ニ在リテハ如何ニ多量ニ施肥スルモ土壤酸性ヲ中和スルニアラサレハ肥料ハ毫モ其肥効ヲ奏スルコト能ハサルモノノ如ク隨ヒテ酸性土壤ニ在リテハ之カ施肥法ニ留意ヲ要スルコト極メテ大ナルモノニシテ過磷酸石灰ノ如キ酸性肥料單用ノ如キハ土壤酸性ヲシテ益強烈ナラシメ作物ノ生育ヲ害スルニ至ルハ試驗成績ノ明示スル所ナリトス

本道ニ於ケル特殊土壤分布ノ豫察ノ調査ハ大正二年度ヲ以テ略決了ヲ告ケタリ(土地改良参照)

五 改良農具ニ關スルコト

本道農家ノ耕作面積ハ比較的廣大ナルヲ以テ其作業ハ馬力若クハ輕便ナル改良農具ヲ用ヒ一面勞力ノ節約ヲ圖ルト共ニ

迅速ニ事業ヲ遂行シ以テ其適期ヲ誤ラサランコトヲ肝要ナリトス左ニ單ニ人力ニヨルモノト馬力若クハ輕便改良農具使用トノ得失ヲ比較セル結果ヲ掲ケン

整地	一頭五分曳「ブラオ」及「ハロー」ニヨルモノ(縦横二回)男一日ノ功程	四反歩
	普通手起ニヨルモノ	一反歩
	「ブラオ」ニヨルモノ	八反歩
	人力(平鍬)ニヨルモノ	(同)
畦立	馬力畦立器ニヨルモノ	(馬鈴薯以外ノモノ)
	手引畦立器ニヨルモノ	(同)
	人力(平鍬)ニヨルモノ	(同)
	人力連播器ニヨルモノ	(薯蕷、麥類、其他類似作物)
播種	馬力畦立器及ラツバ播種器ニヨルモノ	(同)
	手播ニヨルモノ	(同)
	馬力耕耘ニヨルモノ	(馬の口取とも二人を要し其功程一町歩なるも熟練すれば一人にて一町歩を耕すべし)
中耕除草	人力單輪除草器	八畝歩
	人力(ホー)ニヨルモノ	六反歩
		五反歩
		一反五畝歩

六 模範農場ニ關スルコト

模範農場ハ本道ノ重要農業地タル石狩原野ニ於ケル畑作農業ノ模範ヲ示サンカ爲メ明治三十七年ヨリ六ヶ年間、普通農家(一戸五町歩)ヲ標準トシ男一人女二人、耕馬一頭ヲ以テ耕作セシメ、穀類ヲ主トシ傍ラ小家畜ヲ養ヒ専ラ試驗ノ成績ヲ應用シテ收入ヲ増スト共ニ改良農具ヲ用キテ經費ノ節約ニ努メタリ左ニ其平均一ヶ年ノ收支計算ヲ示サン

收入

作物種類	作付反別		反當收量	價額
	反別	收量		
蕎麥	四四	四四	一・九元	五九・三〇
大麥	四六	四六	一・九四	五八・八三
小麥	四五	四五	一・四一	五八・九五
燕麥	六七	六七	三・三三	五七・五七
玉蜀黍	六五	六五	一・八三	四八・二一
大豆	〇八	〇八	一・六六	八〇・二一
小豆	三九	三九	一・三四	四四・五三
菜豆	五〇	五〇	一・五二	五九・〇八
馬鈴薯	四六	四六	三〇・三三	一三・二九
間作	四六	四六	〇・七五	四二・〇八
物作	二六	二六	〇・七五	八〇・八
大蕎麥	四七	四七	〇・四七	一〇・四九
計	四六	四六	一・七三	五八・二一
猪				
雞				
雞卵				
計				
畜產收入				六〇・四〇
合計				

之ニ據レハ本農場ノ總收入ハ普通農家ノ總收入三百五十二圓七十七錢ニ比シ約六割三分ノ增收ニ當レリ

支出

資本額	支出	摘要
二四・七〇	六・六六	利子ハ收支相殺スヘキヲ以テ計上セス以下之ニ準ス
四二・七〇	六・六六	修繕料及償却資金
一三六・六四	二六・〇四	同上
二八・二八	九・三三	償却資金及雜費
二二・〇〇	三三・〇九	購入肥資代金
三六・六〇	二六・六〇	
五六・三三	五六・三三	
一三・五七	一三・五七	
一三・五七	四・一八	自家勞働賃銀ハ收支相殺スヘキヲ以テ計上セス
一三・五七	一三・五三	反別割、特別稅反別割及車稅
六七・三三	一七・一〇	
合計	一七九・一〇	

則チ本農場ノ方法ニ則リテ資本ト勞力トヲ投スルトキハ差引一ケ年ノ收得四百廿五圓卅錢ヲ舉ヘク之ヲ全部農家ノ勞銀ト見做シ勞働日數ニ割當ツルニ男ハ一日八十九錢女ハ六十七錢ニ相當セリ尙詳細ハ北海道農事試驗場報告第四號ニ就テ知ラ

七 蠶業ニ關スルコト

本道ハ到ル處野桑ニ富ミ氣候亦養蠶ニ好適シ飼育容易ニシテ蠶病少ナク加之本道製蠶種ハ甚タ強壯ニシテ其病斃蠶歩合ハ府縣輸入蠶種ニ比シ遙カニ少ナク又之ヲ府縣ニテ飼育スル時ハ著シク大巢トナリ絲量絲質共ニ豊美ナルモノヲ生スル等既ニ天然ニ於テ甚タ有利ノ位置ニアリ農家ノ副業トシテ益々蠶業ノ獎勵ヲ勉ムルハ蓋シ最モ必要ナル事業タルヲ失ハサルナリ從來蠶業講習所ニ於テ施行シタル試驗及調査成績中其ノ重要ナルモノ、要旨ヲ舉クレハ左ノ如シ

桑樹ノ撰擇ハ最モ重要ニシテ各種ノ野桑及府縣種ヲ栽植シ良種ノ撰擇ニ努メタルニ春蠶用トシテハ本道野桑ハ葉質稍劣等ナリト雖モ府縣種ニ適良ノモノナキヲ以テ野桑中葉面平滑ニシテ葉緣ノ裂刻甚シカラサルモノヲ供用スヘク夏蠶專用ト

シテハ年々梢條ノ枯損スルコトアルモ樹株ニシテ健全ナランニハ敢テ支障ナキヲ以テ府縣種ノ良種戻返ノ如キヲ用フヘシ
 栽植ノ深淺ハ氣候、土質、目的等ニヨリ異ナルト雖モ概シテ高木仕立ハ七寸乃至一尺根刈仕立ハ五寸乃至七寸ヲ以テ適度
 トシ栽植ノ距離ハ或程度迄近距離ヲ利アリトシ高木仕立ハ方九尺乃至十二尺、根刈及中刈仕立ハ畦間四尺乃至六尺、株間
 一尺乃至二尺ヲ以テ適當トス仕立法ニハ高木仕立、根刈仕立等アリテ數年前迄ハ高木仕立トナスモノ多ガリシモ高木ハ仕
 立ニ數年ヲ要シ收葉遲キヲ以テ根刈仕立トナスヲ宜シトス隨ヒテ高木仕立ノ老木今尙ホ各所ニ散在スルモ之ニ對シ改良法
 ヲ施ストキハ新稍長ク葉質良好ナルニ至ルモノニシテ春季發芽前頭伐法ニ依リテ其目的ヲ達シ得ルヲ確メタリ又桑苗ノ蕃
 殖法ニ關シ從來代出法ヲ以テ唯一ノ良法トナシタリト雖モ種木取法モ亦適法ナルヲ明カニシ桑苗輸送ノ時期ハ秋季落葉後
 ヨリ十一月下旬迄ヲ最適トスルヲ認メタリ

本道ニ於テ飼育セラル、蠶兒ノ種類少ナカラスト雖モ最モ好適セル良種ニ乏シク往々退化セルモノアルヲ以テカヲ良種
 ノ撰擇ニ注クト共ニ淘汰撰種法ニヨリテ種類ノ改善ヲ試ミツ、アルモ現在ニ於テハ一化性又昔、青熟、小石丸、二化性(夏
 蠶)白龍ヲ以テ良種ト認メタリ

本道ニ於ケル養蠶ハ其氣候風土自ラ府縣ト異ナルカタメ其飼育法ニモ差異ナキ能ハス試驗ノ結果本道春蠶ニ適スト認メ
 タル飼育法ヲ示セハ左ノ如シ

春蠶飼育標準 (蠶量壹匁)

飼育溫度七十一度、濕度六十五度、飼育日數三十六日、給桑回數最少百六十四回(夏蠶ハ最少百五十八回)、給桑量四
 十五匁乃至四十七匁

日順	第壹齡		第貳齡		第參齡		第肆齡		第伍齡	
	回數	全量	回數	全量	回數	全量	回數	全量	回數	全量
一	八	一四〇	一	二六	一	一〇八	一	二二五	一	三三〇
二	八	一四〇	一	二六	一	一〇八	一	二二五	一	三三〇
三	八	一四〇	一	二六	一	一〇八	一	二二五	一	三三〇
四	八	一四〇	一	二六	一	一〇八	一	二二五	一	三三〇
五	八	一四〇	一	二六	一	一〇八	一	二二五	一	三三〇
六	八	一四〇	一	二六	一	一〇八	一	二二五	一	三三〇
七	八	一四〇	一	二六	一	一〇八	一	二二五	一	三三〇
八	八	一四〇	一	二六	一	一〇八	一	二二五	一	三三〇
九	八	一四〇	一	二六	一	一〇八	一	二二五	一	三三〇
計	八	一四〇	一	二六	一	一〇八	一	二二五	一	三三〇

日順	第壹齡		第貳齡		第參齡		第肆齡		第伍齡	
	回數	全量	回數	全量	回數	全量	回數	全量	回數	全量
一	八	一四〇	一	二六	一	一〇八	一	二二五	一	三三〇
二	八	一四〇	一	二六	一	一〇八	一	二二五	一	三三〇
三	八	一四〇	一	二六	一	一〇八	一	二二五	一	三三〇
四	八	一四〇	一	二六	一	一〇八	一	二二五	一	三三〇
五	八	一四〇	一	二六	一	一〇八	一	二二五	一	三三〇
六	八	一四〇	一	二六	一	一〇八	一	二二五	一	三三〇
七	八	一四〇	一	二六	一	一〇八	一	二二五	一	三三〇
八	八	一四〇	一	二六	一	一〇八	一	二二五	一	三三〇
九	八	一四〇	一	二六	一	一〇八	一	二二五	一	三三〇
計	八	一四〇	一	二六	一	一〇八	一	二二五	一	三三〇

備考 本道ニ於テハ除沙用トシテ必要ナル粗糠ヲ得難キ地方アルモ切葉、乾草(細切シタルモノ)、鋸屑蕎麥殼ノ類ハ
 其代用トシテ良好ナルヲ認メタリ

八 農作物病害ニ關スルコト

作物栽培上耕種肥培ノ方法ニ意ヲ用フヘキハ勿論ナルモ之カ害敵ノ豫防驅除ニモ亦周到ナル注意ヲ拂ハサルヘカラス是
 ヲ以テ本場創立以來病害害蟲及雜草等ノ驅除豫防ニ關シ幾多ノ試驗ヲ行ヒ隨時其成績ヲ公ニシテ農家ノ參考ニ供セリ本道
 ニ於ケル主要農作物ノ主ナル病害ヲ列舉スレハ左ノ如シ

水	稻	熱	病	大豆	菌	核	病
小	麥	黑	病(腥黑穗、裸黑穗)	小	豆	菌	核
	麥	锈	病(黃锈、赤锈)	菜	豆	菌	核
	大	麥	病(裸黑穗、堅黑穗)		豆	菌	核
	麥	锈	病(小锈、黃锈)	馬鈴薯	夏	疫	病
燕	麥	黑	病(裸黑穗、堅黑穗)	粗	皮	疫	病

花 腐 病
果 腐 爛 病
毛 銹 病

萎 萎 菌 核 病
亞 麻 立 枯 病
梨 黑 星 病

右ノ外蔬菜類ニハ甘藍黑腐病、苗立枯病、萵苣腐敗病(菌核病)瓜類ベト病等其種類少ナカラズ
前掲諸病害ニ關シ本場ニ於テ施行セル主ナル豫防試驗及ヒ調査成績ノ要旨ハ左ノ如シ

麥類黑穗

(一)小麥腥黑穗、大麥及稗麥堅黑穗、燕麥黑穗二種
以上ハ普通ノ温湯法ニテ豫防スルヲ得

(二)小麥裸黑穗、大麥及稗麥裸黑穗

以上ハ普通ノ温湯法ニテハ豫防スルコト能ハス冷水温湯法ヲ以テスルモノノ全滅ヲ期シ難キヲ以テ種子圃ヲ設ケ黑穗拔
取リヲ行フヲ得策トス但シ種子圃ニ於テハ(一)ニ屬スル黑穗ヲモ併セテ拔取ルヘキナリ

大麥及稗麥斑葉病 冷水温湯法ヲ施シテ播種スヘシ

黍黑穗 水一斗ニツキ硫酸銅百々ノ割合ニテ製シタル硫酸銅液ニ種子ヲ四時間乃至六時間浸ストキハ本病ヲ豫防スルコ
トヲ得ヘシ

麥類銹病ノ種類 本道ニ於ケル麥類銹病ノ種類ハ左ノ如シ(但シ府縣ノ麥類銹病モ之ニ同シ)燕麥ニ寄生銹病菌アレトモ
事實上無害ナリ

- 黄 銹 (Puccinia glumarum) 小麥、大麥及稗麥ヲ害ス
- 黑 銹 (P. graminis) 小麥、大麥等ヲ侵スル大害ナシ
- 小麥赤銹 (P. triticina) 小麥ヲ害ス
- 小 銹 (P. simplex) 大麥及稗麥ヲ害ス

馬鈴薯疫病 本病ハ「ホルドー」合劑ノ撒布ニヨリテ豫防スルヲ得但シ例年ノ發病期ヨリ約二週間前ニ撒布ヲ行ヒ其後ノ
病勢ニヨリ更ニ二三回撒布スヘシ

馬鈴薯粗皮病 「ホルマリン」水ニテ種薯ニ附着セル病原菌ヲ滅殺スヘシ昇水水ハ其効力一層確實ナレトモ毒藥ナルヲ以
テ一般農家ノ使用ニ適セス

亞麻立枯病 連作ヲ避ケ種子ノ精撰ヲ行フノ外「ホルマリン」水ニテ種子ニ附着セル病原菌ヲ滅殺スヘシ

苹果花腐病及諸果樹菌核病

櫻桃嫩果菌核病(Sclerotinia Kusanoi) 「ヨシノサクラ」ニモ害アリ被害果ヲ集メ燒棄スヘシ

苹果、梨等ノ菌核病(モニリヤ病) 被害果ヲ集メ燒棄スヘシ

苹果花腐病 其病原菌ハ櫻桃嫩果菌核病ノソレニ類似スルモノ一種特種ノモノナルヲ確メ(Sclerotinia Mali Takah)ニ
命名セリ而シテ其豫防法トシテハ被害花ヲ集メテ燒却シ又ホルドー合劑撒布ノ頗ル有効ナルヲ確メタリ

苹果腐爛病 被害皮部ヲ削取リ其跡ニ粘土ト木灰又ハ石灰トヲ等分ニ水ニテ捏リ交セタルヲ塗抹スヘシ

蔬菜病害 胡瓜ベト病ハ「ホルドー」合劑ヲ撒布スヘシ茄苗立枯病ハ高等菌ニ屬スルコルチチウム(Corticium)菌ノ菌絲
ノ侵害ニ基ク病害ナリ木灰又ハ石灰ヲ適宜苗床ニ施スヘシ

アヲミドロ 苗代ニ「アヲミドロ」ノ蕃殖セル場合ニハ地面一坪ニツキ硫酸銅約半々ヲ適宜ノ水ニ溶解シテ撒布スヘシ

九 農作物ノ害益蟲ニ關スルコト

本道ハ農作物ノ害益蟲頗ル多ク果樹蔬菜ヲ始メ穀菽類其他ニ亘リ年々多大ノ被害アリ特ニ果樹類ハ被害最モ劇甚ニシテ大
ニ當業者ニ恐怖セラル今本道ニ於ケル重要農作物ノ主ナル害蟲ヲ舉クレハ左ノ如シ

- 水 稻 セジロウンカ、イネメイチウ(二化螟蟲)、ドロツトムシ、ドロヲヒムシ、イトミハズ
- 麥 類 カバイロコメツキ、ムギアブラムシ、ムギハムグリバイ
- 粟、玉蜀黍 アハズイムシ、アハヨトウ

豆類 マメシクヒガ、マメアブラムシ、ウリハムシモドキ、キタバコガ、ツメクサガ
 馬鈴薯 オホテントウムシダマシ
 蔬菜 デノミ、キスジノミムシ、モンシロフ、ヨトウガ、ダイコンバイ
 果樹 リンゴカヒガラムシ、リンゴワタムシ、リンゴヒメシクヒガ、モ、シクヒガ、アブラムシ、
 ブランコケムシ、スムシ、ミノムシ、リンゴハバチ、ナシシクヒガ、コスカシバ、ハマキ、サ
 クラミバヒ
 桑 クハカミキリ、ハマキ、クハユダシヤク

害蟲ノ爲メ農家ノ被ル損害高極メテ多ク夜盗虫ノミニ就テ見ルモ最近五ケ年間ニ於ケル被害見積額ハ一ケ年平均參拾五萬圓ニシテ本道農作物年産額百分ノ一以上ノ巨額ニ當リ此等害敵ノ驅除亦決シテ忽諸ニ附スヘカラサルヲ示セリ今本場開始以來害益蟲ニ關シ施行シタル試驗及調査成績ノ大要ヲ述フレハ次ノ如シ

イネメイチュウ(二化螟蟲) 本道ニ於ケル二化螟蟲ハ一般ニ一化ノ發生ニシテ極メテ稀ニ發蛾ス初期ハ第一回發生七月上旬第二回發生八月下旬ニシテ二化發生スルコトアリ一化螟蟲ハ發生時期ハ六月下旬ニシテ之カ最終期ハ八月中旬ナリ而シテ幼蟲ハ一被害莖中ニ主ニ一匹宛潛入スレトモ孵化當時ニアリテハ群棲スルコト稀ナラス之カ喰害期ノ最モ盛ナルハ出穂後ニシテ地上ヨリ一寸以内ノ個所ヨリ侵入スルモノ最モ多キカ如シ尙該蟲ハ株ヨリモ莖中ニアリテ越冬スルモノ多シ幼蟲ニ寄生蜂七種アリテ該蟲ヲ斃スコト少カラス之レヲ驅除豫防スルニハ誘蛾燈ヲ用キテ螟蛾ヲ誘殺スヘシ
 ドロヲヒムシ 本害蟲ヲ驅除スルニ二法アリ一ハ網ニテ掬ヒ捕ルコト一ハ油類ヲ用キテ殺滅スルコト之ナリ油類ヲ使用スル場合ニハ除蟲菊浸出石油ヲ反當一升ノ割合ニテ水面ニ滴下シ後掃ニテ拂ヒ落スヘシ
 イトミ、ズ 苗代ニ害アリ之ヲ驅除豫防スルニハ苗代一畝歩ニ就キ「デキタリス」ノ乾葉一貫五百匁ヲ細切シタルモノヲ播種前表土三四寸ノ深サニ鋤キ込ミ置クノ最モ有効ナルヲ認メタリ供試材料ハ殺蟲ノ効強ク且稻苗ニ害ナシ
 ドロツトムシ 直播ノ水田ニ最モ害アリ之ヲ驅除スルニハ能ク乾キタル砂反當約二斗ニ石油一升三合乃至一升五合ヲ能

ク交セタルモノヲ撒布スレハ可ナリ

アブラムシ 蚜蟲ノ種類頗ル多ク之カ寄生ヲ受ケサル作物ナシ總テ蚜蟲ヲ驅除スルニハ石油乳劑三十五倍稀釋液若クハ石鹼水ヲ撒布スルヲ可トス蚜蟲ヲ食スル七星瓢蟲其他ヲ保護スルコトヲ忘ルヘカラス
 ウリハムシモドキ 大豆ノ外薄荷ヲ害シ成蟲幼蟲孰レモ盛ニ喰害ス之ヲ驅除スルニハ幼蟲ニハ除蟲菊加用石油乳劑二十五倍稀釋液成蟲ニ對シテハ同液三十倍稀釋液ヲ撒布スルノ有効ナルヲ認ム
 キタバコガ及ツメクサガ 幼蟲ハ初メ豆葉ヲ喰スレトモ成長スルニ隨ヒ豆粒ヲ喰害シ一莢ヲ終レハ他莢ニ移轉ス幼蟲ノ色彩ニヨリ前者ヲ大豆黒蟲後者ヲ大豆青蟲ト云フ幼蟲ハ箕ノ如キモノ、中ニ拂ヒ落シ成蟲ハ糖蜜誘殺法ヲ行フヲ可トス此等ノ害蟲ニ一大敵蟲アリ「アメバチ」ナル寄生蜂是ナリ盛ニ該蟲ヲ斃ス
 ヨトウガ 夜盗蟲ノ種類極メテ多ク隨ヒテ諸種ノ農作物ニ加害ス驅除トシテ最モ良好ナルハ蛾ノ誘殺ナリ誘殺ニ二法アリ一ハ糖蜜誘殺ニシテ他ハ燈火誘殺ナルモ前者ハ後者ニ優ルコト數等ナリ誘殺ヲ行フニハ七月中旬ヨリ九月中旬迄ヲ適期トナス尙ホ糖蜜誘殺法ハ獨リ夜盗蟲ニ有効ナルノミナラスシテ葉捲類ニモ有効ナルヲ認メタリ
 オホテントウムシダマシ 本害蟲ハ一種ノ瓢蟲ニシテ成蟲幼蟲共ニ馬鈴薯ヲ害ス成蟲ハ皮膚堅クシテ石油乳劑ノ如キ接觸劑ニテハ驅除シ難キヲ以テ亞砒酸鉛ノ如キ毒劑ヲ使用セサルヘカラス幼蟲ニ對シテハ石油乳劑二十五倍稀釋液若クハ除蟲菊加用石油乳劑三十五倍稀釋液ヲ撒布スヘシ

本道ニ棲息セル瓢蟲類ニシテ農作物ニ加害スルモノハ本種ト十一星瓢蟲トノ二ナリ前者ハ隨所ニ發生シ加害頗ル大ナレトモ後者ハ極メテ稀ニ發生スルニ過キス而シテ此他ノ瓢蟲ハ凡テ肉食性ニシテ介殼蟲蚜蟲等ヲ食シ農家ニ有益ナルモノナリ其主ナルモノヲ列記スレハ左ノ如シ

七星瓢蟲、姬蟬甲瓢蟲、赤星瓢蟲、白十四星瓢蟲、姬赤星瓢蟲、瓢蟲(變種ヲ含ム)
 デノミ及キスジノミムシ 蔬菜ノ稚苗ヲ害ス豫防トシテハ除蟲菊木灰混合劑一升ニツキ石油約一合ノ割合ニテ注加シ能ク攪拌シタルモノヲ被害作物ノ周圍ニ撒キ置クヘシ

リンゴカヒガラムシ 本道苹果ノ介殼蟲ハ學名ヲ「ミチラスピス、ボモーラム」(Mytilaspis pomorum)ト稱シ府縣ニ於ケル「サノーゼ」介殼ト全ク別種ナリ介殼蟲ノ驅除ニ夏期ト冬期トノ別アリ夏期ハ卵ヨリ孵化シタル幼蟲ノ母介殼ヲ辭シ樹幹ヲ爬ヒ廻ル時ニ石油乳劑三十倍稀釋液ヲ撒布スヘク冬期ハ介殼下ニテ越冬セル卵ノ生活力ヲ殺クモノニシテ即チ石油乳劑三倍稀釋液若クハ魚油木灰汁混合液ヲ布片ニテ被害樹枝ニ塗抹スヘシ

又介殼蟲ハ主トシテ苗木ニ附着シテ各地ニ傳播スルモノナルヲ以テ之カ豫防策トシテ苗木ニ青酸瓦斯燻蒸ヲ行フコノ燻蒸ヲ行ヒテ介殼ノ卵ヲ死滅セシムルニハ空間一立方尺ニツキ青酸加里一瓦ヲ用ヒ其他藥品ノ用量割合ハ左ノ如クニシテ以テ五十分間燻蒸スルヲ要ス

青酸加里 (百分中有効成分九十八以上ノモノ)
 一、〇〇グラム
 硫 酸 (比重一、八三ノモノ)
 一、五〇グラム

水 二、二五同

リンゴヒメシシクヒガ、モ、シシクヒガ及サクラミハヒ 等ノ果蠹蟲ノ驅除トシテハ前二者ニ對シ七月ノ中旬後者ニ對シテハ六月中旬札幌合劑ヲ一回若シレハ二回撒布スニハ之等ノ果蠹蟲ヲ完全シ豫防シ得ルノミナラス袋掛ヲ行フモノニ比シテ經費極メテ僅少ナリ

ハマキ類其他食葉害蟲ニ對シテハ各害蟲ニ對スル適期ニ札幌合劑ヲ撒布スレハ完全ニ豫防シ得ヘシ但シ蔬菜及果桑ニハ本劑ヲ用ヒサルヲ可トス

ミノムシ ミノムシニハ筒筒蠹及短銃筒蠹ノ二種アリテ春期果樹ノ芽ヲ害ス驅除法ハ三斗式ボルドー合劑一斗ニ對シ綠色硫石十匁若クハ亞砒酸十五匁ヲ加ヘタル液ヲ強力噴霧器ヲ以テ撒布スヘシ

蟻 驅除法トシテ頗ル良好ナルハ青酸加里四匁ヲ水一升ニ溶カシタル液ヲ蟻巢ニ注入スルニアリ群蟻ハ即死シ又歸巢セントスル蟻モ該液ノ爲メ濕リタル個所ヲ通過スルトキハ直チニ歩行ノ自由ヲ失ヒ斃死ス

一〇 依頼分析並ニ鑑定ニ關スルコト

明治四十一年五月本場ニ於テ依頼分析開始以來大正元年ニ至ル間公衆ノ依頼ニ應ジ分析シタル物料件數左ノ如シ

肥料	三百七拾八件
土 壤	八拾件
農作物及農産製造品	四拾九件
飼料、水、礦物其他	三拾八件
計	五百四拾五件

尙此外明治四十一年五月本場ニ於テ種苗鑑定開始以來大正元年ニ至ル間公衆ノ依頼ニ應ジ鑑定シタル件數ハ合計二拾五件ナリ

一一 卒業生ニ關スルコト

蠶業講習所創立以來大正二年迄ニ二十五回四百七十九名ノ卒業生ヲ出セリ今其職業別人員ヲ擧クレハ左ノ如シ但シ蠶業講習所卒業生中ニハ本科別科卒業生並ニ本科別科設置以前ノ卒業生及修業生ヲ含ムモノトス

實業	百八十名
官吏	二十四名
教員	十二名
軍人	八十八名
雜業	六名
學生	四十一名
不明	七名
死 亡	八十五名
	三十二名

第一農事試驗場

合計

四百七十五名

四〇

北海道農事試驗場ニ於ケル農事實習生ハ明治四十三年以後四回二十名ヲ修業セシメタリ今其就職現在ヲ示セハ左ノ如シ

- 實業 三名
- 官公吏員 三名
- 技術員 十三名
- 軍人 一名

種苗配布ニ關スルコト

本支場創立以來明治四十四年迄ニ本道農家ニ配布シタル主ナル種苗ノ數量ヲ舉クレハ左ノ如シ

種	本場	上川支場	十勝支場	北見支場	渡島支場	蠶業講習所
水稲	九四・七〇	八〇・七〇	一一・五九〇	〇・五二〇		
麥類(五種)	四五〇・九〇	一〇一・一九〇	一三三・四二〇	七八三〇	〇・六二〇	
菽類(四種)	一三・六二〇	一三五・一〇	七・一〇七〇	一・二八〇		
馬鈴薯	一五二・九〇〇		六・一七・〇〇〇	六〇・九〇〇		
玉蜀黍	六・三六〇	三二・五五〇	四七・七〇	〇・二〇〇		
蕎麥其他雜穀類	七・三三〇	九・九七〇	四・一〇〇	〇・〇二〇		
蔬菜類	二四・五五〇	四・九九〇	三・三三〇	〇・一七〇		
草花類	一一・八七〇					
蠶種	七・七四〇	一四三・九七〇	三三三・一四〇			三四・五七九〇
桑苗	七・七四〇	一一〇・二〇	一九・〇〇〇			八四・五二六〇
柳	二・八三〇	一五・六四〇				

印刷物配付ニ關スルコト

本支場創立以來廣ク一般ニ配付スルノ目的ヲ以テ刊行シタル試驗成績報告其他ノ發行回数及部數其登載事項等ヲ示セハ左ノ如シ

試驗報告部	發行回数	部數	業務功程部	委託試驗成績部	發行回数	部數
四	三・一〇〇	一六	三	四	一	七
		三・一〇〇	一三八〇〇	〇・八〇〇	〇・三〇〇	三・五〇〇

備考 此他尙上川、十勝支場及蠶業講習所ニ於テ地方費所屬時代ニ刊行セルモノ合計六千三百八十五部アリ

種	類	登載事項	部數
北海道農事試驗場報告	第一號	本報ハ本場創設ノ經過重要作物ノ耕種肥培ニ關スル試驗作物病害豫防ニ關スル試驗成績ヲ登載ス	六〇〇
	第二號	本報ハ農作物病害ニ關スル試驗及ビ調査ノ成績ヲ登載ス	六〇〇
	第三號	本報ハ農作物及ビ肥料ニ關スル試驗並ニ分析ノ成績ヲ登載ス	一、〇〇〇
	第四號	本報ハ本場ニ於テ五町步經營ノ模範農場事業成績ヲ登載ス	一、〇〇〇
	第一號	本報ハ本場一覽	三、〇〇〇
	第二號	本報ハ本場ニ於テ五町步經營ノ模範農場事業成績ヲ登載ス	同
	第三號	本報ハ明治三十九年開設北海道物産共進會ハ本場ヨリ出品セシ標本ニ對スル解説事項ヲ登載ス	同
	第四號	同	同
	第五號	本報ハ華果病害ニ關スル試驗並ニ調査事項ヲ登載ス	二、〇〇〇
	第六號	本報ハ馬鈴薯栽培ニ關スル試驗並ニ調査事項ヲ登載ス	同
	第七號	本報ハ麥類黑穗病豫防法ニ關スル試驗並ニ調査事項ヲ登載ス	同
	第八號	本報ハ本場一覽	同
	第九號	本報ハ有害蠶虫及ヒ有益蠶虫ニ關スル試驗並ニ調査事項ヲ登載ス	同
	第十號	本報ハ大豆栽培ニ關スル試驗並ニ調査事項ヲ登載ス	同
	第十一號	本報ハ厩肥及ビ過燐酸石灰ニ關スル試驗並ニ調査事項ヲ登載ス	同

種	類	登	載	事	項	部	數
同	第十二號	本書ハ俱知安地方ニ於ケル酸性土壤ニ關スル試驗並ニ調査事項ヲ登載ス					二〇〇〇
同	第十三號	本書ハ火山灰地方ニ於ケル農業ニ關スル試驗並ニ調査事項ヲ登載ス					同
同	第十四號	本書ハ玉蜀黍栽培ニ關スル試驗並ニ調査事項ヲ登載ス					同
同	第十五號	本書ハ本道ニ於ケル稻穀栽培ニ關スル試驗及調査事項ヲ登載ス					同
同	第十六號	本書ハ試驗及調査ノ成績ニ基キ凶作ニ對スル耕種上ノ注意ヲ登載ス					同
同	同	本書ハ明治四十三年北海道農事試驗場事業功程					100
同	同	明治四十四年同					同
同	同	自明治四十五年一月					同
同	同	至大正元年十二月					同
同	同	大正二年同					同
同	北海道農事試驗場時報 第一號	本號ハ寒害菌核病ニ關スル注意ヲ登載ス					5,000
同	第二號	本號ハ渡島地方ニ於ケル早稻栽培ノ利益ヲ發表ス					同
同	第三號	本號ハ豌豆害蟲おほまめぞうニ關スル注意ヲ登載ス					同
同	第四號	本號ハ大正二年ノ氣候不順ニ當リ秋收作物ニ對スル採種上ノ注意ヲ登載ス					同
同	第五號	本號ハ種籽發芽力檢定法ヲ登載ス					同
同	第六號	本號ハ應急補食作物栽培ノ注意ヲ登載ス					同
同	第七號	本號ハ毒草ニ關スル注意ヲ登載ス					同

七 將來ノ事業

本道ニ於ケル國費支辨ニ係ル農事試驗場施設ノ大要ハ前既ニ述ヘタルカ如ク孰レモ將來之ヲ繼續施行スルノ要アルヤ勿論ニシテ此他尙其施設ヲ擴張シ新ニ試驗研究ヲ開始スヘキ重要ナル問題亦尠カラズ就中左記數項ヲ其最タルモノトス

- 一、土地利用ニ關スルコト
- 一、園藝試驗及調査ニ關スルコト

一、農産製造ニ關スルコト

一、農具ノ研究ニ關スルコト

一、畜産研究ニ關スルコト

一、農家食物ノ研究ニ關スルコト

一、農事指導事業ヲ試驗場ニ移スコト

蓋シ此等ノ事業タル多ク普遍的、研究的ノ事項ニ屬スルカ故ニ特殊ノモノヲ除クノ外道内各所ニ設立セラレタル機關即チ應用的模範の事業ヲ主眼トスル地方農事改良機關ヲシテ不完全ナル施設ヲナサシメ却テ之カ解決ニ苦マシメンヨリハ寧ロ國費ノ經營ニ係ル中央農事試驗場ヲシテ從來進メ來レル設備ニ加フルニ一層完全ナル設備ヲ爲サシメ以テ之カ調査研究ヲ進メシムルノ勝レルニ如カス今逐次之カ施設ノ必要ナル所以ヲ述ヘン

一、土地利用ニ關スルコト

本道拓殖ノ機運駁々トシテ止マズ今ヤ普通土地以外ニ特殊土壤即チ泥炭地火山灰地(高丘地ヲ含ム)ノ開拓ニ着手セントスルモノ漸ク多キヲ加フルニ至レリ爾テ本道ニ於ケル此等特殊土壤ノ現狀ヲ見ルニ泥炭地ハ其面積概測二十一萬町歩ト稱セラレ殆ント道内各國ニ分布シ就中石狩、天鹽、釧路、北見ノ各國ニ占有面積多ク又火山灰地ハ其面積概測三十八萬町歩ト稱セラレ之レ亦太平洋ニ面スル各國即チ渡島、膽振、日高、十勝、釧路、根室ニ占有面積多シ土地改良調査ノ結果ニ據レハ既ニ利用セラレタル泥炭地ノ面積ハ五萬二千四百町歩餘ニシテ將來利用シ得ヘキ面積ハ十萬四千四百町歩餘又火山灰地ニアリテハ既ニ利用セラレタル面積十六萬三千町歩ニシテ將來利用シ得ヘキ面積ハ二十一萬八百町歩ナリ以テ如何ニ本道ニ於ケルニ大特殊土壤ノ將來利用シ得ヘキ面積ノ廣大ナルカヲ察知シ得ヘシ而シテ此等ノ土壤ハ普通ノ土壤ト全然其趣ヲ異ニスルヲ以テ土地改良工事ノ必要ナルハ勿論耕種上ノ改良ニ關スル諸般ノ試驗及調査亦決シテ等閑ニ付スヘカラス況ンヤ此等土壤ノ分布廣ク隨テ氣候狀態ヲ異ニシ農業狀態モ亦相同シカラス一地方ヲ以テ他ヲ律シ難キモノアルニ於テヤ是ヲ以テ從來此等特殊土壤ニ對シ特定試驗地ヲ設ケ北海道農事試驗場ニ於テ之カ研究調査ヲ行ヒ來レリト雖モ規模狭小ニシ

テ其目的ヲ達スルコト容易ナラサルニヨリ全道ニ亘ル豫察調査ニ基キ根本的調査ヲ行ヒ農業上ノ基礎ヲ定メテ以テ農産ノ改良増殖ヲ圖ランカ爲メ既設北海道農事試驗場ニ新ニ之カ調査研究ニ關スル一部門ヲ設ケ試驗及調査ノ進行ヲ圖ルヲ急務トス(土地改良編參照)

二、園藝試驗及調査ニ關スルコト

社會ノ進運ニ伴ヒ本道ニ於ケル園藝業亦長足ノ進歩ヲ示シ統計ニ據レハ大正元年ニ於ケル生産額實ニ一千四百十二万余圓(蔬菜類九万二千六百余町歩一千三百四十三万圓果樹類八十万本六十九万二千余圓)ヲ算シ拓地殖民ノ進歩ニ隨ヒ將來ノ産額亦益々増大シテ約五千万圓ノ巨額ニ達スル決シテ難事ニアラス而シテ從來既ニ之ニ關スル試驗及調査ヲ行ハサルニアラサルモ其規模比較的狹小ニシテ斯業發達ノ大勢ニ伴ハサルコト遠ク時ニ時勢ノ要求ニ應ジ難キ憾ミナキニシモアラス特ニ本道園藝作物ニハ海外ニ販路ヲ有シ市場ニ名聲ヲ博セル苹果、馬鈴薯、玉葱等ノアルアリテ益々之カ改良發達ヲ圖リ更ニ其名聲ノ發揚ニ努メサルヘカラサルモノアリ是ヲ以テ其施設ヲ擴張シ以上ノ外有望ナル洋梨、櫻桃、葱等ニ對シ特ニ其品質、荷造、輸送、貯藏等ニ關スル試驗並ニ調査ヲ進メ常ニ當業者ノ木鐸タルヲ期シ斯業ノ發達ヲ圖ルノ要アリトス

三、農産製造ニ關スルコト

近年本道ニ於ケル工業ハ隆々トシテ勃興シ來リ最近ニ於ケル統計ニヨレハ其主ナルモノハ清酒、酒精、麥酒、味噌、醬油、製粉、澱粉、製糖、薄荷、取卸油等ノ農産製造品ニシテ其生産價格年次ニヨリ差アルモ少キモ千二百萬圓多キハ千八百萬圓ニ達スルノ盛況ヲ呈シ將來人口ノ増加ニ伴ヒ益々發展スヘキ趨勢ヲ示シツ、アリト雖モ未タ本道ニ於テ此等ノ事業ニ關シ何等具體的ノ研究ヲナスヘキ機關ノ設備ナキハ甚タ遺憾トスル處ニシテ之カ調査研究ヲ必要トスヘキ事項中其主要ナルモノ、二三ヲ擧クレハ左ノ如シ

(一)道産米ヲ原料トスル清酒釀造法ノ研究ヲ行フコト

本道ニ於ケル清酒ノ消費高ハ頗ル多量ニ上ル隨テ道内ニ於ケル造石高ハ近年著シク増加スルニ至レルモ年々府縣ヨリ移入セラル、量亦甚タ多シ最近三ヶ年間道内造石高及移入高ヲ示セハ左ノ如シ

道内造石高	明治四十年	明治四十四年	大正元年
道内移入高	八三、七二七 <small>石</small>	九二、六三九 <small>石</small>	九六、四四八 <small>石</small>
	三三六、七二六 <small>石</small>	三八九、六二八 <small>石</small>	四三三、七八二 <small>石</small>
	六〇、〇八一	六七、〇〇七	五三、五〇七
	三〇七、九一〇	三六二、五五二	三七八、二八〇 <small>石</small>

而シテ本道米作ノ發達セサル當時ニアリテハ道内釀造ノ原料米ハ悉ク府縣産ニ仰キ近時本道米作ノ異常ノ發達ヲ見ルニ及ヒ終ニ清酒釀造上道産米ノ使用ヲ見ルニ至レルモ之ヲ全造石高ニ對比スルトキハ僅カニ其一小部分ニ過キスシテ其大部分ハ依然トシテ移入米ニ仰クモノナリ

然レトモ本道米作ノ將來ハ水田面積約三十万町歩生産額約三百九十萬石ヲ現實スルハ敢テ難キニ非ラサルヘク若シ將來道産米ヲ基礎トシテ遺憾ナク釀造スルヲ得ハ獨リ釀造家カ低廉ノ原料ヲ使用シ得ルノ利アルノミニ止マラス本道米作ノ發展ヲ扶掖發達セシムルコト多大ナルヘシ而シテ從來清酒釀造上道産米ヲ使用シ釀造セルノ結果ハ孰レモ府縣産米ヲ使用セル場合ニ比シ著シク其趣ヲ異ニスルノミナラス醱酵亦可良ナラストセラル、ハ是レ現時ニ於ケル道産米ノ品質府縣産米ニ比シ多少劣ルヘキハ固ヨリナルヘキモ亦之カ使用ニ習熟セサルト各品種ノ性狀ヲ熟知セサルトニ因ルコト大ナル可シ故ニ宜シク清酒釀造上道産米各品種ノ優劣、品種及ヒ栽培上改良ヲ要スヘキ點、道産米ニ對スル精白、浸漬、蒸餾、蒸米放冷方法、醱酵法等種々ノ事項ニ對シ精細ナル研究調査ヲ行フコト刻下ノ急務ナルヘシ

(二)薄荷製造ニ關スル研究ヲ行フコト

本道ニ於ケル薄荷裁製ノ事業ハ近年著シク發達ヲ致シ大正元年ニ於テハ實ニ其作付反別五千二百二十七町歩ニ達シ其取卸油ノ生産額二十五萬斤百五十八万圓ニ上リ今ヤ作付反別ニ於テモ生産額ニ於テモ共ニ全國第一ニ位シ本道農業上重要ナル位置ヲ占ムルニ至レリ

而シテ現今本道ニ於ケル薄荷裁製ノ事業ハ専ラ農家ニヨリ行ハルヲ以テ從來農事試驗場ニ於テ多少試驗及ヒ研究ヲ行ヒツツアリト雖モ設備ノ關係上比較的耕種肥培ノ方面ニ力ヲ注ケルハ亦止ムヲ得サルニ出ツ故ニ速カニ設備ヲ擴張シ左

ノ諸點ニ關ス研究ヲ進ムルコト極メテ緊要ナリトス

(イ) 由來邦產薄荷ハ含腦量高キヲ以テ腦ノ生産多ク世界市場ニ重要ナル位置ヲ占ムト雖トモ油ハ其品質良好ナラス一種厭フヘキ苦味ヲ有スルノ欠點アルヲ以テ其價格ノ如キ亦低廉ナルヲ免レス隨テ從來ト雖トモ此點ニ關シ留意セルモノ尠ナカラサルモ孰レモ充分ノ成果ヲ得ルニ至ラス而シテ之レカ改良法ニアリ即チ一ハ優良原料ノ選擇ニシテ他一ハ製造上ノ改良是ナリ故ニ此ノ二方面ヨリ研究ヲ行ヒ以テ其品位ノ昂上ヲ圖ルコト必要ナリトス

(ロ) 現今本道ニ於ケル薄荷取卸油ノ製造機ハ舊來ノモノニ比スレハ進歩ノ跡歴然トシテ見ルヘク多少ノ長所ヲ有スルモ尙幾多ノ缺點ナシトセス故ニ精細ニ此等取卸製造機ノ比較研究ヲ行ヒ以テ良機ノ案出ヲ圖ルコト極メテ緊要ナリ勿論現今ニアリテモ多額ノ資ヲ投スルニ於テハ比較的精巧ノ機ナキニアラサルモ僅カニ一ヶ月前後ノ製造期ヲ有スル當業者ニ向ヒ假令精巧ナルモ俄カニ高價ノ機械ヲ推獎スヘキニアラス又組合組織ニヨリ共同取卸ノ製造ヲ行フハ極メテ良法ナルモ元來薄荷草ハ其容積大ナルヲ以テ新開地方ノ如キ疎居農村ニアリテハ其運搬容易ナラス却テ各家蒸餾ヲ行ハシムルヲ以テ得策トスヘク隨テ此等農家ニ對シテハ廉價ニシテ比較的良好簡易ノ機械ヲ必要トスル所以ナリ

(ハ) 元來植物揮發油蒸餾ノ要點ハ主トシテ原料ノ裝填ト加熱加減ノ如何ニアリト云フヲ得ヘシ然ルニ從來本道ニ於テハ未タ此點ニ關シ留意セルモノアルヲ見ス是レ取卸製造上ノ一大缺陷トスル處ニシテ這般ノ研究ヲ開始スルハ實ニ刻下ノ急務ナリトス

(ニ) 現今ニ於ケル薄荷取卸油ノ賣買ハ慣習上一種ノ從量賣買ナリトス隨テ其品質ノ優劣含腦量ノ多少ノ如キハ措テ問ハサル處ニシテ生産者ノ不利極メテ大ナルモノアリ將來現今ニ於ケル取卸油ノ製造ヨリ尙一步ヲ進メ道内ニ於テ腦油ノ分離ヲ行フニ至ラハ前記ノ不利益ヲ免ル、ノミナラス一面過剩ノ生産ニ對シ一時調節ノ效果アルヲ以テ腦油分離ニ關スル良法ノ研究ヲ開始スルコト緊要ナリ

(三) 澱粉製造改良ニ關スル研究ヲ行フコト

本道ニ於ケル馬鈴薯澱粉製造業ハ時ニ多少ノ消長ナキニアラサルモ最近ノ統計ニヨレハ其一ヶ年ノ生産額九十萬圓ニ上

リ本道農産製造中重要ノ位置ヲ占メ隨テ製造上亦一ノ遺憾ナキカ如キモ深ク之ヲ探究スルトキハ尙未タ到レリト云フヘカラス即チ本道ニ於ケル馬鈴薯澱粉ノ收得率ノ概シテ低度ニアルカ如キ其原因一ニシテ足ラサルヘキモ原料馬鈴薯中ノ含量低キト製造機械及ヒ技術ノ粗雜ナルトハ其一大原因タルヘシ而シテ原料中ノ澱粉量低度ニアルハ彼フ可カラサルノ事實ナルモ製造器械及技術ノ點ニ至リテハ世上其然ルヲ知ラサルモノ尠カラス故ニ原料ト機械及技術ノ改良ニ關シ諸般ノ試驗ヲ施行スルコト極メテ必要ナリトス

(四) 玉蜀黍原料トスル製造ニ關スル研究ヲ行フコト

玉蜀黍ハ本道ノ特産ニシテ其産額又全國ニ冠タリ最近統計ノ示ス所ニヨレハ其作付反別二萬一千余町歩ニシテ生産額三十三萬八千石百八十四萬圓ニ上ル若シ將來玉蜀黍利用工業ノ起ルニ至ラハ尙一層ノ増加ヲ見ルヤ必セリ而シテ從來本邦ニ於ケル玉蜀黍ノ用途ハ其範圍極メテ狭少ニシテ飼料若クハ農家ノ食料トセラル、外工業的用途ニ利用セラル、モノ極メテ少ナシ而モ玉蜀黍之利用ハ獨リ之レノミニ止マルニアラス其用途ノ廣キコト他ノ穀菽ノ比ニアラサルヲ以テ歐米ノ如キ夙ニ之カ利用ヲ講シテ遺憾ナク其本邦ニ輸入セラル、モノ亦尠カラス故ニ本道ニアリテモ速カニ之カ利用ニ關スル研究ヲ行ヒ一面民間ノ起業ヲ促進スルコト緊要ナリトス

(五) 果菜類罐詰製造ニ關スル研究ヲ行フコト

近年本邦ニ於ケル果菜類罐詰ノ消費量ハ社會ノ進歩ニ伴ヒテ尠カラサル量ニ上リ爲ニ海外ヨリ輸入セラル、量亦尠カラス而シテ本道ニ於テ之カ製造ニ從事スルモノ漸ク多キヲ加ヘ產品亦優良ノモノナキニアラサルモ之ヲ輸入品ニ比スルトキハ概シテ劣ルヲ免レス是レ其製造技術ノ拙劣ナルハ勿論ナルモ亦適當ナル品種ノ選擇使用ニ留意セサルニ因ルヲ以テ宜シク原料對製造法ニ關スル研究ヲ施行シ其改良ヲ圖ルコト肝要ナリトス

以上ハ本道ニ於ケル農産製造上其主要ナルモノヲ舉ケタルニ止マリ拓殖ノ進歩ニ隨ヒ益々其多キヲ加フルヤ必然ナリトス而シテ此等農産製造ハ皆熟レモ原料ニ關スル研究ヲ必要トスルモノニシテ原料ト離レ單獨ニ工業的見地ヨリ製造上ノ研究ノミヲ許ササルモノナリ然ルニ原料ニ關スル研究ニハ農業上ノ智識ヲ要スルコト大ニシテ隨テ之カ研究場ノ如キモ現今

ニ於テハ農事試驗場ヲ措テ他ニ求ム可ラス故ニ速ガニ農事試驗場内ニ農産製造ニ關スル一部ヲ特設シ以テ此等ノ研究ヲ行ハシメ之カ發展ヲ圖ルヲ急務ナリトス

四、農具ノ研究ニ關スルコト

本道ノ農業ハ其規模府縣ニ比シ稍々大ニシテ之ニ使用スル農具亦自ラ其趣ヲ異ニスルモノアリ而シテ耕墾整地除草等ニ關スル器具及器械ハ歐米ヨリ輸入セル精巧ナルモノヲ使用スルモノ比較的多ク事業功程亦速カナルモ獨リ收穫調製等ノ用具ニ至リテハ輸入品ノ形態大ニ失シ之ヲ應用スルコト難ク内國製品ニハ未タ恰適セルモノナシ故ニ本道農家ニ適應セル農具即チ主トシテ收穫調製ニ關スル農具ノ研究、考案、調査ヲ行ヒ又農具ニ關スル圖書模型等ヲ備ヘ以テ之カ創意者ヲ指導シ精巧ナル製品ノ案出ヲ圖ルコト特ニ必要ナリ

五、畜産研究ニ關スルコト

本道畜産業ニ對スル施設機關トシテ應立種畜場アリト雖モ種畜場ハ主トシテ種畜ノ繁殖、育成及畜産ニ關スル應用的試驗ヲナスノ外研究ノ事業ニ從事スルノ餘地ナキモノ如ク而モ本道畜産業ノ發展ヲ期センニハ根本的研究ヲ要スル事項一二ニシテ止マラス就中左記三項ノ如キヲ其主要ナルモノトス

一、飼料ノ栽培ニ關スル試驗

一、飼料ノ營養價值及消化率等ニ關スル試驗

一、畜産製品ノ化學的研究

即チ孰レモ忽諸ニ附スヘカラナル重要ナル研究事項タリ故ニ國費經營ノ農事試驗場ヲ擴張シ以テ畜産ニ關スル根本的研究事業ヲ開始スルハ蓋シ焦眉ノ急務トス

六、農家食物ノ研究ニ關スルコト

本道農民ハ府縣ノ農民ト異リ其食物頗ル多様ニシテ米麥ノ外諸種食品ヲ供用スルカ故ニ此等ニ關スル營養價值並ニ消化率ニ關スル試驗及食物調理法ニ關スル研究ヲ行ヒ以テ其改良ヲ圖ルノ要アリ又救荒植物ハ平年ニアリテハ敢テ其必要ヲ感セ

スト雖モ一朝凶年ニ際會センカ其効用特ニ甚大ナルニヨリ本道ニアリテハ農事試驗場ニアリテハ常ニ此等救荒植物ニ關スル研究ヲ併セ行ヒ以テ萬一ニ備フルノ必要アリ

七、農事指導事業ヲ農事試驗場ニ移スコト

本道ニニ於ケル農事指導ノコトニ從事スルモノハ本道農事試驗機關ノ實驗成績ヲ基礎トシテ以テ其任務ニ從ハサルヘカラス而シテ本道ハ地方ニヨリ氣候風土ヲ異ニシ一地方ノ試驗成績ヲ以テ他ヲ律シ難キモノアルヲ以テ從來ノ地方費農事指導員ヲ移シテ悉ク農事試驗場本支場及農事試作場等ニ配置シ指導ニ從事スルノ傍ラ實驗ニ從事スルヲ得セシメハ農民ノ信頼一層深キヲ加ヘ農事改良ノ効果ヲ擧クルコト更ニ大ナルモノアルヘク農事試驗場ニ之ニ關スル事業ヲ移スハ頗ル時宜ニ適セルモノナリト信ス

第三一 農事試作場

一 沿革

本道各農事試作場ハ孰レモ明治四十三年地方費ヲ以テ設立セラレタルモノニシテ各場共其翌年ヨリ用地開墾整理ヲ行ヒ直チニ事業ニ着手セリ

二 目的及所在地

農事試作場ハ北海道農事試驗場本支場所在地ヲ距ルコト遠ク且ツ特殊ノ風土氣候ヲ有スル地方ニ於テ作物ノ適否、良種ノ選擇ヲ試ミ耕種法ノ改善ヲ圖ルト共ニ地方重要作物及未タ重要ノ位置ニ達セサルモ將來其見込アルモノニ對シ合理的耕種法ニヨリ耕作ノ範ヲ示サンカ爲メ模範作ヲ行ヒ傍ラ良好ナル種苗ヲ育成配布シ優良品種ヲ普及セシムルヲ以テ主要ナル目

的トシ特ニ酸性土壤ノ分布最モ廣キ俱知安地方ニ在テハ專ラ該土壤ニ關スル諸種ノ試驗ヲ行ヒテ其産業的價値ヲ増大セシメ
 鉏路並ニ根室ノ如キ海霧ノ爲メ産業ノ振興セサル地方ニ對シテハ新ニ適作物ヲ見出シテ農業經營ノ良法ヲ案出シ以テ
 該方面ノ農民ヲ指導スルヲ以テ主眼トス
 本道各農事試作場所所在地左ノ如シ

- 檜山農事試作場 檜山郡厚澤部村字下蠟虫
- 膽振農事試作場 虻田郡俱知安村
- 天鹽農事試作場 中川郡下名寄村字美深
- 鉏路農事試作場 厚岸郡大田村
- 根室農事試作場 野村牛郡平系村字春別

三 組織

各試作場ハ北海道農事試驗場長監督ノ下ニ事業ヲ遂行ス其職員ハ現在農業技手各一名ニシテ檜山、膽振、天鹽、根室ノ四
 場ハ用地面積ヲ各五町歩トシ鉏路ハ將來地方農家ヲ標準トセル模範農場ヲ經營センカ爲特ニ十町歩トナセリ

四 經費

農事試作場費ハ總テ地方費支辨ニシテ創立以來大正二年ニ至ル各場經費(歲出經常)ヲ示セハ左ノ如シ

場名	費目	明治四十三年度	同 四十四年度	大正元年度	大正二年度
檜山農事試作場	諸旅場	八七五〇〇	八六五五〇	九四六五〇	一〇、五八五〇〇
	給費	三七八四〇	一八三九〇	二五〇〇〇	一三〇、〇〇〇
	計	一二五、三四〇	一〇四、九四〇	一二九、六五〇	一二三、五八〇
膽振農事試作場	諸旅場	一二六、三三〇	一四九、二七〇	一六二、二六〇	一六四、九二〇
	給費	三九、三三〇	五二、四五〇	五五、一〇〇	四七、二七〇
	計	一六五、六六〇	二〇一、七二〇	二一七、三六〇	二一二、一九〇
天鹽農事試作場	諸旅場	八三、七五〇	八六、五五〇	九七、八五〇	一〇、六八五〇〇
	給費	四七、四〇〇	一〇、九〇七	一一、〇〇〇	一六、〇〇〇
	計	一三一、一五〇	九七、四五七	一〇八、八五〇	二六、六八五〇〇
鉏路農事試作場	諸旅場	八三、七五〇	九〇、〇五〇	一〇三、三三〇	一一、一九五〇〇
	給費	六三、〇一〇	一一、八六六	一四、〇〇〇	一四、〇〇〇
	計	一四六、七六〇	一〇一、九一六	一一七、三三〇	二五、一九五〇〇
根室農事試作場	諸旅場	八三、七五〇	八〇、五五〇	九二、二五〇	一〇、五〇〇〇〇
	給費	八一、九一〇	一五、〇六四	一五、二〇〇	一六、二〇〇
	計	一六五、六六〇	九五、六一四	一〇七、四五〇	二六、七〇〇
總計	計	六二四、〇〇〇	七五三、〇〇〇	八二四、〇〇〇	八六三、〇〇〇

場名	費目	明治四十三年度	同 四十四年度	大正元年度	大正二年度
檜山農事試作場	諸旅場	八七五〇〇	八六五五〇	九四六五〇	一〇、五八五〇〇
	給費	三七八四〇	一八三九〇	二五〇〇〇	一三〇、〇〇〇
	計	一二五、三四〇	一〇四、九四〇	一二九、六五〇	一二三、五八〇
膽振農事試作場	諸旅場	一二六、三三〇	一四九、二七〇	一六二、二六〇	一六四、九二〇
	給費	三九、三三〇	五二、四五〇	五五、一〇〇	四七、二七〇
	計	一六五、六六〇	二〇一、七二〇	二一七、三六〇	二一二、一九〇
天鹽農事試作場	諸旅場	八三、七五〇	八六、五五〇	九七、八五〇	一〇、六八五〇〇
	給費	四七、四〇〇	一〇、九〇七	一一、〇〇〇	一六、〇〇〇
	計	一三一、一五〇	九七、四五七	一〇八、八五〇	二六、六八五〇〇
鉏路農事試作場	諸旅場	八三、七五〇	九〇、〇五〇	一〇三、三三〇	一一、一九五〇〇
	給費	六三、〇一〇	一一、八六六	一四、〇〇〇	一四、〇〇〇
	計	一四六、七六〇	一〇一、九一六	一一七、三三〇	二五、一九五〇〇
根室農事試作場	諸旅場	八三、七五〇	八〇、五五〇	九二、二五〇	一〇、五〇〇〇〇
	給費	八一、九一〇	一五、〇六四	一五、二〇〇	一六、二〇〇
	計	一六五、六六〇	九五、六一四	一〇七、四五〇	二六、七〇〇
總計	計	六二四、〇〇〇	七五三、〇〇〇	八二四、〇〇〇	八六三、〇〇〇

五 事業ノ要目

各農事試作場大正二年度施行ノ事業要目ヲ舉クレハ左ノ如シ

檜山農事試作場

- 一、畑作ニ關スル試驗 (重要作物品種試驗、適否試驗、籐蜀黍、扁蒲、陸稻、苧粟、ライ麥、飼料作物種類試驗、肥料三要素試驗、高畦平畦比較試驗)
- 二、田作ニ關スル試驗 (品種試驗、移植期試驗、直播期節試驗、落水期試驗、除草回数試驗、肥料三要素試驗)
- 三、模範作
- 四、種苗ノ育成配付
- 五、參考作物栽培
- 六、農事調査 (地方ニ使用セラル、農具調査、地方農家ノ副業ニ關スル調査)
- 七、農事指導

膽振農事試作場

- 一、畑作ニ關スル試驗 (重要作物品種試驗、播種期試驗、飼料作物種類試驗、肥料三要素試驗、厩肥用量試驗)
- 二、酸性土壤ニ關スル試驗 (土壤酸性矯正試驗、酸性土壤對磷酸肥料肥効比較試驗、酸性抵抗力考查試驗)
- 三、模範作
- 四、種苗ノ育成及配付
- 五、參考作物栽培
- 六、農事調査 (地方主要作物種類及其耕種法調査、酸性土壤ニ關スル調査、地方農家副業ニ關スル調査、地方ニ使用セラル、農具ニ關スル調査)
- 七、農事指導

天鹽農事試作場

- 一、畑作ニ關スル試驗 (重要作物品種試驗、播種期試驗、飼料作物種類試驗、肥料三要素試驗、輪作試驗、黑穗豫防試驗)

二、田作ニ關スル試驗 (適否試驗)

- 三、模範作
- 四、種苗ノ育成及配付
- 五、參考作物栽培
- 六、農事調査 (地方主要作物ノ種類及其耕種法ニ關スル調査、農家ノ副業ニ關スル調査、地方ニ使用セラル農具ニ關スル調査)
- 七、農事指導

釧路農事試作場

- 一、畑作ニ關スル試驗 (重要作物品種試驗、適否試驗、大麥、稗麥、春蒔小麥、スベルツ、ライ麥、稗、秋蒔小麥、玉蜀黍、黍、粟、蕎麥、春蒔蕎麥、秋蒔蕎麥、亞麻、大麻、苳、薄荷、大豆、小豆、菜豆、豌豆、播種期試驗、飼料作物種類試驗、厩肥用量試驗、過磷酸石灰加用試驗、肥料三要素試驗、馬鈴薯疫病豫防試驗)

二、參考作物栽培

三、種苗ノ育成及配付

四、農事調査

(地方ノ重要作物ノ種類及耕種法ニ關スル調査、地方ニ適スル農業組織及經營法ニ關スル調査、野草ニ關スル調査、牧草乾燥法ニ關スル調査)

五、農事指導

根室農事試作場

- 一、畑作ニ關スル試驗 (重要作物品種試驗、適否試驗、秋蒔小麥、秋蒔蕎麥、蕎麥、玉蜀黍、黍、粟、ライ麥、スベルツ、稗燕麥、大豆、小豆、菜豆、豌豆、亞麻、大麻、苳、播種期試驗、飼料作物種類試驗)

肥料三要素試驗、厩肥用量試驗、過磷酸石灰加用試驗、地力減耗試驗、馬鈴薯疫病豫防試驗

- 二、參考作物栽培
- 三、種苗ノ育成及配付
- 四、農事調査
- 五、農事指導

(地方重要作物ノ種類及其耕種法ニ關スル調査、地方ニ適スル農業組織及經營法ニ關スル調査、牧草乾燥法ニ關スル調査、野草ニ關スル調査)

六 事業ノ成績

農事試作場創立以來星霜ヲ閱スルコト僅カニ三度ニ其間力ヲ諸般ノ施設ニ割クノ要アリテ年々ノ事業亦爲ニ多少ノ制肘ヲ受クルノ遺憾ナキ能ハス隨テ數字上ニ現ハレタル成績ノ特ニ顯著ナルモノ未タ多カラスト雖モ其創設ト共ニ農民ヲ指導啓發シ着々地方農業ノ改良ニ貢獻シツ、アル無形ノ効果ニ至テハ蓋シ甚タ大ナルモノアルヲ信ス今左ニ就中顯著ナル試驗其他事業成績ノ大要ヲ録スレハ酸性土壤ノ分布最モ廣キ俱知安地方ニ在テハ土壤酸性ニ對シ先ツ石灰ヲ以テ之ヲ中和シタル後施肥栽培スルトキハ其効果特ニ著シク且ツ厩肥施用ノ効果頗ル顯著ニシテ試作場創設以來一般ニ厩肥ヲ尊重施用スルニ至リ又作物ノ酸性ニ對スル抵抗力強大ナルハ燕麥、大豆、亞麻、馬鈴薯、菜豆等ニシテ大麥、裸麥、玉蜀黍、豌豆等ノ最モ弱キヲ示シタルカ如キ或ハ從來劍路、根室地方ハ海霧ノ爲メ僅カニ根菜類ヲ栽培シ得ルニ過スト稱セラレタルモ一度試作場ノ創設ト共ニ其記録ヲ破リテ燕麥、大麥、春蒔小麥、裸麥、豌豆、春蒔蕎麥、黍等亦適作物トシテ可ナルヲ認メタルカ如キ或ハ各試作場共ニ年々種苗ノ配付ヲ行ヒ以テ優良種苗ノ普及ヲ圖レルカ如キ地方農業ノ開發ニ資セルコト決シテ鮮少ナリトセス

七 農事試作場ノ將來

本道ニ於ケル地方費支辨ニ係ル農事試作場施設ノ大要ハ前既ニ述ヘタルカ如シト雖モ本道ハ地域廣大ニシテ各地其風土

ヲ異ニスルヲ以テ到底現時ノ施設ノミヲ以テ満足スヘカラス更ニ進ンテ各地方ニ適切ナル試驗機關ヲ設クルノ要アリ而シテ農業上基本的試驗又ハ調査ノ如キハ國費支辨ノ試驗機關ヲシテ之ニ當ラシムルヲ當然トシ之カ應用的試驗ニ至リテハ地方的ニ最モ必要ナル農事試作場ヲシテ之ヲ行ハシメ以テ農事改良指導啓發機關ノ欠陥ヲ補充スルコト緊要ナリ是レ即チ尙農事試作場ノ増設ヲ要スル所以ニシテ此等機關ノ設備ナキ將來有望ナル地方若クハ既ニ衰頹ニ瀕シ改良ヲ要スル地方ニ之ヲ増置シ以テ既設農事試驗機關ト相呼應シ本道農産ノ増殖改善ニ力ヲ注クラ得ルニ至ラハ其効果蓋シ極メテ大ナルモノアルヘキハ敢テ疑ヲ容レサル所ナリ今差當リ之カ増設ノ必要ヲ認メタルハ五ヶ所ニシテ其方面別左ノ如シ

備考 道内樞要農業地方面ニ廣大ナル地積ヲ占メ之ニ多數移民ヲ收容スル御料地又ハ農科大學農場等ハ直接間接ニ農民指導ノ施設ヲ有シ主管自ラ其施設ヲ完備センコトヲ望ムカ故ニ斯カル方面ハ比較的重要視セザリキ

一、天鹽方面

位置 天鹽方面トハ天鹽國天鹽郡一圓ヲ稱スルモノニシテ天鹽川ノ下流一帯ニ分布セル殖民地ナリ

氣候 當地方ハ氣象觀測ノ據ルモノナキモ大体稚内ニ於ケル觀測ヨリ推スニ海岸ニ面スル地方ハ適順ニシテ其内奥ハ稍低冷ナリ

土質及面積 本郡ノ農牧適地面積ハ概測七万八千四百余町歩内泥炭地二万八千八百余町歩ニシテ泥炭地ハ排水不良及其他ノ理由ニヨリ利用シ能ハサル面積多カラス且ツ平地外ノ丘陵モ耕地トシテ適當ナルカ故ニ現今直チニ利用シ得ヘキ面積ハ約六万八千四百余町歩トス土質ハ壤土及泥炭地ニシテ概ネ排水不良ニシテ濕地多シ

生産 現在耕地ハ八千六百七十町歩ニシテ内水田七町歩余トス將來ノ水田見込反別ハ一千百七十七町歩ナリ現今作付セラル、重ナル作物ハ麥類、豆類、黍、玉蜀黍、馬鈴薯、蕎麥、蔬菜類ニシテ其生産額ハ六拾四万六千余圓ヲ算ス將來未墾地ノ墾成セラル、曉ニハ其生産額實ニ五百三十萬圓ニ達スルニ至ルヘシ

要之ニ該原野ハ世人一般ニ泥炭地濕地ニシテ農耕ニ利用シ得ヘキモノ僅少ナリトノ斷案ヲ下スモノアルモ將來大ニ發展ノ余地アルモノハ實ニ本原野ナリトス唯目下該原野ハ交通機關備ラス道路不完全ニシテ車馬ヲ通スルコト頗ル難ク唯頼

ルヘキハ天鹽川アルノミ且ツ電信未タ通セサルヲ以テ移民ノ不便實ニ甚シキモノアルモ將來道路排水ノ施設進捗シ加之鐵道ノ通スルニ至ラハ同地方ノ發展實ニ思半ニ過クルモノアルヘシ而モ地北地方ニ僻在シ既設農事改良機關ヲ巨ルコト遠ク之カ適用ヲ爲シ難キニヨリ速ニ農事改良機關ノ施設ヲ行ヒ以テ地方開發ノ先驅ヲシムルノ要アル所以ナリ之カ設置ノ曉ニハ該方面ト風土ヲ同フセル日本海面ニ沿ヘル宗谷郡ノ大部ニモ適用シ得ルモノト推定セラル、ヲ以テ同方面ニ於ケル農事改良機關ノ應用範圍ハ廣且ツ大ナルモノアルヘシ

二、日高方面

位 置 日高國ハ石狩、十勝、膽振ノ三國ニ接シ南ハ太平洋ニ面シ日高山脈之カ水源ヲ爲シ大小ノ河川直下南流シテ太平洋ニ注キ水勢皆急ナリ

氣 候 三方山ヲ以テ圍マレ南西海ニ面スルヲ以テ氣候溫暖ナリ之ヲ襟裳燈臺測候所ニ於ケル累年ノ觀測ニ徴スルニ一ケ年平均溫度ハ攝氏七度一分ニシテ雨雪少ク海岸ニアリテハ平均四五寸山間ニアリテモ猶二尺ニ至ラス故ニ冬期ハ牛馬ノ放牧ヲ妨ケス初霜遅ク終霜早シ

土質及面積 沙流、靜内二郡ノ農牧適地面積ハ概測七万四千餘町歩内火山灰地三万餘町歩アリ河川ノ沿岸ハ概ネ肥沃ニシテ沙流、新冠地方ハ明治七年中樽前山噴火燼ヲ被レルモ舊瘠既ニ癒ヘテ今ヤ沃土ト化セリ丘陵高原ハ牧場ニ恰適シ低地ハ最モ水田ニ適セリ現今直チニ利用シ得ヘキ面積ハ約四万四千町歩トス土質ハ砂土又ハ砂質壤土ニシテ乾燥地多シ

生 產 現耕地ハ一万一千四百五十七町歩餘ニシテ内水田二百六十一町歩餘將來水田見込反別ハ五千三十五町歩ナリ現在作付セラル、重ナル作物ハ萱類、麥類、黍、玉蜀黍、馬鈴薯、蕎麥、牧草其他蔬菜類等ニシテ其生産額ハ十七万八千九百圓ヲ算ス將來未墾地ノ墾成セラル、曉ニハ其生産額田畑合計實ニ五百九十餘万圓ニ達スヘシ

該方面ハ鐵道ノ通スルモノナキモ主幹道路整備シ港灣ト稱スヘキモノナキモ能ク函館港トノ航路連絡シ水陸共ニ比較的利便多キカ故ニ農耕適地ハ能ク開拓セラレ人口亦比較的稠密ナリ然レトモ今ヤ開拓後歲月ヲ經ルコト久シキニ從ヒ地力

次第ニ減耗スルノ傾向ヲ示セルヲ以テ之レカ復舊ノ策ヲ講スルト同時ニ開拓ヲ進ムルノ要アリ而モ日高國農業ノ中心ハ沙流郡及靜内郡ニシテ沙流郡ノ一部分ハ早來火山灰試驗地ノ試驗成績ヲ適用シ得ヘキモ其他ハ風土著シク異ナルカ故ニ特ニ其施設ヲ要スル所以ナリ

三、瀬棚方面

位 置 瀬棚方面トハ後志國瀬棚及太櫛兩郡一圓ニシテ利別川及ヒ太櫛川ニ沿ヘル二大原野ヲ云フ

氣 候 溫和ニシテ雨雪多シ

土質及面積 該方面ノ農牧適地ハ概測約四万六千餘町歩ニシテ内泥炭地ハ二千五百町歩ナリ該方面ノ平野丘陵殆ント農耕ニ適セサル所ナシ土質ハ壤土ニシテ概ネ排水良好ナルモ濕地ノ所アリ

生 產 現在耕地一万三千五百七十五町歩ニシテ將來水田見込反別二千二百三十五町歩トス主作物ハ萱類、麥類、玉蜀黍、馬鈴薯、其他蔬菜類等ニシテ其産額ハ一百萬八千七百餘圓ナリ將來ノ生産額ハ田畑合計二百六十餘萬圓ニ達スルニ至ルヘシ

要之ニ該原野ハ其地積比較的大ナラサルモ其位置恰モ既設渡島、膽振、檜山ノ各農事試驗機關ヲ距ルコト遠クシテ此等ノ試驗成績ヲ應用シ難ク又該方面ニ於ケル試驗成績ハ氣候風土相類似セル其左右及噴火灣ニ沿ヘル山越郡一圓ニ應用シ得ヘキカ故ニ其應用範圍敢テ狭キニ非ス故ニ該地方農事改良上之カ改良機關ノ設備ヲ必要トスル所以ナリ

四、空知方面

位 置 空知方面トハ空知支廳管内一圓ヲ稱スルモノニシテ石狩國ニ於ケル農業地ノ中樞タリ

氣 候 溫和ニシテ雨雪ノ量多シ

土質及面積 管内ノ農牧適地ハ概測約十七萬三千三百町歩内泥炭地三萬三千餘町歩ニシテ既ニ泥炭地ノ利用セラル、面積モ多ク平野丘陵能ク拓ケ其既墾地約十萬町歩ト稱セラル土質ハ壤土、壤土及泥炭地ナリ概シテ排水良好ナルモ濕地ノ所アリ

生 産 現在耕地九萬七百二十七町歩ニシテ内水田一萬三千六十七町歩將來ノ水田見込反別四萬五千九百二十町歩ナリ現今作付セラル、重ナル作物ハ水稻、麥類、荳類、玉蜀黍、蕎麥、馬鈴薯、蔬菜類、亞麻等ニシテ其産額八百七十六萬四千六百圓ニ達ス將來該管内ニ於ケル未墾地ノ墾成セラル、曉ニハ其生産額實ニ一千七百五十萬餘圓ニ達スヘシ

要之空知支應管内ハ本道ニ於ケル有數ノ農業地ニシテ將來灌排水等ヲ完成シ土地利用ノ進ムニ從ヒ其農産額ハ益々増加スヘク特ニ本道ニ於ケル一大米産地トシテ著名ノ地歩ヲ占ムルニ至ルヘシ是レ當管内ニ對シ農業ニ重キヲ置キ適當ナル機關ヲ設ケテ之カ試驗並ニ模範ヲ示スノ要アル所以ニシテ且ツ該地方ノ幾部ハ北海道農事試驗場ノ試驗成績ヲ應用シ得ヘキモ上川支場ノ試驗成績ハ之ヲ應用シ難キ處多キヲ以テ空知、上川間ニ於テ相當ノ施設ヲ要シ而モ該方面ニ於ケル成績ハ移シテ風土ノ相類似セル増毛支應管内ニ於ケル羽幌以南ノ地方ニ適用シ得ヘク其應用範圍極メテ大ナルヲ以テ益々該方面ニ於テ農事改良機關設置ノ必要ヲ感スル所以ナリ

五、宗谷方面

位 置 宗谷方面トハ北見國ノ北部ニ位スル宗谷枝幸二郡一圓ヲ稱シ本道ノ最北端ニ僻在スル殖民地ナリ

氣 候 日本海ニ面スル地方ハ比較的良好ナルモオコツク海ニ面スル地方ハ宗谷海峽ヨリ來ル寒潮ニ逢ヒ常ニ陰冷ニシテ夏期ハ濃霧多ク根室、釧路方面ノ如ク其ノ襲來甚シカラサルモ海岸地方ハ作物ノ成育常ニ不良ニシテ僅カニ夏作物ノ其成熟稍遅ル、モ相當ノ收穫アルノミ

土質及面積 兩郡ノ占有スル農牧適地ハ概測十四萬四千町歩ニシテ内泥炭地ハ一萬二千町歩トス泥炭地ハ排水不能ノ爲メ利用シ能ハサル面積少ク各河川ノ沿岸ニハ肥沃ノ原野少カラス且ツ丘陵ノ農牧地ハ傾斜緩ニシテ作業容易ナル所多シ有名ナル原野ハ猿拂、頓別及聲間等トス土質ハ埴土、壤土及泥炭地ナリ現在ハ概シテ排水不良ニシテ濕地多シ

生 産 現今ノ農耕地八千八百八十町歩産額六十六萬六千四百餘圓ニシテ其主要作物ハ麥類、菜豆、豌豆類、黍、

馬鈴薯、蕎麥等トス將來開拓進ミ農牧盛ンナルニ至ラハ年額千五百五十萬圓ヲ上クルヲ得ルニ至ルヘシ要之其位置本道ノ最北端ニ僻在スルカ故ニ面積二百有方里ヲ有スルニ拘ラス交通ノ不便ナルト他ノ支應管内ニ殖民地ノ豊富ナリシトニヨリ人口未タ稀薄ニシテ生産力少ク比較的世人ニ開却セラレ今尙開拓ノ初期ニアリテ其狀況大ニ振ハサルノ觀アルモ近ク宗谷線ノ開通ヲ見ルヘク道路排水モ多少ノ施設ヲ見ルニ至リ近年漸ク世人ノ注意スル所トナリ移民増加ノ趨勢ヲ示スニ至レリ故ニ此等移民ヲ安堵セシメ尙將來一層移民ヲ招致シ富源ノ開發ニ努メントセハ先ツ該方面ノ如ク他管内ト著シク風土氣候ヲ異ニスル所ニアリテハ自然他方面ト適作物ヲ異ニシ隨テ耕種法ヲ異ニセサルヘカラサルノ事實ヲ闡明シ以テ該地方農事ノ發達改良ヲ企圖センカ爲先ツ農事試作場ノ施設ヲ急務トス尙參考ノ爲前記各方面ニ於ケル現在及將來ノ農作物作付反別及生産額ノ比較對照表ヲ擧クレハ左ノ如シ

現在及將來ニ於ケル農作物作付反別及價額調表

大正	正 元		將 來		計 合	
	田	畑	田	畑	田	畑
天鹽方面	1,000	2,000	1,000	2,000	2,000	4,000
日高方面	1,500	3,000	1,500	3,000	3,000	6,000
瀬棚方面	2,000	4,000	2,000	4,000	4,000	8,000
空知方面	3,000	6,000	3,000	6,000	6,000	12,000
宗谷方面	4,000	8,000	4,000	8,000	8,000	16,000
計	11,500	23,000	11,500	23,000	23,000	46,000

備考 將來田畑作付見込反別ニ對スル反當生産價額ハ田ハ十五圓畑ハ七圓五十錢ヲ上ケ得ルモノトシテ計算セリ

本表面積ノ計算ハ天鹽方面ハ天鹽郡一圓、日高方面ハ靜内、沙流ノ二郡一圓、宗谷方面ハ枝幸、宗谷ノ二郡一圓、空知方面ハ空知、夕張、樺戸、雨龍ノ四郡一圓、瀬棚方面ハ瀬棚及太樺二郡一圓ニシテ御料地及官有地等ハ除外セリ

農事試作場ノ増設ヲ要スル所ハ以上ノ如シト雖モ其施設ノ規模ハ地方ノ狀況ニ伴ヒ其程度ヲ異ニスルコト必要ナリ

八 模範農場ノ設置

本道ハ各地著シク氣候風土ヲ異ニスルヨリ農業經營法亦種々アリテ單純ナル營農法ヲ以テシテハ農産ノ増殖ヲ計ルコト困難ナリ則チ土地ノ種類一樣ナラズシテ普通ノ土地以外ニ火山灰地泥炭地等アリ且ツ海岸ニ接スル方面ニ在リテハ氣候上顯著ナル差異ヲ表ハシ例ヘハ太平洋ニ面スル一帶即チ根室、釧路、十勝、日高、膽振ノ沿岸地方ハ潮流ノ關係ヨリ濃霧襲來シ普通農業ノ經營ヲ行ヒ難キニ反シ日本海岸一帶ハ暖潮ニ洗ハル、カ爲メ概シテ氣候溫和ニシテ各種作物ノ栽培ニ適セルカ如キ或ハ内陸部ハ潮流ノ影響少ク氣候大陸的ニシテ特ニ水稻ノ栽培ニ適セルガ如キ狀態ナリ故ヲ以テ既設農事試驗機關ノ成績ニ基キ更ニ少クモ各支廳管内各一ヶ所ノ地ニ最モ適應セル模範農場ヲ既設試作場、特定試驗地及將來設置セントスル試作場ニ併置シ以テ實地ニ營農ノ範ヲ示シ指導啓發ニ努メンカ其効果甚タ大ナルモノアルヘク例ヘハ本道東海岸一帶ハ濃霧襲來シ普通農業ヲ經營シ難キカ爲メ拓殖遅々トシテ進マズ故ニ此等ノ地方ヲ開發センカ爲メ同地方ノ大部ニ適スト思惟セラル、混同農業ノ模範場ヲ設置シ既設試驗機關ノ成績ト相俟テ指導ノ資料トナスカ如シ惟フニ混同農業法ハ獨リ同方面ニ適スルノミナラス畑作ヲ本位トスル地方ニ在リテハ其普通地タルト高原地タルト火山灰地又ハ泥炭地タルトヲ論セス悉ク移シテ之ヲ應用スルコトヲ得ヘク眞ニ地力ヲ永遠ニ保持シ健實ナル農業ノ發達ヲ期センニハ同法ニ據ルヲ以テ最モ理想的ニシテ且ツ實際的ナリト云フヲ得ヘシ所謂混同農業模範場ハ普通地ニ在リテハ一戸五町歩ニテ足レリトスルモ濃霧地方ニアリテハ拾町歩トシ内四分ハ自家用及販賣作物(主トシテ夏作物)其餘ヲ家畜飼料ノ耕作ニ充テントスルモノニシテ家畜ノ種類ハ馬、牛、綿羊及鶏等ヲ飼養シ以テ一ヶ年五百圓内外ノ生産額ヲ得セシメ自營自活ノ基ヲ作り得ルノ範ヲ示サントスルニアリ是レ固ヨリ地方ヲ限定セル方案ノ一例ナリト雖モ自然要素ノ良好ナル所ニアリテハ其地積、大家畜ノ數、夏秋販賣作物ノ割合等ハ更ニ適宜按排スルヲ得ヘク又前記以外ノ地方則チ石狩、渡島ノ如キ水田ノ耕作盛ナル所ニ在リテハ稻作模範農場、畑作ノ盛ナルトコロニ在リテハ畑作模範農場等各地方ニ適應セル模範農場ヲ設テ當業者ヲ指導啓發スルヲ刻下ノ急務トス

附種 苗圃

一、沿 革

明治三十九年北海道農事試驗場内ニ設ケラレ翌年札幌郡琴似村ニ移リ以テ今日ニ至レリ初年ノ面積ハ二町九反歩餘ナリシモ翌年四町七反歩トナリ超ヘテ四十二年ヨリ六町六反歩ニ増加セラレタリ

二、目的及所在地

本道重要農作物麥類、菽豆類、馬鈴薯其他果樹苗木ヲ養成シ以テ優良品種ノ普及ヲ企圖スルニ在リテ石狩國札幌郡琴似村ニ在リ

三、組織及經費

地方費ヲ以テ設立シ當初北海道廳監督ノ下ニ經營セシモ後北海道農事試驗場長監督ノ下ニ一名ノ農業技手ヲシテ專ラ種苗ノ生産及配付ニ從事セシメツノアリ今創立以來大正二年度ニ至ル經費ヲ示セハ左ノ如シ

項目	三十九年	四十年	四十一年	四十二年	四十三年	四十四年	大正元年	同二年
諸旅費	五三,〇〇〇	六六,九七〇	一,一〇一,五〇〇	一,四八八,六一〇	一,四四九,六五〇	一,五〇五,〇〇〇	一,四八二,〇〇〇	一,五〇四,〇〇〇
事業費	一七三,三三〇	一七九,六六七	一,三三三,五三〇	八三三,七九〇	八三三,七九〇	八三三,七九〇	一,〇三〇,九〇〇	一,〇三〇,九〇〇
計	二二六,三三〇	二四六,六三七	二,四三五,〇三〇	九七五,二七〇	九八四,二三〇	一,〇〇三,九六〇	一,一六〇,九〇〇	一,一六〇,九〇〇

四、事業ノ成績

今創立以來大正二年ニ至ル種苗配付數量ヲ示セハ左ノ如シ

種類	明治三十九年	同四十年	同四十一年	同四十二年	同四十三年	同四十四年	大正元年	同二年	計
麥類	五七,三〇〇	五一八,六〇〇	五一二,九〇〇	五七〇,六〇〇	五〇八,七〇〇	四四九,〇〇〇	三七五,〇〇〇	四三六,六〇〇	三,九四三,五〇〇

種類	年次	三十九年	四十年	四十一年	四十二年	四十三年	四十四年	大正元年	同二年	計
菽類			八五五合	三八〇合	五七〇合	五三〇合	六四五〇	八四三合	三六〇〇	三四一三八
王蜀黍			七〇〇〇	四一〇〇	三三〇〇	四六五〇	五八〇〇	五五〇〇	三三〇〇	三三五七〇
薯蕷		八五四二〇	一八一〇〇	二二七〇	三三〇〇	二六五〇	一四一〇	一六〇〇	一七〇九〇	四七六一八〇〇
玉葱		三五二斤	一五斤	三三二斤	四四二斤	二五九七八	二五〇九六	三五〇九六	二五〇九六	一八〇〇二九
蘋果		一五九五本	一六四三本	三三八一本	二九六五五本	二五三八一本	二五〇九六本	二五〇九六本	二五〇九六本	九三三九本
牧草										

以上配付セシ各種重要農作物種子及果樹苗木ハ概ネ本道ノ各部ニ傳播シ農産ノ改良増殖ニ裨益セルモノ多シ

五、置廳以來配付セル種苗ノ種類及其數量

明治十九年北海道廳ヲ設置以來農事試驗場試作場及種苗圃等ニ生産セルモノ若シクハ購入セルモノヲ本廳ニ於テ配付セシ種類及數量ヲ示セハ左ノ如シ

種類	年次	二十一年	二十二年	二十三年	二十四年	二十五年	二十六年	二十七年	二十八年
亞麻		三六〇〇〇	四一〇〇〇	二五〇〇〇	三三〇〇〇	三〇〇〇〇	二〇〇〇〇	三〇〇〇〇	三三〇〇〇
大麥									
燕麥									
小麥									
苜蓿									
苧草									
陸稻									
水稲									
陸果									
梨									
櫻桃									
葡萄									
苺									
桑									
蠶									

種類	年次	二十九年	三十年	三十一年	三十二年	三十三年	三十四年	三十五年	三十六年
亞麻			四四〇〇	七七八八	二八八六	三二〇〇	四八二五	六〇八八	二二四三
甜菜				一三五〇	二八八六	三二〇〇	四八二五	六〇八八	二二四三
薯蕷				七七八八	二八八六	三二〇〇	四八二五	六〇八八	二二四三
麥				一〇〇〇	二八八六	三二〇〇	四八二五	六〇八八	二二四三
燕麥				一〇〇〇	二八八六	三二〇〇	四八二五	六〇八八	二二四三
小麥				一〇〇〇	二八八六	三二〇〇	四八二五	六〇八八	二二四三
大豆				一〇〇〇	二八八六	三二〇〇	四八二五	六〇八八	二二四三
豆				一〇〇〇	二八八六	三二〇〇	四八二五	六〇八八	二二四三
蜀黍				一〇〇〇	二八八六	三二〇〇	四八二五	六〇八八	二二四三
陸稻				一〇〇〇	二八八六	三二〇〇	四八二五	六〇八八	二二四三
水稲				一〇〇〇	二八八六	三二〇〇	四八二五	六〇八八	二二四三
陸果				一〇〇〇	二八八六	三二〇〇	四八二五	六〇八八	二二四三
梨				一〇〇〇	二八八六	三二〇〇	四八二五	六〇八八	二二四三
櫻桃				一〇〇〇	二八八六	三二〇〇	四八二五	六〇八八	二二四三
葡萄				一〇〇〇	二八八六	三二〇〇	四八二五	六〇八八	二二四三
苺				一〇〇〇	二八八六	三二〇〇	四八二五	六〇八八	二二四三
桑				一〇〇〇	二八八六	三二〇〇	四八二五	六〇八八	二二四三
蠶				一〇〇〇	二八八六	三二〇〇	四八二五	六〇八八	二二四三

種別	年次	三十七年	三十八年	三十九年	四十年	四十一年	四十二年	四十三年	四十四年
小豆	豆	二七九〇	五二八五	七九二	一七五四	一三九四	一〇八六	二〇〇七	五四九五
豌豆	豆	八五五	四八四〇	一三三五	一四一八	一〇八一	一四八一	一四四五	四九五二
菜豆	豆	四三五	二二〇〇	四八	一九	一〇	一〇	九五	九五
蜀黍	黍	九三四〇	二九五五	三二〇〇	二一九八	四五一〇	三二八七	八〇七九	七七九九
蕎麥	麥	五九〇	一八八二	一七五六	三〇五三	一三六三	一八八三	一八三三	五七三四
燕麥	麥	八七九	五三三	一六四七	一八〇〇	一五四三	一三六〇	二六三〇	三六
水稻	稻	三二七〇	一三〇二	四七二〇	二七〇八	二一八〇	一七四九	二二二〇	一七二七
陸稻	稻	一九八五	一八七五	四〇	一六二	八二九	一四八	一〇	三〇九
粟	粟	二〇〇〇	三三〇〇	一六五〇	一五〇八	一九六九	二五八八	三三七一	三三三六
黍	黍	七五六〇	二六八〇	八七六〇	三〇八三	三六二九	三七一七	九〇〇〇	一〇一〇〇
蕎麥	麥	一八九七	九二	一六五〇	一〇〇三	一〇〇〇	二五八八	三三七一	三三三六
燕麥	麥	五五八二	二九三三	四〇三六	四八〇三	二九四七	四二〇九	三七五七	四一八九
蠶絲	種	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇
胡蘿蔔	種	八〇〇	二斤	一五斤	三七斤	二九四七	四二〇九	三七五七	四一八九
蘿蔔	種	三〇〇	二斤	一五斤	三七斤	二九四七	四二〇九	三七五七	四一八九
葱	種	三〇〇	二斤	一五斤	三七斤	二九四七	四二〇九	三七五七	四一八九
瓜	種	三〇〇	二斤	一五斤	三七斤	二九四七	四二〇九	三七五七	四一八九
草	種	三〇〇	二斤	一五斤	三七斤	二九四七	四二〇九	三七五七	四一八九
青	種	三〇〇	二斤	一五斤	三七斤	二九四七	四二〇九	三七五七	四一八九
高粱	種	三〇〇	二斤	一五斤	三七斤	二九四七	四二〇九	三七五七	四一八九
甘蔗	種	三〇〇	二斤	一五斤	三七斤	二九四七	四二〇九	三七五七	四一八九
蔬菜	種	三〇〇	二斤	一五斤	三七斤	二九四七	四二〇九	三七五七	四一八九

種別	年次	三十七年	三十八年	三十九年	四十年	四十一年	四十二年	四十三年	四十四年
豌豆	豆	二七九〇	五二八五	七九二	一七五四	一三九四	一〇八六	二〇〇七	五四九五
菜豆	豆	八五五	四八四〇	一三三五	一四一八	一〇八一	一四八一	一四四五	四九五二
蜀黍	黍	九三四〇	二九五五	三二〇〇	二一九八	四五一〇	三二八七	八〇七九	七七九九
蕎麥	麥	五九〇	一八八二	一七五六	三〇五三	一三六三	一八八三	一八三三	五七三四
燕麥	麥	八七九	五三三	一六四七	一八〇〇	一五四三	一三六〇	二六三〇	三六
水稻	稻	三二七〇	一三〇二	四七二〇	二七〇八	二一八〇	一七四九	二二二〇	一七二七
陸稻	稻	一九八五	一八七五	四〇	一六二	八二九	一四八	一〇	三〇九
粟	粟	二〇〇〇	三三〇〇	一六五〇	一五〇八	一九六九	二五八八	三三七一	三三三六
黍	黍	七五六〇	二六八〇	八七六〇	三〇八三	三六二九	三七一七	九〇〇〇	一〇一〇〇
蕎麥	麥	一八九七	九二	一六五〇	一〇〇三	一〇〇〇	二五八八	三三七一	三三三六
燕麥	麥	五五八二	二九三三	四〇三六	四八〇三	二九四七	四二〇九	三七五七	四一八九
蠶絲	種	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇
胡蘿蔔	種	八〇〇	二斤	一五斤	三七斤	二九四七	四二〇九	三七五七	四一八九
蘿蔔	種	三〇〇	二斤	一五斤	三七斤	二九四七	四二〇九	三七五七	四一八九
葱	種	三〇〇	二斤	一五斤	三七斤	二九四七	四二〇九	三七五七	四一八九
瓜	種	三〇〇	二斤	一五斤	三七斤	二九四七	四二〇九	三七五七	四一八九
草	種	三〇〇	二斤	一五斤	三七斤	二九四七	四二〇九	三七五七	四一八九
青	種	三〇〇	二斤	一五斤	三七斤	二九四七	四二〇九	三七五七	四一八九
高粱	種	三〇〇	二斤	一五斤	三七斤	二九四七	四二〇九	三七五七	四一八九
甘蔗	種	三〇〇	二斤	一五斤	三七斤	二九四七	四二〇九	三七五七	四一八九
蔬菜	種	三〇〇	二斤	一五斤	三七斤	二九四七	四二〇九	三七五七	四一八九

種別	年次	三十七年	三十八年	三十九年	四十年	四十一年	四十二年	四十三年	四十四年
草花		七〇〇	九〇〇	三六〇	一、八〇〇	一、〇〇〇	—	—	—

六、種苗配付ノ方針及其方法

過去ニ於ケル本道ノ種苗配付ハ明治初年開拓使ニ於テ既ニ盛ニ海外ヨリ穀蔬蔬菜果樹類等ノ種苗ヲ輸入シテ之ヲ移民ニ配付シ降テ道廳時代ニ至リテモ之ヲ育成或ハ購入シテ普及ヲ計リ其間麥酒、製粉等ノ如キ大會社及種苗商モ亦種苗ノ傳播ニ與テ力アリ此他新來移民ノ携帶セルモノヲ合セ此等幾多ノ品種ハ難然トシテ栽培セラレシモ年ト共ニ新陳代謝シ其今日ニ殘レルモノ甚タ多カラス唯海外特ニ米國ヨリ輸入セルモノハ本道ノ風土ニ恰適シ優良品種ノ地歩ヲ占ムルモノ尠カラス而シテ道廳専ラ之カ配付ノ衝ニ當リ郡町村農會青年會等モ近時相當設備ヲ以テ配付事業ニ從事スルニ至レルモ何レモ直接個人ニ配付セルカ爲メ勞多クシテ効果之ニ伴ハサルノ觀アリテ容易ニ多數農家ノ要望ニ應ジ良種ノ普及ヲ期シ難キモノアリキ然ルニ最近ハ種苗配付事業ヲ農事試驗場ニ移スノ勝レルヲ認メラレタル結果爾今當業者ニ配付スル種苗ハ農事試驗場本支場、蠶業講習所、農事試作場及種苗圃ニ於テ原々種ヲ育成シ之ヲ區町村若クハ町村農會ノ原種圃ニ供給シ以テ系統的ニ優良品種ノ普及ヲ圖リ桑樹果樹苗木及特別ノ場合ヲ除クモノ、外直接個人ニ配付セサルコト、セリ而シテ其原種ニ供用スキヘ品種ハ氣候風土ノ異ナルニ隨ヒ適種ヲ選ヒテ適所ニ用フヘキヤ勿論ニシテ道内ノ自然狀態及經濟上ノ關係ヨリ精細ナル觀察ヲ下ストキハ其適種甚タ乏シカラサルモ由來育種ノ根底ハ優良ナル純系ノ選出ニアリテ而モ一品種ノ栽培ト雖モ容易ニ行ヒ得ヘカラス況ンヤ道内各地ニ於ケル適種ヲ悉ク育成センハ到底企及スヘカラサルヲ以テ多年本支場ニ於テ試驗ノ結果本道ノ大体ニ適シ優良ト認メタル品種ニツキ其適用ノ範圍並ニ品種統一上ノ利便ヲ考察シテ其大略ヲ定メラレタリ又其配付方法ハ先ツ農事試驗場本支場種苗圃及農事試作場ニ原々種圃ヲ設ケ純系栽培ヲ行ヒテ原々種ヲ育成シ之ヲ無償ニテ區町村又ハ町村農會ニ配付シ區町村又ハ町村農會ハ更ニ原種圃ヲ設ケ原種ヲ育成シ部内當業者ニ順次無償又ハ實費ヲ以テ配付セントスルモノニシテ採種圃ノ組織ヲ系統的ナラシムルハ最モ理想的施設タリト雖モ其事業ノ成否ハ一ニ懸リテ町

村又ハ町村農會ニ於ケル技術者其人ヲ得ルト否トニアルヲ以テ宜シク適才ヲ得ルニ努ムヘク之カ經營管理ニ關シテハ上級農會ハ勿論道廳勸業關係員ハ直接間接ニ監督指導シ以テ事業遂行上遺憾ナキヲ期スルコト必要ナリ

第三 測候所

一、沿革

本道ニ設立セラレタル各地測候所ノ創立及廢止ノ年月ヲ調査スルニ左ノ如シ

測候所名	創立年月	備考
函館一等測候所	明治五年六月	本邦ニ於ケル測候所ノ嚆矢ナリ
札幌一等測候所	明治九年九月	
根室一等測候所	明治十二年七月	
壽都二等測候所	明治十七年六月	
上川二等測候所	明治二十一年八月	明治三十一年上川郡神居村ヨリ旭川町元上川農事試驗場構内ニ移轉ス
十勝二等測候所	明治二十五年一月	明治二十六年四月二等測候所ト改稱ス
釧路二等測候所	明治二十二年九月	
網走二等測候所	明治二十二年八月	
紗那二等測候所	明治二十八年三月	
襟裳測候所	明治十九年八月	明治二十二年三月廢止ト同時ニ事業ヲ襟裳燈臺ニ屬託ス
留萌測候所	明治十一年四月	明治十三年廢止ス
増毛測候所	明治十四年五月	明治十八年八月廢止ス
宗谷測候所	明治十八年十一月	明治二十二年二月廢止ス
稚内二等測候所	明治二十二年八月	明治二十八年廢止ス

以上ノ外重要ナル事項ニ屬スル沿革ハ左ノ如シ

- 明治十三年三月函館、小樽、札幌ニ暴風信號標ヲ設置ス之ヲ本邦ニ於ケル暴風信號標ノ嚆矢トス
- 明治十五年二月開拓使ヲ廢シ三縣ヲ置ル、ト共ニ測候所ハ各所在ノ縣ニ屬ス
- 明治十九年一月三縣ヲ廢シ北海道廳ヲ置カレ各測候所ハ道廳ノ所屬トナル同月氣象臺測候所條例同施行細則發布セラレ
- 測候所ハ一等、二等、三等ノ三種ニ區別シ全國統一ノ下ニ氣象觀測ヲ施行スルニ至レリ
- 明治二十一年七月札幌、函館、根室ヲ一等トナシ毎時觀測ヲ開始シ壽都、襟裳、宗谷ヲ二等トナシ六回觀測ヲ開始セリ
- 明治二十二年一月函館、札幌、根室ノ測候所ニ於テ天氣豫報ヲ揭示シ日々日刊新聞ニ掲載スルコト、セリ
- 明治二十四年四月濱益漁業組合頭取ノ出願ヲ許可シ特ニ鯨漁期間中暴風警報通報ヲ開始ス之レ漁期中暴風警報ノ通報嚆矢タリ
- 明治二十五年五月氣象臺測候所條例同施行細則ヲ改定セラレ測候所ハ一等、二等ノ二種トセラル
- 明治二十九年十二月各測候所ニ於テ天氣豫報信號旗ヲ掲揚シ公衆ノ便ニ資ス
- 明治三十年四月暴風警報信號標取扱箇所ニ暴風警報通報ノ外鯨漁期間全道樞要ノ箇所十九ヶ所ニ警報通報ヲ始ム
- 明治三十二年出水豫報心得ヲ定メ石狩、十勝、釧路ノ三川ニ實施ス
- 明治三十六年農期及養蠶期中函館、札幌、上川ノ各測候所ヨリ農村三十七ヶ所ニ天氣豫報ヲ通報ス
- 明治三十九年鯨漁期中天氣豫報通報箇所十六ヶ所ノ外更ニ十六ヶ所ヲ増加シ又昆布期中天氣豫報ヶ所ノ六十ヶ所ヲ加フ
- 明治四十一年二月勅令第十一號ヲ以テ暴風雨條例發布セラレ函館、小樽、釧路、根室ノ四ヶ所ニ其位置ヲ指定セラレタルニヨリ直ニ信號標ヲ建設シ十月ヨリ實施ス

二 目的及所在地

氣象臺測候所條例及同施行細則ニ基キ所在地ノ氣象ヲ觀測シ所屬應管內ノ氣候ヲ調査シ地方天氣豫報地方暴風警報ヲ發シ以テ諸般ノ事業ノ應用ニ資スルヲ以テ目的トス而シテ開拓使設置ノ當初ニアリテハ漁業及航海業トノ關係ヨリ測候所ハ多ク海邊ニ設置セラレタリシモ内部ノ開拓日ニ月ニ進ムニ隨ヒ應用ノ範圍擴大シ内陸地方ニモ設置セラル、ニ至レリ其現在ニ於ケル種類及所在地左ノ如シ

等	級	測候所	所在地
一	等	函館	函館區海岸町埋立地
一	等	札幌	札幌區北八條西九丁目
一	等	根室	根室町字花咲町六丁目
二	等	壽都	壽都町字開進町
二	等	上川	旭川區六條過十丁目
二	等	十勝	帶廣町
二	等	釧路	釧路町字幣舞町
二	等	網走	網走町
二	等	紗那	紗那村
二	等	襟裳	幌泉郡襟裳岬

但シ襟裳ハ同地ノ燈臺ニ觀測ヲ囑託セルモノナリ

三 組織

測候所ヲ分チテ一等及二等トシ一等測候所ハ毎時觀測ヲナシ二等測候所ハ一日六回ノ觀測ヲナス其備付器械ハ條例ニ依リ定メラレ一等ト二等トニハ多少ノ差アルモノトス
現在ノ職員ハ技師一名技手二十名書記九名技術員十四名計四十名アリ

計	四十四年			四十五年			四十六年			四十七年			計
	農	商	其他	農	商	其他	農	商	其他	農	商	其他	
函館	110	10	10	110	10	10	110	10	10	110	10	10	387
知山	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	165
增毛	90	10	10	90	10	10	90	10	10	90	10	10	385
河幌	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	165
室蘭	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	165
後志	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	165
網走	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	165
根室	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	165
宗谷	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	165
上川	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	165
釧路	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	165
計	210	10	10	210	10	10	210	10	10	210	10	10	710

本調査ハ本道所在各郵便局ニツキ調査セルモノニシテ直接測候所ヲ通シテ利用セルモノハ之ヲ加算セス尙函館支廳ノ利用件數特ニ多キハ當地方ニ於ケル漁業家ニシテ農業ヲ兼ヌルモノヲ農業者ト認メタルカタメナルヘシ尙函館、小樽、札幌ノ三區ハ利用件數少キニヨリ便宜所在支廳ニ加算セリ

印刷物ノコート
 本道測候所創立以來觀測又ハ調査ノ成績ヲ發刊セルモノ大要左ノ如シ
 毎年發刊スルモノ

種	類	部	數	摘	要
氣年	報	部	330部	每	月(二十九年ヨリ三十三年迄ハ毎月五百部ヲ發行セリ)
候	班	部	300部		

- 臨時刊行セシモノ
- 北海道氣象報文 (札幌ノ部) 500部 明治二十七年六月
 - 同 (上川ノ部) 300部 同 二十九年三月
 - 札幌測候所五年報 (明治二十四年ヨリ同二十八年迄) 300部 同 二十九年三月
 - マツカリヌプリ觀測記 (函館ノ部) 300部 同 二十九年三月
 - 北海道氣象報文 (根室ノ部) 300部 同 三十年
 - 利尻山觀測記 (網走ノ部) 300部 同 三十一年一月
 - 北海道氣象報文 (釧路ノ部) 300部 同 三十一年八月
 - 同 (十勝ノ部) 300部 同 三十一年九月
 - 唯阿寒山觀測記 (網走ノ部) 300部 同 三十一年十一月
 - 北海道氣象報文 (網走ノ部) 300部 同 三十一年十一月
 - 同 (全道ノ部) 500部 同 三十一年十一月
 - 明治三十一年洪水報告 300部 同 三十一年一月
 - 北海道氣象報文 300部 同 三十一年一月
 - 同 300部 同 三十一年三月
 - 利尻山觀測記 300部 同 三十一年三月
 - 上川氣象十年報 300部 同 三十一年六月
 - 手稻山氣象觀測記 300部 同 三十一年八月
 - 明治三十七年洪水報告 300部 同 三十七年十一月

第三 測候所

三角山氣象觀測記	三〇〇	同	三十八年九月
北海道氣象候編	三〇〇	同	三十八年十一月
北海道流水調査報文	三〇〇	同	三十九年七月
天氣ト暴風	三、〇〇〇	同	三十九年三月
函館測候所一覽	二〇〇	同	四十年七月
農業氣象編	一、〇〇〇	同	四十三年四月
天氣豫報、暴風警報取扱心得	三〇〇	同	四十三年四月
農業氣象編	五〇〇	同	四十四年
天氣豫報暴風警報解	五、〇〇〇	同	四十四年
上川氣象候特微	三〇〇	同	四十四年
天氣豫報暴風警報取扱心得	三〇〇	同	四十四年四月
氣象學大意	二〇〇	同	大正二年二月
上川氣象二四十年報	三〇〇	同	二年三月
霜害豫防ノ心得	一〇、〇〇〇	同	九月

七 測候所ノ將來

本道ニ於ケル測候所施設ノ概要ハ前既ニ述ヘタルカ如クニシテ既設測候所ノ多クハ海岸ニ設置セラレ其内陸ニ設ケラレタルモノ比較的少シ即チ海岸ニ置カレタルハ函館、壽都、釧路、網走、襟裳等ニシテ其内陸ニ於ケルモノハ上川、河西及ヒ札幌ノ三箇所ニ過キス隨テ漁業航海者ニ利スル所厚ク農業經營者ニ利スル所薄キヲ免レサルニヨリ現在測候所ノ中央部ニ位スル上川ヲ一等トシ以テ農業トノ關係ヲ一層精密ニ調査スルノ必要アリ又膽振ノ高原地タルマツカリスプリノ周圍ニ於ケル廣大ナル農業地ハ氣候他ト異ナルヲ以テ茲ニ一ノ測候所ヲ設置スルノ必要アルモ現在ノ壽都測候所ヲ移轉スルトキハ海陸兩方面ニ應用シ得ルノ便アリ又沙那測候所ハ漁業、航海及本邦全般ニ於ケル氣象調査上必要ナルモ調査上特ニ支障ナキヲ以テ之ヲ根室測候所ノ支所トナシ新ニ北見及根室ノ内陸部ニ農業ヲ本位トセル測候所ヲ設置スヘク日高、天鹽及渡

島ノ西部ハ農業及漁業上必要ナルヲ以テ此方面ニモ亦新設スルノ要アリ
以上ノ農業的見地ヨリ現在測候所機關ノ改發又ハ新ニ施設ヲ要スト認ムルモノ左ノ如シ

- 上川測候所ヲ一等測候所ニ改ムルコト
- 膽振方面ニ二等測候所ヲ設置スルコト
- 沙那二等測候所ヲ根室測候所ノ支所ニ改ムルコト
- 北見内陸方面ニ二等測候所ヲ設置スルコト
- 日高方面ニ二等測候所ヲ設置スルコト
- 天鹽方面ニ二等測候所ヲ設置スルコト
- 渡島ノ西部方面ニ二等測候所ヲ設置スルコト
- 根室内陸方面ニ二等測候所ヲ設置スルコト

此他特殊ノ氣候ヲ有スル所ニハ支所又ハ特定氣象調査所ヲ設置シ前者ハ永久ニ後者ハ三ヶ年乃至五ヶ年繼續施行スヘク斯ノ如クニシテ本道ニ於ケル氣象觀測ヲ行フニ至ラハ能ク其氣候風土ヲ詳悉スルコトヲ得テ農業經營上遺憾ナキヲ期スルヲ得ンカ之ニ彼ノ樺太ノ如キ小面積ニアリテモ現在四ヶ所ノ測候所ヲ有シ臺灣ニハ六ヶ所朝鮮ニハ十二ヶ所ヲ算シテ將來ハ其支所ヲ三十ヶ所ニ達セシムル見込ナルニ比スレハ本道ニ於ケル數ハ決シテ過大ニ非サルナリ

而シテ本道ニ於ケル測候所ハ各所在區域ノ氣象ニ觀測ヲ行ヒ中央氣象臺ノ下ニ統一セラル、モ各個ノ間連絡ヲ欠キ僅カニ本廳ニ於テ氣象事務ニ關スル統一ヲ圖ルカ如キ現況ナルニヨリ之カ組織ヲ改メ高級測候所ヲシテ下級測候所ヲ管理統一スルコト恰モ農事試驗場ニ於ケルカ如カラシメ以テ一層其成績ヲ擧ケシムルヲ緊要ナリトス
尙將來測候所ニ於テ農林業上特ニ關查ヲ必要トスル事項ヲ列舉スレハ左ノ如シ
一、風防林ニ關スル調査

本道拓殖ノ進歩ニ伴ヒ漸次風力ノ増加セルハ測候所觀測ノ成績ニ微シテ明ナルニ未タ樹林ノ高サト風防良効距離トノ

- 關係ヲ調査シタルモノナキヲ以テ風防林設置上之カ調査ヲナスノ要アリ
- 二、垂直ニ於ケル氣溫變化ノ調査
平地ノ既ニ開發セラレタル處ハ漸次山腹ニ向ケ開發セラレツ、アリ而シテ内陸ト海邊トハ勿論山脈ノ向背ニ因リ自ラ氣候ヲ異ニスルヲ以テ農業ニ適當ナル最高限度ヲ定メンニハ垂直ニ於ケル氣溫變化ヲ調査スルノ要アリトス
- 三、拓殖上重要ナル原野ノ氣候調査
現在測候所々在地以外重要ナル原野ノ氣候ハ地勢ノ關係ニ因リ大ニ異ナルヲ以テ之カ調査ヲナシ其地方恰適ノ農業經營ニ便スルノ要アル所以ナリ
- 四、森林ト氣溫トノ關係調査
森林ノ氣候ト密接ナル關係ヲ有スルハ明カナルモ本邦ニ於テハ未タ具體的ノ調査ナク僅カニ三年前ヨリ農商務省ニ於テ數ヶ所ニ森林測候所ヲ設置シ之カ調査ニ着手シタルノミ幸ニ本道ハ府縣ト其趣ヲ異ニシ未タ斧鉞ヲ加ヘサル大森林ニ富ムヲ以テ此處ニ調査機關ヲ設置シ之カ調査ヲ進ムルヲ可トス
- 五、北千島方面ニ於ケル高壓部ノ異動調査
夏季千島方面ヨリオコツク海ニ顯ル、高壓部ハ本道ノ氣候ニ惡影響ヲ及ホスカ如キヲ以テ之カ動靜ヲ詳細ニ知ルコトヲ得ハ春季ニ於テ適當ナル耕種ノ方法ヲ講シ幾分其影響ヲ免カル、ノミナラス長期氣候豫報上最モ有力ナル材料タルヲ得ヘシ

第四 結 論

農事ニ關スル試驗及模範事業ハ本道農業上最モ必須ノ施設タリ是ヲ以テ其機關トシテ從來拓殖費支辨ニ係ル北海道農事試驗場、火山灰地試驗場、泥炭地試驗場、委託並ニ輪作試驗等ノ外地方費ニ屬スル廳立農事試驗場及蠶業教育機關タル札

幌農事講習所等ヲ設ケラレタリト雖モ此等各機關ノ間連絡ヲ欠キ個々孤立セルノ觀アリキ然ルニ明治四十三年新ニ本道經營案ノ確立セラル、ヤ地方費ニ屬スル前記諸機關ハ總テ國費ニ移換セラレ北海道農事試驗場ヲ本場トシ之ニ火山灰地試驗、泥炭地試驗、委託及輪作試驗事業ヲ併合シ其他ハ悉ク之カ支場タルニ至リ茲ニ始メテ一定ノ方針ニ基キテ秩序アル試驗ヲ行ヒ得ルノ曙光ヲ認メ本場ニ於テハ專ラ普遍的ノ試驗及調査ヲ行フト共ニ重要作物ニ關スル試驗並ニ模範作ニ力ヲ致シ支場ニアリテハ各其地方重要作物ニ關スル試驗並ニ模範作、蠶業講習所ニ在リテハ蠶業ニ關スル試驗調査並ニ講習生ノ養成ニ主力ヲ注キ又地方費ヲ以テ新設セラレタル楡山、膽振、天鹽、釧路、根室ノ各農事試作場ハ本場長監督ノ下ニ地方主要作物試驗ヲ行ヒ耕作ノ模範ヲ示シ以テ地方農事ノ改良發達ニ資セントシ既設機關ハ茲ニ全ク連絡統一ヲ見ルニ至レリ然レトモ由來本道ノ地域タル頗ル廣濶ニシテ各地其狀態ヲ異ニシ主要農作物ノ如キ亦自ラ別アリテ如上ノ試驗機關ノミニテハ未タ以テ足レリトスヘカラス更ニ各種機關増設ノ必要ヲ見ルニ至レル所以ニシテ委託試驗事業ノ如キ亦大ニ擴張ノ要アルヲ見ルト共ニ郡町村農會ニ在テモ適宜試作ヲ行フモノアルヘシト雖モ郡町村農會ニ於テ試作ヲ行フニ當リテハ豫メ近接試驗機關ト圖リテ其方案ヲ協定スル等能ク試驗機關トノ連絡ヲ保ツニアラサレハ時ニ却テ農民ヲシテ其據ル處ニ迷ハシムルカ如キコトナキ能ハス郡町村農會ト試驗機關トノ關係ハ昔ニ之ノミニ止マラス爾今原種ノ育成配付ニ從事スルニ至ラハ更ニ一層密接ノ關係ヲ生スヘク此秋ニ際シ相互ノ間何等連絡ヲ有セザランカ往々ニシテ其事業ハ光輝ヲ伴ハサルコトナキヲ保シ難キヲ以テ適當ノ方法ヲ講シ連絡統一ヲ圖ルノ要アリ

又農事試驗場ノ業務中農事指導ノ如キ或ハ植物病蟲害防除ノ如キ或ハ公衆依頼ノ分析、種苗ノ鑑定及配付ノ如キ更ニ其特色ヲ發揮シ其效果ヲ舉ケントセハ愈々之カ利用ヲ一般ニ俟タサルヘカラス故ニ各種勸業機關ハ互ニ氣脈ヲ通シ此等ニ關シ常ニ農民ニ便宜ヲ與ヘ一層其活用ヲ圖ルヲ緊要トス

又農事試驗場ト測候所トハ各其監督ヲ異ニスト雖モ農業上極メテ密接ノ關係ヲ有スルヲ以テ現在測候所ヲ改廢シ或ハ之ヲ新設スル等ノ場合ニアリテハ特殊ノ事由アルモノ、外可及的既設又ハ新設ノ農事試驗機關ニ近接シテ之ヲ設置シ以テ農業ト氣象トノ關係ヲ深甚ナラシメ其事業ノ效果ヲ大ナラシムルカ如キ最モ時宜ニ適スルモノタルヲ失ハス即チ其直接タルト

間接タルトヲ問ハス苟モ本道ニ農産ノ改良増殖ニ關係ヲ有スル機關ヲ統一シ一糸亂レサルノ連絡ヲ有セシムルハ雖テ各種機關ヲシテ一層有用ナラシムル所以ニシテ斯ノ如クニシテ始メテ成績ノ顯著ナルヲ期シ得ヘシ

又本道ニ於ケル産業ハ農牧、水産、商工業等素ヨリ一、ニシテ止マラスト雖モ將來本道農耕適地悉ク其處ヲ得テ生産ヲ舉クルニ至ラハ農産物生産額ハ實ニ一億六千余万圓ノ巨額ニ上ルヘク本道産業中其生産價額ニ於テ之カ右ニ出ツルモノナカ

ルヘシ而シテ此多大ナル生産ハ勿論悉ク地産ノ賜ニシテ地力ノ漸減スルニ隨ヒ之カ維持方法ヲ攻究セサルヘカラサルハ勿論生産原料ハ更ニ加工シテ其價格ヲ増進セシムルト共ニ其工業原料タル農産物ハ其品質ヲ改善シ一層其生産力ヲ増進セシメサルヘカラス將來尙幾多ノ試験機關ヲ設ケテ調査研究ヲ重ネ斯業者ヲ指導啓發シテ以テ始メテ其目的ヲ達スルニ至ルヘシ

是ニ於テカ産業振興上小規模ノ施設ニ満足セス更ニ進ンテ從來習慣上ノ拓殖費ニ屬スル各種産業組織機關ヲ改廢シ其施設上偏輕偏重ノ嫌ナク産業發達上各其均衡ヲ得セシメ各種機關ノ權威ヲ發揚シテ時勢ノ要求ニ應スルヲ以テ根本義トスヘシ

若夫レ之カ施設ニ要スル經費ニ至リテハ基本的研究的事業ハ國庫ノ支辨ニ俟ツヘク地方的應用的事業ハ主トシテ地方費ノ支辨ヲ俟ツヲ以テ適當ナリトセン

間接タルトヨ間ハモ本道ニ農産ノ改良増殖ニ關係ヲ有スル機關ヲ統一シテ系統レサルノ連絡ヲ有セシムルハ應テ各種
 機關ヲシテ一層有用ナラシムル所以ニシテ斯ク如クニ開始メテ成績ノ顯著ナルヲ期シ得ヘシ
 又本道ニ於ケル農業ハ農牧、水産、商工業等ヲ包含シテニシテ止マラズト雖モ實業本道農科適地悉ク其處ヲ得テ生産ヲ舉
 グルニ至ラハ農産物生産額ハ實ニ一億六千万圓ノ巨額ニ上ルヘツ本道産業中其生産價額ニ於テ之カ右ニ出ツルモノナカ
 ルヘシ而シテ此多大ナル生産ハ勿論悉ク地産ノ國ニシテ地方ノ潤減ニルニ關ヒ之カ維持方法ヲ攻究セサルヘカラサルハ勿
 論生産原料ハ更ニ加工シテ其價格ヲ増進セシムルト共ニ其工業原料タル農産物ハ其品質ヲ改善シ一層其生産力ヲ増進セシ
 メサルヘカラス將來尙幾多ノ試驗機關ヲ設ケテ調査研究ヲ重テ農業者ヲ指導啓發シテ以テ始メテ其目的ヲ達スルニ至ルヘ
 シ是ニ於テカ産業振興上小規模ノ施設ニ満足セシ更ニ進シテ從來習慣上ノ拓殖費ニ屬スル各種産業組織機關ヲ改廢シ其施
 設上偏輕偏重ノ疑ナク産業發達上各其均衡ヲ出シシメ各種機關ノ權威ヲ發揚シテ時勢ノ要求ニ應スルヲ以テ根本義トニヘ
 シ若夫レ之カ施設ニ要スル經費ニ至リテハ基本的研究の事業ハ國庫ノ支辨ニ依ツヘク地方の應用的事業ハ主トシテ地方費
 ノ支辨ヲ依ツヲ以テ適當ナリトセン

農 事 指 導

農事指導

農事指導機關ハ勅令第二百六十七號(明治三十一年十月)及農商務省訓令第三十五號(明治三十一年十月)ニ基キ設置シタル地方費支辨指導吏員ヲ主トシ國費支辨技師技手之ヲ補助シ新開地指導ノ爲メニハ國費支辨事業手及前記地方費吏員ニ國費ノ囑托ヲナシ指導上遺憾ナキヲ期セラル而シテ國費農事試驗場地方費種畜場及試作場ノ職員ハ各其職能ニヨリテ指導ニ當ル現在指導機關ハ其性質上ヨリ便宜種別シテ普通農事指導、畜産指導、蠶業指導、産業組合指導ノ四種ニ分タル、モ本調査ニハ前三者ノミニ就キ論述シ、産業組合指導ハ産業組合ノ題下ニ記述セルヲ以テ茲ニハ之ヲ省ク

一 沿革

(一) 普通農事指導ノ沿革

本廳農事指導機關ノ沿革ハ置廳以前ニ於テ已ニ諸般ノ施設ヲ見タルモ農家ト接觸シ當業者ト親昵シテ直接ニ農事指導ヲ開始シタルハ置廳後ノ施設ニ屬シ殊ニ明治二十年本道物産共進會開催ヲ好機トシ札幌ニ全道農業篤志者二十四名ヲ召集シ四日間農事改良上ニ就キ諮問シ協議ヲ遂ケタルカ如キハ蓋シ本事業ノ實體ヲ備フルニ至リシ嚆矢ト見ルヘシ越ヘテ明治廿二年ニ至リ漸ク具体的ニ進ミ亞麻大麻獎勵ノ爲メ魯佛二國ヨリ購入シタル亞麻原種四十餘石ヲ當業者ニ配付シ更ラニ進ンテ白耳義ヨリ現業師ヲ僱聘シ亞麻大麻ニ對スル耕種方法ヲ實地指導セシメ一面皮剝器械數臺ヲ購入シ札幌郡江別村及根室郡和田村ニ一時貸與又ハ下付シタルニ其效果ハ豫期ニ適ヒ尠ナカラサルモノアリシ又同年ノ施設トシテ見ルヘキモノハ本道農耕状態ニ顧リミ勞力經濟ノ節約ハ最モ緊要ノコトニ屬スルヲ認メ農具改良ノ目的ヲ以テ和洋製新式農具五十二種八百五十八個ヲ札幌、函館、樺山、龜田、室蘭、釧路、増毛ノ各郡ニ下付又ハ拂下ヲナシ使用上ニ付實地指導ヲナセリ明治廿

四年ニ至リ農事改良指導ノ先驅ハ優良種苗配付ニ與ル處多キヲ認メ先ツ當時ノ主要作物タル玉蜀黍、大麥、小麥、大豆、小豆ノ種子ヲ岩内、土磯、蛇田ノ三郡及日高、十勝、釧路、根室ノ四國ニ配付シ又苹果、梨、櫻桃、莓等ノ苗木ヲ網走、宗谷ノ二郡ニ配付シ栽培指導ノ上普及ノ途ヲ計レリ越ヘテ二十五年新十津川移民ノ渡道スルヤ特ニ農事ノ實際ニ熟達セル指導員ヲ附隨セシメ現地開墾法ヨリ將來ノ營農上ニ付實地ノ指導ヲ試ミ當業者ヲシテ其業ニ安セシムルニ資セリ同廿六年ニ至リ上川郡雨紛原野ノ土質氣象カ大麻作ニ適スルヲ認メ將來ノ重要産物タラシムル見込ヲ以テ良種子ヲ配付スルト共ニ耕種及製造上ニ付巡回指導セシムルトコロアリ同二十九年ニ至リテ品評會勃興ノ新時代ニ入り就中渡島國各村聯合海陸物産品評會、蛇田、有珠二郡聯合品評會、檜山郡北海農園品評會等ハ規模比較的大ニシテ成績見ルヘキモノアリシカ本廳ハ經費ニ補助ヲ給シ審査員ヲ派遣ヲナスト共ニ農事指導ヲ行ハシメタリ明治三十年ニ至リ各地ニ稻作ノ氣運昂マリ水田開發及耕種上ニ付指導申請スルモノ多キヲ以テ石狩、札幌、空知、雨龍、上川、磯谷、瀬棚、檜山、龜田、勇拂ノ九郡ニ教師ヲ派シ指導ニ從ハシメタリ此年農産品評會ヲ開催セシモノ六ヶ所ニシテ共ニ佳良ノ成績ヲ收ム同三十一年副業獎勵ノ目的ヲ以テ杞柳蘭草ノ種苗ヲ配付シ爾來年々教師ヲ各地方ニ派シテ蘭草及杞柳栽培製造法ニ付傳習セシメタリ同三十三年ニ至リ始メテ幻燈ヲ用ヒテ夜間農事講話ヲナシ晝間實地指導ヲナス特ニ當時米作ノ成績頗ル良好ナルヲ以テ石狩、膽振、渡島ノ各地ニ巡回指導ヲナシタリ同卅四年ニ至リ地方費ヲ以テ農事巡回教師ヲ設クルノ官制發布トナリ茲ニ於テ從來農事指導ハ國費本廳員農事試驗場員ニ俟チシモノ爾今農事巡回教師ノ專任々務トナリ別ニ或ル期節ニ於テ臨時囑託員ヲ置キ巡回指導ヲナサシメシカ其主ナル事業ハ巡回講話、實地指導、農産物製造傳習、品評會審査及農事講習會等ニシテ此分類タル現時ノ分類ト一致セルヲ見ル就中農産物製造傳習ハ農表製造傳習ヲ主トシ器械ヲ携帶シ上川支廳下ニ傳習シタルニ良結果ナリシ三十八年以後實地指導ヲ中堅トシテ進ムノ方針トナリシヲ以テ専ラ農具ノ實地指導ニ苗代品評會ニ果樹剪枝、害虫防除、肥料ノ配合使用、果物袋掛ニ付各地ニ指導ヲ試ミ其成績見ルヘキモノアリシ加フルニ果樹園指導ハ尙ホ満足スヘカラサルヲ以テ之カ樞要地タル余市町ニ二ヶ所空知瀧川及岩見澤ニ一ヶ所札幌附近ニ三ヶ所ノ民業果樹園ヲ借り受ケ管理法ノ實地指導ノ模範園ニ充テ極力是カ指導ニ勉ムルトコロアリ然ルニ卅九年以降戰勝ノ餘影トシテ國運膨脹ニ伴ヒ倍々農事指

導ノ急須ヲ告タルモノアリ仍テ明治卅九年從來ノ巡回教師ノ名稱ヲ農業技師技手ト改メラレ翌四十年農事指導上周密ヲ期スルタメ全道ヲ六區域ニ分チ各區ニ農事指導員ヲ駐在セシムル農區制ノ設置トナル四十二年從來七名ノ農業技手ヲ増員シテ十三名トナシ翌四十二年農區ヲ増シテ七農區ニ變更シ從ツテ農業技手ヲ更ラニ十八名ニ増加シ各農區ノ駐在員數ヲ増加シタリ而シテ毎年一回農事指導員ノ協議會ヲ開キ其年ニ於ケル指導ノ計畫案ヲ立テ之ニ準シテ講話、實地指導、品評會、審査講習會其他地方的特種指導ノ任務ヲ執リ農業技師之ヲ統率セリ爾後年來各種指導ヲ繼承スルノ外世ノ推移ニ適應セル指導ニ力ヲ注クニ勉メ例セハ日高、膽振地方ニ於ケル傾斜地ニ山丘犁ノ使用普及ノ上實地指導ニ勉メシカ如キ又國費囑託ノ下ニ新來移民地ノ指導ニ當リ水害地農業經營法ヲ協定シ之ヲ發表シテ善後方法ヲ建テ當業者ヲシテ倚ルヘキトコロヲ指導シタルカ如キ其他新式拔根器ノ實地使用指導道外輸出難穀検査事業開始セラレントスルニ際シ乾燥調製上ノ注意ヲ公示シテ之レカ改善ニ努メタルカ如キ之ナリ又明治四十三年以後ニ至リテハ每歲全道米作樞要地卅一ヶ所ニ詳細工指導講習會及實地指導ヲナシタルモ餘リニ世人ノ注目ヲ曳カサリシカ大正二年偶々凶歉ニ會シ米穀登ラス畑作不良爲メニ窮民各地ニ輩出スルニ當リ地方費ヨリ北海道農會ニ補助シテ授産自活ノ目的ヲ以テ養蠶工ノ獎勵ヲナサシムルヤ本廳指導員ハ極力之レガ指導ニ努ムルトコロアリ效果ノ顯著ナルモノアリシハ指導上特筆スベキ經路ト謂フヘシ如上ノ如ク農事指導機關ハ耕種上經營上追歲濃密ナル指導ヲ試ミ又農業道德ノ向上ニ意ヲ注キ以テ今日ニ至ル

二) 畜産指導ノ沿革

畜産指導ノ地方費支辨ニ屬スルモノハ明治三十九年四月ノ創設ニ係リ其以前ハ國費ニ於テ擔任シ講話講習ヲ實施シ又牧畜提要及養牛ノ心得等ヲ印刷配布ヲ行ヒタルモ未タ一定ノ方針ノ下ニ指導獎勵ヲ行フニ至ラザリシ然ルニ三十九年度以降四十一年度ニ至ル間ハ農業技師一名同技手一名ヲ常置シ全管内ヲ巡回シテ畜産ニ關スル講話講習ヲナスト同時ニ又實地指導ヲ行ヒ且畜産ニ關スル印刷物ヲ當業者ニ配布スル等畜産ノ指導啓發ニ力ヲ盡セリ此外畜産ニ關スル調査或ハ品評會若クハ共進會ノ審査ニ從事スル等業務多端ニシテ且ツ區域ノ廣大ナルカ故ニ到底二名ノ人員ニテハ豫期ノ効果ヲ見ルコト至難ナ

ルヲ以テ四十二年度ヨリ更ニ二名ノ農業技手ヲ増加シ汎ク畜産指導ノ普及ヲ計畫スルト共ニ新ニ創設ノ講話講習及實地指導ヲ行フニ至レリ翌四十三年度更ニ農業技手二名ヲ増員シ益畜産指導ノ周到ヲ期スルニ至レリ大正元年ニ至リ農業技師廢職トナレリ

(三) 蠶業指導ノ沿革

本道蠶業指導ノ沿革ハ夙ニ舊幕府ニ於テ養蠶獎勵ヲ企畫シ渡島國大野村ニ機械場ヲ設ケタルヲ始メトシ次テ開拓使ニ於テ札幌、大野外數ヶ所ニ養蠶場又ハ製糸及機械場ヲ設ケテ斯業ノ獎勵及指導ニ努ムルコトアリ後置廳後明治二十一年初メテ養蠶巡回教師ヲ置キ飼育及蠶病豫防法等ヲ指導セシメ翌二十二年ニ至リ札幌蠶業講習所(現在ノ蠶業講習所)ヲ創設シテ生徒ノ養成及各種ノ試験ヲ行ヒ又三十六年ニ及ヒテ補助ヲ與ヘテ稚蠶共同飼育場ヲ獎勵シ熟練教師ヲ雇聘セシメテ實地ノ指導ニ努メシムルト共ニ一面簡易養蠶講習所ヲ設ケシメ以テ斯業者ノ養成ヲ計リタルニ漸次飼育者ノ増加ヲ見ルニ至リタリ茲ニ於テ本廳ヨリ派遣セラル、教師ノミニテハ到底普及指導ヲ遂クルコト不可能ナルヲ以テ三十九年ニ至リ補助ヲ與ヘテ町村ニ蠶業巡回教師ヲ雇聘セシメ一面ニハ製糸製綿講習所ノ設置ヲ促シテ之レニ教師ヲ派遣シ家庭製糸製綿ノ技術ヲ指導セシメ又是等製糸ノ共同荷造販賣ノ有利ナルヲ認メタルヨリ共同製糸組合ヲ組織セシメテ或期間内技術者ノ派遣ヲ行ヒ以テ斯業ニ於ケル指導ノ周密ヲ期セリ

二 組 織

現在ニ於ケル農事指導機關ノ組織ヲ述フレハ左ノ如シ

(一) 普通農事指導ノ組織

農事指導上周密ヲ期シ農家ニ親昵シ地方狀況ニ通曉シ適實ノ指導ヲナスハ最モ緊要ノコトナルヲ以テ明治四十年十二月告示第六〇三號ヲ以テ全道ヲ六區ニ分カチ(四十二年七月農區ニ變更)駐在地ヲ定メ同時ニ農業技手服務心得、農區技術員職務規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

農區技術員職務規程

- 第一條 農區技術員ハ農業技手ヲ以テ之ニ充ツ
- 第二條 農區技術員ハ凡テ本廳ノ指揮ヲ受ケ擔當農區内ニ於ケル農事ノ指導獎勵ニ從フモノトス
- 第三條 農區技術員ノ職務ノ概目左ノ如シ
 - 一、農作物ノ栽培施肥並農具等ノ改良ニ關スルコト
 - 二、病虫害ノ驅除豫防ニ關スルコト
 - 三、耕地ノ整理及改良ニ關スルコト
 - 四、農事講話及講習ニ關スルコト
 - 五、種苗ノ改良ニ關スルコト
 - 六、委託試験ノ指導及監督ニ關スルコト
 - 七、農事ノ調査ニ關スルコト
 - 八、農產物品評會及其進會審査ニ關スルコト
 - 九、前各號ノ外農事ノ指導及獎勵上必要事項

北海道農事試驗場及同支場ニ駐在スル農區技術員ハ在場ノ際ハ一定ノ職務ノ外專ラ實驗上ノ智識ヲ得ムコトヲ勉メ其試驗場ト同一ノ實務ニ服スルモノトス

第四條 農區技術員ハ指導獎勵ノ狀況ヲ毎年三月六月九月十一月ノ四度ニ報告シ且ツ一箇年度ノ成績ヲ總括シ翌年一月三十一日迄ニ報告スヘシ

第五條 農區技術員ノ出張及在場又ハ在廳中ノ勤務ハ北海道農事試驗場及同支場ニ駐在スルモノハ其場長又ハ支場長、支應ニ駐在スルモノハ其支廳長ノ命令ヲ受クヘシ但シ北海道農事試驗場ニ駐在スルモノ、出張ハ此限リニアラス

第六條 農區技術員出張ヲ了シタルトキハ七日以内ニ其功程ヲ記シ前條規定ノ場長又ハ支廳長ヲ經テ本廳ニ復命スヘシ

第七條 農區技術員ノ身分ニ關スル届書ハ場長又ハ支廳長ニ提出シ願ニ關スル書類ハ場長又ハ支廳長ヲ經テ本廳ニ提出スヘシ

而シテ指導目的ヲ達スル手段ハ實地指導農事講話ノ執行立毛品評會成品々評會農事講習會開催ノ五種ニシテ其年度ノ事業ハ前年末迄ニ左記ニヨリテ豫定計畫ヲ立テ本廳ニ提出セシメ査定認可ヲ與フルノ組織ナリ

一、翌年度ニ於ケル其支廳下農事實地指導、農事講習、農事講話、立毛品評會、成品々評會ニ對シ支廳之レカ主トナリ便宜ノ地ヲ撰ミ試驗場員、農區駐在員、郡町村農會技術員トノ打合會ヲ開クカ或ハ便宜ノ方法ニヨリ協議ヲ擬ラシ左表ニヨリ其各事項ニ出張員ヲ配當シ尙ホ本廳ヨリノ出張ヲ要スベキ部分ヲモ明記シ前年度三月二十日マテニ本廳ニ提出スヘシ

種 類	主催町村名	月 日	出張者種類員數	本廳ヨリ出張ヲ要スル員數	摘 要
-----	-------	-----	---------	--------------	-----

備考 種類ハ農事講話、立毛品評會等ト記スベシ出張者種類トハ譬ヘハ郡農會技術員試驗場員ト言フノ類ナリ
 月日ハ自何月何日至何月何日何日間ト記スヘシ
 摘要ニハ可成理由ヲ記スヘシ

一、農區駐在農業技手ハ別ニ自己ニ關スル部分ノ豫定計畫表ヲ左表ニヨリ前年度三月二十日迄ニ提出スヘシ

種 類	村 名	月 日	指導項目	概算旅費	摘 要
-----	-----	-----	------	------	-----

備考 一、種類、村名、月日、摘要等ノ内容ハ前表ニ同ジ指導項目ハ參廳及品評會ヲ除キ他ノ種類ニ對シ記載スルモノトス
 ノトス

二、事業配當ハ一年ヲ四期ニ分チ可成旅費ノ均等ヲ記シ從來ノ如ク年度半ニシテ其大部分ヲ支出スル等ノ事ナキヲ期スヘシ

三、道廳技術員農區駐在員其他ヨリ成レル農事協議會ハ例年其新年度ノ初期即チ四月上旬ニ於テ開催ノ見込ナルヲ以テ其參廳旅費ハ豫メ之ヲ計畫案中ニ編入スヘシ

四、農業技手一名配當旅費額ハ三百圓トシテ計畫ヲ立ツヘシ

一、本廳ハ右提出ノ豫定計畫案ニ就キ査定ノ結果ヲ通牒スヘシ
 一、豫定計畫案以外ニ屬シ臨時ニ本廳員ノ派遣ヲ請フモノニ對シテハ特別緊急ヲ要スルモノト認メタルモノ、外ハ之レニ應セサルモノトス

農區現在ノ狀況

現在農區別耕作反別並一巡回里程表ヲ左ニ掲グ

農區別耕作反別并一巡回里程表

農 區	區域 (支廳)		反 別		農 家 戶 數		町 村		一 巡 回 里 程		駐 在 場 所	駐 在 員 數
	函 館	檜 山	田 畑	計	兼 業	計	町 村 數	陸 路	汽 車	汽 船		
一	三九〇七	二四七二	二八六三	六三三七	八九〇一	一五二七三	二六	四五	一四〇	四三	龜田郡大野村	二
計	一、二四六	二〇六九五	二、一九四一	四、三三三	四、三三三	八七〇四	一三	一〇一	一	四三	龜田郡渡島支	二
	五、一五三	四、五四二	五、〇五六六	一〇、〇九五	一、三三三	三、三九七	三九	一四七	一四〇	六九	場試驗場渡島支	二
札 幌	四、〇五四	四、八三六	五、二二八〇	一〇、五〇一	二、一四三	二、六四四	一九	六六	四〇	一		
空 知	一、五四〇	八、五九八	九、七五二八	二、三八三三	二、八七六	二、五七三	二四	三〇	三五一	一		

(一) 講話、講習及實地指導

普通農事指導ニアリテハ毎年度末ニ各農區駐在員ヲ招集シ本廳員並ニ農事試驗場員參加シ指導協議會ヲ開催シ次年度ニ於ケル農事改良事項ヲ協定撰擇シ歩調ヲ統一スルコトヲ期セリ而シテ指導ノ方針ハ實地指導ニ重キヲ置キ其事項ノ性質上實地指導不可能ノモノ及單ニ周知ヲ期スルヲ以テ足レリトスル事項ニ限リ農事講話ヲ行フ例トセリ農事講話及實地指導ハ共ニ其地方ニ適切ナル題目ヲ撰ヒ平易通俗ニ説明シテ徹底ヲ期セリ實地指導ハ専ラ害蟲驅除農具使用肥料製造等ニ之ヲ行ヒ農場或ハ農家ノ圃上ニ於テ農民ヲ集メテ實地ニ指導ヲナシ同時ニ農民ヲシテ其練習ヲナシム又農事講習會ハ冬期農閑ヲ利用シテ開催シ其講習科目ハ作物、肥料、土地改良、畜産、養蠶ヲ主トシテ時ニ産業組合、氣象等ノ學科ヲ加フルコトアリ教授法ハ簡易通俗ヲ主トシ最初騰寫版ノ印刷物ニヨリ授業シタリシガ後チ本廳委員ニヨリ特ニ編成セラレタル教科書ニヨリテ授業スルコト、ナレリ而シテ普通農事畜産養蠶ノ別ナク凡テ學科ノミニテ解得シ能ハサルモノハ努メテ實地指導ヲナスノ方針ヲ執リツ、アリ

畜産指導ニアリテハ主トシテ畜産ニ關スル一般的事項及其地方ニ適切ナル事項ヲ撰定シ話題トナシ特ニ農家ト畜産ノ關係ニ就キ解説ヲ努メツ、アリ又講習會ハ多クハ普通農事ト合同シテ開催シ畜産一般ニツキ智識ノ普及ヲ計リツ、アリ次ニ削蹄ニアリテハ印刷物及教本ニヨリテ其解説ニ努メ又實地ニ削蹄ヲ指導トシ之ニ要スル器械類ハ本廳備付品ヲ使用セシメツ、アリ

蠶業指導ニアリテハ副業的養蠶經營上適當ト認メタル地方ヲ第一、第二、第三獎勵地ニ區分シ緩急ニ應ジ指導シ又補助事業ノ視察督勵ヲ行ヒ又必要ニ應ジテハ各戸指導ヲ行フ而シテ養蠶季節ニハ臨時囑託員ヲ樞要ナル町村ニ派遣シ專ラ實地ノ指導ヲ行ハシム次ニ製糸製綿ノ傳習ハ臨時囑託員ヲ製糸綿傳習所ニ派遣シ三十日乃至五十日間實地ノ指導ニ從事セシメ事業ノ圓滿ナル發達ヲ期スルニ努メツ、アリ

(二) 品評會

普通農事ニアリテハ成品々評會ノ外ニ立毛品評會ヲ開催シ追年其數ノ増加ヲ見ル畜産或ハ蠶糸業品評會ハ畜産蠶糸業ノミ獨立開催ノ場合アルモ多クハ普通農事ニ合同開催セラル、ヲ例トス審査ハ指導員多クハ之ニ當リ精密ナル審査報告ヲナシ其缺點ノ改善指導ニ努メツ、アリ

(三) 模範農業經營指導

本道農業經營ノ實況ヲ調査シ各地方ニ適スル模範的農業經營法ヲ案出シ之カ實行普及ヲ圖ルノ目的ヲ以テ明治四十五年度函館、檜山、後志、室蘭、札幌、空知、上川、河西ノ八支廳管内ニ於テ優良部落及模範農家各二名ツ、ヲ選定シ當該農區駐在ノ農業技手ヲシテ之ヲ擔當セシメ本廳員之ヲ補助スルコト、シ畜産ノ指導ハ本廳專門ノ指導員ニ於テ隨時擔當スルコト、シ夫々指導ヲナシ效果アリ其擔當指導ノナスヘキ事項左ノ如シ

- イ、模範農家ノ實地指導及經營調査ヲ行フコト
- ロ、講話其他ノ方法ニヨリ部落指導ヲ行フコト
- ハ、經營改良上必要物資ノ斡旋ヲナスコト
- ニ、指導員ハ春期(播種當時)夏期(收穫當時)秋期(同上)及冬期等少クトモ一年四回ノ調査指導ヲ行フコト
- ホ、模範農家ニ指導日誌ヲ備付ケ指導ノ都度其事項ヲ記入スルコト
- ヘ、模範農家及其部落ニ對シ左記事項ハ特ニ便利ヲ圖ルコト
 - 種子ノ配付(牧畜ヲ含ム)果樹苗木ノ配付、桑苗ノ配付、桑園ノ補助、蠶種ノ配付其他蠶業補助印刷物ノ配付、家畜家禽種卵購入ノ斡旋、肥料購入ノ斡旋其他事業遂行上ノ援助

(四) 新來移民指導

農區駐在農業技手ニ國費囑託ヲナシ新來移民ノ指導ヲ行ハシム其地方ハ網走、上川、室蘭、浦河、後志、根室、河西ノ七支應管内ニシテ囑託セラレタルハ駐在農業技手七名トス其指導要旨左ノ如シ

イ、新來移民ノ農事指導ハ入地初年ヨリ三年目迄ノモノニ局限シ一地區ニ二十戸以上ノ單獨又ハ團體移住者トス

ロ、指導ハ毎年可成十一、十二ノ二ヶ月ヲ以テ之ニ充ツ

ハ、指導ハ大別シテ開墾耕藝ノ實地指導及講話ノ二種トシ其項目左ノ如シ

- 指導項目
 - (一) 伐木法
 - (二) 建屋法
 - (三) 開墾法
 - (四) 新地作物種類品種ノ撰定
 - (五) 作物ノ耕地配當
 - (六) 新地作物耕作法
 - (七) 收穫調製法
 - (八) 排水法
 - (九) 種苗農具購入先紹介並購入上ノ注意
 - (十) 其他緊急ト認メタル事項

四 指導經費

農事指導ニシテ國費ニ屬スルモノハ普通事務ト兼務ナルカタメ明割スヘカラサルヲ以テ左ニ地方費ニ屬スルモノヲ掲クヘシ

農事指導經費決算表費目

費目	年度	明治十四年度	明治十五年度	明治十六年度	明治十七年度	明治十八年度	明治十九年度	明治四十年
----	----	--------	--------	--------	--------	--------	--------	-------

農事授業費	給	一七五〇・二八五	四二四四・六四四	八〇〇三・〇三八	九〇九六・七七一	五八七・七三八	五八七・九五六	六六三・九三〇
諸給	費	七七二・四五〇	一六五三・〇六四	三三四〇・七一	三六六・四九一	二五〇・五九一	二七七・四六四	三〇一・四三八
旅費	費	八八七・四三〇	二二〇七・五二〇	四〇八〇・二四〇	四八八・六三三	二五五八・三七〇	二八四六・三三〇	三三三・六一三
備品費	費		八一・三三〇	二七八九・二三	一四・三八〇	二〇六・九八五	五五・四四五	九七・五〇〇
圖書及印刷費	費		二七七・三二〇	一〇八・三七〇	一・三五〇	六・二三〇	二四・〇〇〇	一七・一〇〇
通信運搬費	費		二五五・四〇〇	六六・二六八	一・二五八・八五	六八・八二〇	六八・四〇〇	八〇・八六〇
筆紙墨文具費	費			一八〇・〇〇〇	二・九九五	一・二〇〇〇	一〇・四七〇	一三・八六〇
消耗品費	費			三六・九三六	三三・七・四〇	四九・七〇八	一〇・四七〇	六・四四七
雜業費	費	一〇〇・四二五				八七・一〇	一〇〇・三三〇	二五・〇〇〇
授業費	給					三三・七七・二九七	四二・四七・六〇	四一・七三・六九四
諸給	費					一五・三三・四七	一八・〇九・九〇	一八・七三・六六九
旅費	費					一六五・一九〇〇	二〇九・五三・〇	二二〇・八・一〇
備品費	費					二七五・三三六	二九・五三・〇	九八・六〇〇
筆紙墨文具費	費					八〇〇	二二・五〇〇	八八・三五
通信運搬費	費					二七・三九〇	一五〇・四〇〇	二二・四五〇
圖書及印刷費	費					八九〇・〇〇	一五〇・四〇〇	六・〇三〇
畜産授業費	給					二二・三六・六八	二二・三九・七六	二二・三九・七六
諸給	費					一・二五〇・三六八	一・二八・一九三	一・二八・一九三
旅費	費					九七・一六〇	九七・一六〇	九七・一六〇
備品費	費					八三・三六〇	七・三五〇	七・三五〇
筆紙墨文具費	費					八三・四〇〇	八三・四〇〇	八三・四〇〇
圖書及印刷費	費					一五・三六〇	一四・四四五	一四・四四五
通信運搬費	費					一〇・三三・二一六	一〇・八三・三〇三	一〇・八三・三〇三
消耗品費	費					五七・九	六・一八	六・一八
農事授業費計		一七五〇・二八五	四二四四・六四四	八〇〇三・〇三八	九〇九六・七七一	五八七・七三八	五八七・九五六	六六三・九三〇
明治三十四年度ナト		一・〇〇	二四三	四・五七	五・一八	五・二七	五・七九	六・一八

費目	明治三十四年度		明治三十五年		明治三十六年		明治三十七年		明治三十八年		明治三十九年		明治四十年	
	明治三十四年度	明治三十九年度	明治三十四年度	明治三十九年度	明治三十四年度	明治三十九年度	明治三十四年度	明治三十九年度	明治三十四年度	明治三十九年度	明治三十四年度	明治三十九年度	明治三十四年度	明治三十九年度
費目	1,700,885	1,000	4,244,644	2,433	8,030,338	4,577	9,056,671	5,176	9,056,671	5,176	11,337,726	1,000	11,337,726	750
畜産授業費計														
指導費總計	1,700,885	1,000	4,244,644	2,433	8,030,338	4,577	9,056,671	5,176	9,056,671	5,176	11,337,726	1,000	11,337,726	750
農事指導費	1,415,793	1,415,793	1,613,306	1,613,306	1,977,667	1,977,667	2,134,333	2,134,333	2,134,333	2,134,333	2,134,333	2,134,333	2,134,333	2,134,333
俸給	5,104,814	5,104,814	6,855,633	6,855,633	8,407,877	8,407,877	9,275,766	9,275,766	9,275,766	9,275,766	9,275,766	9,275,766	9,275,766	9,275,766
雜給	1,264,085	1,264,085	1,298,818	1,298,818	1,441,089	1,441,089	1,587,416	1,587,416	1,587,416	1,587,416	1,587,416	1,587,416	1,587,416	1,587,416
旅費	6,310,580	6,310,580	7,006,330	7,006,330	7,955,230	7,955,230	8,802,740	8,802,740	8,802,740	8,802,740	8,802,740	8,802,740	8,802,740	8,802,740
備品費	7,996,630	7,996,630	2,958,880	2,958,880	2,655,000	2,655,000	3,193,300	3,193,300	3,193,300	3,193,300	3,193,300	3,193,300	3,193,300	3,193,300
消耗品費	9,212,333	9,212,333	11,090	11,090	32,690	32,690	32,690	32,690	32,690	32,690	32,690	32,690	32,690	32,690
筆紙墨文具紙	6,355,000	6,355,000	3,400,000	3,400,000	1,498,000	1,498,000	1,498,000	1,498,000	1,498,000	1,498,000	1,498,000	1,498,000	1,498,000	1,498,000
圖書及印刷費	3,849,700	3,849,700	2,872,450	2,872,450	7,657	7,657	2,400	2,400	2,400	2,400	2,400	2,400	2,400	2,400
通信運搬費	1,389,970	1,389,970	3,629,000	3,629,000	2,485,000	2,485,000	6,535,568	6,535,568	6,535,568	6,535,568	6,535,568	6,535,568	6,535,568	6,535,568
畜産指導費	3,001,083	3,001,083	3,392,700	3,392,700	5,047,543	5,047,543	2,775,992	2,775,992	2,775,992	2,775,992	2,775,992	2,775,992	2,775,992	2,775,992
諸給	1,304,993	1,304,993	2,048,650	2,048,650	2,551,090	2,551,090	3,163,985	3,163,985	3,163,985	3,163,985	3,163,985	3,163,985	3,163,985	3,163,985
旅費	1,110,580	1,110,580	1,151,060	1,151,060	533,100	533,100	868,100	868,100	868,100	868,100	868,100	868,100	868,100	868,100
備品費	8,230,000	8,230,000	7,667,000	7,667,000	1,050,000	1,050,000	6,450,000	6,450,000	6,450,000	6,450,000	6,450,000	6,450,000	6,450,000	6,450,000
筆紙墨文具費	2,100,000	2,100,000	7,979,000	7,979,000	1,500,000	1,500,000	9,732,300	9,732,300	9,732,300	9,732,300	9,732,300	9,732,300	9,732,300	9,732,300
圖書及印刷費	3,707,000	3,707,000	2,600,000	2,600,000	1,870,000	1,870,000	2,250,000	2,250,000	2,250,000	2,250,000	2,250,000	2,250,000	2,250,000	2,250,000
通信運搬費	1,670,000	1,670,000	1,870,000	1,870,000	1,870,000	1,870,000	1,870,000	1,870,000	1,870,000	1,870,000	1,870,000	1,870,000	1,870,000	1,870,000
消耗品費	1,415,793	1,415,793	1,613,306	1,613,306	1,977,667	1,977,667	2,134,333	2,134,333	2,134,333	2,134,333	2,134,333	2,134,333	2,134,333	2,134,333
農事指導費計	1,415,793	1,415,793	1,613,306	1,613,306	1,977,667	1,977,667	2,134,333	2,134,333	2,134,333	2,134,333	2,134,333	2,134,333	2,134,333	2,134,333

費目	明治三十四年度		明治三十九年度		明治四十年	
	明治三十四年度	明治三十九年度	明治三十四年度	明治三十九年度	明治三十四年度	明治三十九年度
畜産指導費計	809	3,010,883	928	3,339,270	1,130	5,577,287
指導費總計	1,715,901	1,344	1,956,536	1,499	2,484,522	2,544
備考	明治三十四年度	明治三十九年度	明治四十年	明治三十九年度	明治四十年	明治三十九年度
指導費ノ設定アリ	980	1,715,901	1,118	1,956,536	1,499	2,484,522

五 指導成績及効果

一 指導ノ成績

(1) 事業累年比較
 農事指導事業ハ時運ノ進歩ト共ニ累年其擴張ヲ示セリ今左ニ普通農事畜産蠶業ノ各成績表ヲ掲クヘシ
 (4) 普通農事

年	講話會		講習會		實地指導		立毛品評會		成品品評會		合
	個所	人員	個所	人員	個所	人員	個所	出品點數	個所	出品點數	
明治四十一年	392	1,012	25	30	28	308	19	585	11	353	799
明治四十二年	76	2,857	39	30	41	574	20	839	15	420	1,365
明治四十三年	67	2,010	30	51	37	679	25	589	26	830	1,462
平均	57	1,626	31	37	35	477	18	654	17	538	1,628

年 度	講 話 會		實 地 指 導		立 毛 品 評 會		成 品 評 會		合 計
	個 所	人 員	個 所	人 員	個 所	品 點 數	個 所	品 點 數	
明治四十四年	八四	三、九七六	二	七三	六四	一八、〇〇〇	三三	七、一四〇	一、六四〇
大正元年	六四	三、九六二	三	八五	八三	二、九七〇	四二	一、三五四	一、四一九
大正二年	七三	三、八三九	三	一八三	元	二、二三八	二八	一、九五三	一、六二三
合 計	二二一	一、一七、〇〇〇	八	二四一	一四七	四、一六八	一〇三	九、六八七	三、七一二

備考 講習會人員ハ講習證書授與人員ナリ以下準之年度ハ四十一年度ヨリ始メテ農區別トナリシタメ其以後ヲ掲ク
 上表ヲ支應別トスレハ左ノ如シ

明治四十一年度普通農事指導農區別表

農 區 別	講 話 會		實 地 指 導		立 毛 品 評 會		成 品 評 會		合 計
	個 所	人 員	個 所	人 員	個 所	品 點 數	個 所	品 點 數	
一 區	七五	一、八七五	四	一〇〇	三	一、四二四	二	七〇三	一、五
二 區	一五	三、四〇〇	七	三〇	二	三、〇六〇	六	一、八一九	三、七八〇
三 區	六五	一、三六五	二	三〇	一	一、二二五	一	四〇六	二、七二一
四 區	六〇	一、五〇〇	一	二六	二	五、三二一	一	四〇六	一、〇四
五 區	五〇	一、〇五〇	二	四六	二	二、五〇〇	三	三、〇〇〇	八、九
六 區	三六	八、八六	三	二九	一	二、二二	一	三、〇〇〇	九、五
合 計	三九一	一〇、一〇六	二〇	二二六	一五	五、八五三	一三	三、三二一	三、七八三

明治四十二年度同上表

農 區 別	講 話 會		實 地 指 導		立 毛 品 評 會		成 品 評 會		合 計
	個 所	人 員	個 所	人 員	個 所	品 點 數	個 所	品 點 數	
一 區	九	四〇二	六	二〇	二	八、六〇〇	二	五、四七	一、七二
二 區	二七	一、二二〇	一	五八	八	三、五〇〇	七	一、九四二	五、九〇〇
三 區	一〇	四、一〇〇	一	三三	四	一、九二六	三	九〇九	五、三〇六
合 計	四六	五、七二二	八	一一一	一四	一三、〇二六	一二	八、三二八	二、八五七

明治四十三年度同上表

農 區 別	講 話 會		實 地 指 導		立 毛 品 評 會		成 品 評 會		合 計
	個 所	人 員	個 所	人 員	個 所	品 點 數	個 所	品 點 數	
一 區	七〇	二、〇九一	三	一四〇	三	五、七二	四	一、二二〇	一、三二
二 區	一〇	五、一八〇	二	五五	九	二、五三三	四	一、〇〇〇	一、三二
三 區	八	三、〇八〇	三	二〇	四	七、五三	四	一、二八〇	一、九二
四 區	八	二、〇七五	二	九〇	三	四、八〇	三	二、九五〇	一、九三
五 區	六	二、三三五	二	七〇	二	三、〇〇〇	四	一、〇五〇	一、五〇〇
六 區	五	一、八五〇	二	五九	二	三、六九	四	一、二八〇	一、九八〇
七 區	一	三、七九九	二	二六	二	八、八二	三	三、三六	一、五四五
合 計	一〇七	一、一七、〇〇〇	一七	五二二	二五	二、八二九	二八	一、〇二六	一、四四九

明治四十四年度同上表

農 區 別	講 話 會		實 地 指 導		立 毛 品 評 會		成 品 評 會		合 計
	個 所	人 員	個 所	人 員	個 所	品 點 數	個 所	品 點 數	
一 區	一九	三、七五五	三	九六	一	四、三三〇	九	二、九三〇	二、五
二 區	二六	七、九六一	三	六三〇	二	七、一三〇	七	一、七五〇	五、七
三 區	七	一、九一〇	二	二〇〇	六	一、六八〇	一	三、五〇〇	一、三
四 區	一五	三、三三三	一	二〇〇	四	一、二六〇	二	八二〇	三、〇
五 區	七	二、三三三	一	三三	四	一、四〇〇	一	四一〇	二、〇
六 區	七	二、二五六	一	三三	六	一、四〇〇	一	八二〇	二、〇
七 區	四	一、七三六	一	三三	四	一、二二〇	三	九〇〇	一、九
合 計	八六	二、一七、〇〇〇	一五	一、〇二六	二五	一、〇二六	二八	一、〇二六	二、一七〇

農區別	講話會		講習會		實地指導		立毛品評會		成品々評會		合計
	個人	平均	個人	平均	個人	平均	個人	平均	個人	平均	
一區	九	二八二	三	二二	三〇	二七	一六	四二七〇	一四	四九四	二九
二區	一七	九五六	五	元	七	二五	二五	七〇〇	一三	三五〇	二九
三區	五	二三〇	四	二二	三	二六	四〇〇	九	二九	一三	二九
四區	九	二四六	三	二〇	三	二五	二〇〇	三	二八〇	一三	二九
五區	八	二五二	三	一九	三	二五	二〇〇	三	二八〇	一三	二九
六區	五	一八二〇	二	一五	二	二五	二〇〇	二	二八〇	一三	二九
七區	七	二四九	三	二〇	三	二五	二〇〇	三	二八〇	一三	二九
合計	八四	三九七六	二八	二二	二八	二七	一八二〇	二八	二七	一六四〇	四六

大正元年度同上表

農區別	講話會		講習會		實地指導		立毛品評會		成品々評會		合計
	個人	平均	個人	平均	個人	平均	個人	平均	個人	平均	
一區	九	二八二	三	二二	三〇	二七	一六	四二七〇	一四	四九四	二九
二區	一七	九五六	五	元	七	二五	二五	七〇〇	一三	三五〇	二九
三區	五	二三〇	四	二二	三	二六	四〇〇	九	二九	一三	二九
四區	九	二四六	三	二〇	三	二五	二〇〇	三	二八〇	一三	二九
五區	八	二五二	三	一九	三	二五	二〇〇	三	二八〇	一三	二九
六區	五	一八二〇	二	一五	二	二五	二〇〇	二	二八〇	一三	二九
七區	七	二四九	三	二〇	三	二五	二〇〇	三	二八〇	一三	二九
合計	六四	三九六三	二七	二二	二七	二七	一八二〇	二七	二七	一六四〇	四六

大正二年度同上表

農區別	講話會		講習會		實地指導		立毛品評會		成品々評會		合計
	個人	平均	個人	平均	個人	平均	個人	平均	個人	平均	
一區	一五	三九二	三	二二	三〇	二七	一六	四二七〇	一四	四九四	二九
二區	二七	五三七	五	元	七	二五	二五	七〇〇	一三	三五〇	二九
三區	八	二五〇	四	二二	三	二六	四〇〇	九	二九	一三	二九
四區	九	二五〇	三	二〇	三	二五	二〇〇	三	二八〇	一三	二九
五區	九	二五〇	三	一九	三	二五	二〇〇	三	二八〇	一三	二九
六區	七	二四〇	二	一五	二	二五	二〇〇	二	二八〇	一三	二九
七區	九	三二〇	三	二〇	三	二五	二〇〇	三	二八〇	一三	二九
合計	七〇	三二〇〇	二二	二二	二二	二二	一八二〇	二二	二二	一六四〇	四六

(ロ) 畜産

畜産指導綜表

年	講話會	講習會	實地指導	立毛品評會	成品々評會	合計	共進會審査
明治三十九年	一四	三八七	三	二二	三〇	二九	一
明治四十年	二五	八五九	七	二五	一五	四〇	一
明治四十一年	一〇	五二〇	九	二五	一八	三二	一
明治四十二年	八	二八五	三	二五	一〇	二六	一
明治四十三年	二	一三三	四	二五	二	一三	一
明治四十四年	六	三三六	四	二五	一	一六	一
明治四十五年	九	四四八	四	二五	二	二〇	一
大正二年	六	四七五	七	二五	二	二〇	一

備考 年度ハ三十九年度ヨリ始メテ本經費設定セラレタルヲ以テ其年ヨリ掲ク
 上表ヲ支應別トスレハ左ノ如シ

明治三十九年度畜産指導支應別表

支應別	講話會	講習會	實地指導	立毛品評會	成品々評會	合計	共進會審査
函館	九	二三五	二	二五	一	二七	一
山形	六	三〇五	一	二五	一	二三	一
後志	一	四三	一	二五	一	一八	一
合計	一六	五八三	四	七五	三	一三三	三

明治四十二年度同上表

支應	別	宗網根釧河上増浦室空札後楡函										計		
		谷	走	室	路	西	川	毛	河	蘭	知		幌	志
個所	講	八	九	四	〇	九	八	四	七	七	七	四	四	二
人員	平均	二八五	一三七	一三五	二八九	二六九	四九	一〇九	四四	二六七	五二六	一三三	一〇七	一〇七
畜産	講	三〇	二	一	二	四	一	三	五	三	四	二	三	三
人員	平均	七九六	三	〇	四	一	三	一	六	一	九	七	六	八
創	講	二	一	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一
人員	平均	三三	二	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一
實地	指導	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
人員	平均	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
個所	計	二六	二	四	二	三	四	九	六	四	三	三	七	八
人員	平均	三八五	一七〇	一三五	三三三	二八一	一三四	四六〇	二四	一〇九	六〇五	四〇五	五九三	二二五
人員	平均	三	一	四	三	七	九	五	七	七	三	元	三	元

明治四十三年度同上表

支應	別	宗網根釧河上増浦室空札後楡函										計		
		谷	走	室	路	西	川	毛	河	蘭	知		幌	志
個所	講	五	三	五	四	三	一	〇	八	三	四	一	四	二
人員	平均	三三二	二〇八	三三四	一四四	三三	一〇八	三三	一〇三	一三	一〇三	一〇三	一〇三	一〇三
畜産	講	三	五	三	五	三	一	一	三	一	三	一	三	一
人員	平均	四〇	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
創	講	二	一	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一
人員	平均	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
實地	指導	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
人員	平均	四	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
個所	計	二二	三	四	三	四	三	三	三	三	三	三	三	三
人員	平均	四八〇	二四八	五〇〇	三〇八	三〇八	一〇八	二〇八	一〇八	一〇八	一〇八	一〇八	一〇八	一〇八
人員	平均	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

明治四十四年度同上表

支應	別	宗網根釧河上増浦室空札後楡函										計		
		谷	走	室	路	西	川	毛	河	蘭	知		幌	志
個所	講	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
人員	平均	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七
畜産	講	四	五	五	三	四	六	六	六	八	六	五	五	五
人員	平均	一六	一七	九	八	一〇	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七
創	講	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
人員	平均	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
實地	指導	五	二	五	三	八	八	三	七	一	四	一	四	一
人員	平均	六	二	六	四	三	〇	二	七	一	六	一	六	一
個所	計	三	八	三	八	三	八	三	八	三	八	三	八	三
人員	平均	五九七	一九四	五四三	一九三	一九三	三三八	二四九	四六一	一六三	一八二	一八二	一八二	一八二
人員	平均	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

支應別	講話會		講習會		實地指導		成品々評會		合計
	個所	人員平均	個所	人員平均	個所	人員平均	個所	人員平均	
計	一〇	三七	三	五〇	九	一四〇	一	一	一三
	一〇	三七	三	五〇	九	一四〇	一	一	一三

大正元年度同上表

支應別	講話會		講習會		實地指導		成品々評會		合計
	個所	人員平均	個所	人員平均	個所	人員平均	個所	人員平均	
計	四八	二九四	三	一三六	九	一五八	一	一	一三
空	二	三三	一	四二	一	二四	一	一	三
上	一	一〇七	一	二〇	一	三〇	一	一	三
後	一	八六	一	四七	一	二八	一	一	三
留	一	一〇七	一	二〇	一	三〇	一	一	三
空	一	三三	一	四二	一	二四	一	一	三
支	一	一〇七	一	二〇	一	三〇	一	一	三
應	一	八六	一	四七	一	二八	一	一	三
別	一	一〇七	一	二〇	一	三〇	一	一	三
知	一	三三	一	四二	一	二四	一	一	三
川	一	一〇七	一	二〇	一	三〇	一	一	三
志	一	八六	一	四七	一	二八	一	一	三
山	一	一〇七	一	二〇	一	三〇	一	一	三
西	一	三三	一	四二	一	二四	一	一	三
館	一	一〇七	一	二〇	一	三〇	一	一	三
河	一	八六	一	四七	一	二八	一	一	三
小	一	一〇七	一	二〇	一	三〇	一	一	三
室	一	三三	一	四二	一	二四	一	一	三
計	四八	二九四	三	一三六	九	一五八	一	一	一三

大正三年度同上表

支應別	講話會		講習會		實地指導		成品々評會		合計
	個所	人員平均	個所	人員平均	個所	人員平均	個所	人員平均	
計	七	三九六	五	三〇九	四	四九四	一	一	一三
空	一	二五	一	二九	一	五八	一	一	三
上	一	二五	一	二九	一	五八	一	一	三
後	一	二五	一	二九	一	五八	一	一	三
留	一	二五	一	二九	一	五八	一	一	三
支	一	二五	一	二九	一	五八	一	一	三
應	一	二五	一	二九	一	五八	一	一	三
別	一	二五	一	二九	一	五八	一	一	三
知	一	二五	一	二九	一	五八	一	一	三
川	一	二五	一	二九	一	五八	一	一	三
志	一	二五	一	二九	一	五八	一	一	三

支應別	講話會		講習會		實地指導		成品々評會		合計
	個所	人員平均	個所	人員平均	個所	人員平均	個所	人員平均	
計	三	七四七	二	一三五	三	四八	一	一	一三
山	一	六五	一	二六	一	八二	一	一	三
館	一	六五	一	二六	一	八二	一	一	三
蘭	一	六五	一	二六	一	八二	一	一	三
室	一	六五	一	二六	一	八二	一	一	三
札	一	六五	一	二六	一	八二	一	一	三
函	一	六五	一	二六	一	八二	一	一	三
室	一	六五	一	二六	一	八二	一	一	三
計	三	七四七	二	一三五	三	四八	一	一	一三

(2) 農事講習會及品評會成績累年比較

前項掲出綜表中農事講習會及品評會ハ普通農事畜産及蠶業ノ合同開催ノ場合多クシテ其開催數ハ追年増加ヲ示セリ特ニ明治二十年ヨリ四十一年迄ハ其率激甚ナラサリシモ四十二年以降ハ俄カニ激増セルヲ見ル今其累年比較表ヲ左ニ掲ク(但シ前項掲出以前ノ分ヲモ比較ノタメニ掲ク)

農事講習會

年次	開催數	開催年	年次	開催數	開催年
明治二十年	一	二十	明治三十四年	一	三十四
明治二十一年	一	二十一	明治三十五年	一	三十五
明治二十二年	一	二十二	明治三十六年	一	三十六
明治二十三年	一	二十三	明治三十七年	一	三十七
明治二十四年	一	二十四	明治三十八年	一	三十八
明治二十五年	一	二十五	明治三十九年	一	三十九
明治二十六年	一	二十六	明治四十年	一	四十
明治二十七年	一	二十七	明治四十一年	一	四十一
明治二十八年	一	二十八	明治四十二年	一	四十二
明治二十九年	一	二十九	明治四十三年	一	四十三
明治三十年	一	三十	明治四十四年	一	四十四
明治三十一年	一	三十一	明治四十五年	一	四十五
明治三十二年	一	三十二	明治四十六年	一	四十六
明治三十三年	一	三十三	明治四十七年	一	四十七
明治三十四年	一	三十四	明治四十八年	一	四十八
明治三十五年	一	三十五	明治四十九年	一	四十九
明治三十六年	一	三十六	明治五十年	一	五十
明治三十七年	一	三十七	明治五十一年	一	五十一
明治三十八年	一	三十八	明治五十二年	一	五十二
明治三十九年	一	三十九	明治五十三年	一	五十三
明治四十年	一	四十	明治五十四年	一	五十四
明治四十一年	一	四十一	明治五十五年	一	五十五
明治四十二年	一	四十二	明治五十六年	一	五十六
明治四十二年	一	四十二	明治五十七年	一	五十七
明治四十二年	一	四十二	明治五十八年	一	五十八
明治四十二年	一	四十二	明治五十九年	一	五十九
明治四十二年	一	四十二	明治六十年	一	六十

農事品評會

年次	開催數	開催年	年次	開催數	開催年
明治二十年	一	二十	明治三十四年	一	三十四
明治二十一年	一	二十一	明治三十五年	一	三十五
明治二十二年	一	二十二	明治三十六年	一	三十六
明治二十三年	一	二十三	明治三十七年	一	三十七
明治二十四年	一	二十四	明治三十八年	一	三十八
明治二十五年	一	二十五	明治三十九年	一	三十九
明治二十六年	一	二十六	明治四十年	一	四十
明治二十七年	一	二十七	明治四十一年	一	四十一
明治二十八年	一	二十八	明治四十二年	一	四十二
明治二十九年	一	二十九	明治四十三年	一	四十三
明治三十年	一	三十	明治四十四年	一	四十四
明治三十一年	一	三十一	明治四十五年	一	四十五
明治三十二年	一	三十二	明治四十六年	一	四十六
明治三十三年	一	三十三	明治四十七年	一	四十七
明治三十四年	一	三十四	明治四十八年	一	四十八
明治三十五年	一	三十五	明治四十九年	一	四十九
明治三十六年	一	三十六	明治五十年	一	五十
明治三十七年	一	三十七	明治五十一年	一	五十一
明治三十八年	一	三十八	明治五十二年	一	五十二
明治三十九年	一	三十九	明治五十三年	一	五十三
明治四十年	一	四十	明治五十四年	一	五十四
明治四十一年	一	四十一	明治五十五年	一	五十五
明治四十二年	一	四十二	明治五十六年	一	五十六
明治四十二年	一	四十二	明治五十七年	一	五十七
明治四十二年	一	四十二	明治五十八年	一	五十八
明治四十二年	一	四十二	明治五十九年	一	五十九
明治四十二年	一	四十二	明治六十年	一	六十

備考 年代ノ記述ナキモノハ開催數ヲキモノトス

(二) 指導ノ効果

農事指導ノ見地ヨリ本道農事改良ノ進運ヲ觀ルトキハ拓殖ノ進歩ト共ニ累年其ノ効果ヲ顯ハシ來リ指導ヲ離レテ農事ノ

進運ナク當業者亦之ニ倚リテ生産ノ增收經濟ノ伸張ヲ期スルノ現象ヲ呈スルニ至レリ蓋シ斯ル現象ヲ作振スルニ至リシハ時代ノ要求然ラシメシニ因ルヘケンモ是カ農事改良ノ機關タル農事試驗場、農會其他農事指導ニ直接關係ヲ有スルモノ、協同作用ニ依テ實現セラレタルハ亦明カナルコトナリトス今改良セラレタル顯著ナル事蹟ヲ舉クレハ左ノ如シ

- (1) 作物種類、品種ノ漸次統一普及セラレツ、アルコト
從來雜滑若クハ劣惡ナル品種ニ依テ農産物ノ聲價ヲ失墜シタリシ地方モ漸次統一セラレ優良品種ノ普及ヲ見ルニ至レリ
- (2) 耕鋤整地ノ改善セラレツ、アルコト
開墾ノ初メ唐鋤淺耕ノ弊ハ馬耕ニ依リ其弊ヲ矯メラレシモ尙淺耕ニ失スルノ弊アリシニ近來土質及作物ノ關係ニ依リ深耕ノ利益多大ナルヲ認メ之ニヨリ生産力ノ増進ヲ計ルモノ漸次多キヲ加フルニ至レリ亦整地ノ如キモ收利多キ南北畦ニ作條スル等當業者一般ニ注意ヲ拂ヘ來タレルヲ認ム
施肥法ノ合理的ニ改善シ來リツ、アルコト
イ、新墾當時無肥料耕作ノ積弊ヲ矯メ基肥トシテ厩肥堆肥ノ施用各地ニ盛ニナリシコト
ロ、人造肥料ノ用途ヲ辨ヘ合理的配合ニ依リ施肥ノ價値ヲ増大ナラシメシコト
農具ノ使用改善ニ依リ勞費節約セラレシコト
改良農具ノ使用ニ依リ勞費ノ節約セラレタルコト著シク本道全般ニ亘リ指導効果ヲ示シツ、アルモ特ニ檜山支廳管内ニ於ケル洋梨室蘭支廳管内ニ於ケル丘梨梨水田地方ニ於ケル馬力攪器ノ如キハ顯著ナルモノニシテ其他馬力除草器マニユアノオークノ如キ累年使用者ノ普及ヲ見ルニ至レリ
病虫害ノ防除厲行セラレツ、アルコト
病虫害防除ニ對スル智識ノ増進ト共ニ農家ノ思想一變シ來リタルト同時ニ是カ厲行ノ實績顯著トナリ之ヲ例セバ町村農會ニ於ケル害虫ノ買上ニ農村小學生徒ノ害虫捕獲勸勞ニ燈火及糖蜜誘殺ニ藥劑の防除ニ専心勉ムルニ至レリ殊ニ藥劑的防除ノ經濟的ナルヲ自覺シ水田及果樹蔬菜園藝業者ニ之カ實行多キヲ見ルノ現況ナリ
- (3) 雜穀ノ乾燥調製年ヲ逐フテ改良セラレツ、アルコト
本道輸出雜穀ノ乾燥調製ノ改善ハ年來絶糾シ來リタルモ未タ充分ナル成績ヲ舉グルニ至ラサルモ收穫納屋ノ増設乾架ノ新設唐箕篩柵秤等乾燥調製ニ要スル設備年歲進歩シツ、アルヲ認ム
- (4) 儀裝改良ニ依リ農家經濟ヲ助ケツ、アルコト
儀裝ノ改良ハ前項雜穀乾燥調製ト共ニ年來勸奨シ來リタル事項ニシテ累年進歩ノ蹟ヲ見ル殊ニ十勝、北見地方ニ於ケル從前儀裝ノ弊トシテ何作物ヲ論セス購買セル以ニ入ル、ヲ例トセルモ數年來自家ニ於テ製作セル燕麥俵ヲ用フルコトヲ極力指導獎勵セシ結果成績顯著ナルモノアルヲ認ム
- (5) 水田實播專營ノ弊ヲ矯正セシコト
近來水田勃興ノ盛ナルト共ニ耕種甚ダ粗放稍々トモスレハ實播專營ニ奔リ加フルニ病虫害ノ蔓延、米質ノ退化ヲ意トセサルモノ尠ナカラサルヲ以テ極力矯正ニ勉メタル結果漸次良好ノ狀態ニ進ミツ、アリ
- (6) 果樹剪枝及袋掛ノ實行普及セシコト
剪枝及袋掛ハ果樹業ニ於ケル最モ重大ナル作業ナルニ拘ハラズ往年果樹栽培進歩ノ遅々タリシ際ニアリテハ等閑ニ付セラレシニ農事指導ノ開始ト共ニ極力之ニ注力セシタメ漸次效果ヲ顯シ其實行普及ヲ見ルニ至レリ
特殊農地農業經營法ヲ指導シ效果ヲ收メシコト
イ、高 臺 地
- (7) 本道ノ農地開拓ハ大河沿岸平原地ヨリ始マリ今ヤ漸次進シテ山麓ヨリ高臺地ニ移ルノ現況ニアリ從ツテ農業要素タル地勢氣溫及適作物交通經濟ノ關係等ヲ參酌シ周到ナル經營指導ニ依リ充分ノ效果ヲ收メタルヘカラス故ヲ以テ高臺地營農法ヲ定メ是カ指導ニ勉メ特ニ室蘭支廳管内ノ如キハ之ニ關スル印刷物ヲ配付シ實地指導ト共ニ是カ効果ヲ收メツ、アリ

ロ、泥炭地及火山灰地

本道農業ノ勃興ハ從來長ク閑却サレシ泥炭地及火山灰地ヲシテ新ニ利用スル氣運ヲ開キ水田トシテ畑作地トシテ近來之ニ起業スルモノ續出スルニ至レリ依テ農事試驗場成績ニ基キ其特殊營農法ニ就キ周密ナル指導ニ勉メ漸次實踐ヲ收メツ、アリ

ハ、酸性土壤

從來不毛ノ地トシテ農家ノ顧ミサリシ該土壤ニ對シ酸性反應ノ原理ノ闡明ト共ニ農事試驗場成績ニ基キ生産上利用ノ範圍ヲ明示シ當業者ニ至大ナル便宜ヲ供シツ、アリ

二、水害地

本道河川ノ汎濫ハ大程春秋二期ニ出水ヲ來シ各種作物ノ被害甚ク常ニ農家ヲシテ震懼セシム而シテ其特殊地ニ於ケル營農法ノ指導ハ最モ必要ナルヲ以テ試驗成績及農家實驗ニ徴シ水害地農業經營法ヲ協定シ周到ナル指導ノ下ニ之カ實踐ヲ舉ケタルモノ少カラス

ホ、新來移民地

新來移民地ハ從來拓殖部ニテモ入地ノ當初指導シツ、アルモ指導ノ點ニ於テ十全ヲ期シ難キト入地初年經營ノ如何ハ將來ニ及ホス影響甚大ナルヲ以テ特ニ經營上須要ナル印刷物ヲ配付シ實地ノ指導ト相俟ツテ其實績ヲ舉ケツ、アリ

(11) 家畜增飼飼蹄等ノ成績顯著ナルコト

- 普通農事ノ進歩ニ伴ヒ追歲發達ノ歩ヲ進メ來レリ今其ノ主ナル指導ノ效果ヲ列舉スレハ左ノ如シ
- 一、農業ト家畜ニハ離ルヘカラサルコトヲ當業者自覺セシメシコト
- イ、地力ノ改善増進ノ上ヨリ
- ロ、勞力經濟ノ上ナリ

ハ、生産經濟調節ノ上ヨリ

二、合理的飼育管理法ヲ解得セシメシコト

- イ、飼料ニ注意シ牧草及根菜類ノ栽培ニ注意シ來レリ
- ロ、畜舎ノ構造舊觀ヲ脱シ經濟的ニシテ而モ家畜衛生ニ恰適セルモノ多クナレルコト
- ハ、削蹄講習ハ實地指導ト相俟テ最モ効果ヲ顯シ馬體保健上歡フヘキ現象ヲ呈セリ

(12) 蠶業指導ノ成績見ルヘキモノアルコト

- 拓殖ノ進歩ト共ニ多年獎勵シ來タリシ蠶業ハ時ニ一盛一衰ヲ免レサリシモ今指導上ヨリ見タル成績ノ主ナル點ヲ舉クレハ左ノ如シ
- イ、養蠶製糸製綿ハ農家ノ副業トシテ有利ナル事業ナルヲ周知セシメシコト
- ロ、蠶業ハ農家ノ老幼勞力ヲ最モ生産的有利ニ利用セシメツ、アルコト
- ハ、蠶業ニ伴フ栽桑ハ傾斜地及圃場畔畦地等ヲ利用セシメツ、アルコト
- ニ、飼蠶實地指導ニヨリ迷蠶者ヲ少ナカラシメシコト
- ホ、小學校兒童ニ一蛾飼育若クハ夏期休業中年長女生徒ニ製糸製綿ヲ授ケ斯業獎勵ニ資益セシコト

六 將來ニ於ケル指導機關ノ組織

農業指導機關ノ組織ヲ從來ニ踏襲シ本廳ニ地方費指導機關ヲ存シ之ヲ中心トシテ國費本廳員及農事試驗場員相共ニ其衡ニ當ル亦多少ノ長所ナキニアラスト雖モ由來指導ノ事ニ當ル者ハ本道ニ於ケル農事試驗機關ノ成績ニ基キ其職ニ從フノ要アルカ故ニ地方費指導員ヲモ農事試驗場及種畜場員タラシメ以テ指導事務ヲ悉ク該場ニ移スノ勝レルニ如カス隨ツテ從來ニ於ケル普通農事指導農事試驗場本支場及試作場ニ畜産指導ハ種畜場ニ蠶業指導ハ蠶業講習所ニ夫々所屬セシメ而シテ之カ事業施行ノ方法トシテ指導區設定ノ關係ヲ見ルニ現在普通農事ニアリテハ全道ヲ七農區ニ分轄シツ、アルモ既設農事試

驗機關ノ外將來農事試驗場増設セラル、ノ時運ニ至ラハ少クモ一支配一個ノ配當トナルノ豫定ニシテ而モ指導員ハ試驗場本支場並ニ試作場員タラシムルヲ可トスルヲ以テ農區ノ増設ハ亦試驗機關ノ増設ニ伴フヘク一支配下ヲ一農區トナスハ蓋シ自然ノ趨勢ナリ故ニ農事指導ノ完成ヲ期センニハ所謂指導員ノ増加ヲ圖ランヨリハ寧ロ速ニ地方費試驗機關ナル農事試作場ヲ増設シテ其内容ヲ完備シ該場員ヲシテ指導事業ヲ兼シムルノ方法ニ出ツルヲ便トスヘシ

畜産指導ニ於テハ普通農事指導ニ於ケルカ如ク畜産區ヲ設定スルノ必要ヲ認メス蓋シ元來畜産業ハ其性質普遍的ニシテ普通農事ノ如ク地方的ニ多大ノ相違ナク且ツ假リニ之ヲ設定スルトスルモ在勤セシムルニ適當ナル機關ニ乏シキノ欠點アリ故ニ畜産指導ニアリテハ畜産區ヲ設定センヨリハ寧ロ各支應各産牛馬組合或ハ農會ニ畜産技術員ヲ置キ指導員ハ之ト連絡ヲ保チ督勵協力事ニ當ルヲ以テ勝レリトス

更ニ蠶業指導ニ於テモ亦普通農事ニ於ケル農區ノ如ク持ニ養蠶區ヲ設定スルノ要ナク只現在獎勵區ノ組織ヲ尊重勵行シ指導上緩急ヲ認ラサルヲ以テ足レリトスルモ其區域タル養蠶事業ノ普及ニ伴ヒ適宜變更スヘキハ言ヲ俟タス

以上叙説ノ如ク指導機關ヲ農事試驗場及種畜場ニ轉換スルハ其目的遂行上最モ緊要事タリ之カ主ナル理由ヲ列舉スレハ左ノ如シ

- (一) 抑モ農事試驗場及種畜場ハ斯業技術ノ府ニシテ指導事業ハ其成績ノ普及機關ナリト稱スルモ不可ナキヲ以テ之ヲ上記ノ組織ニ改ムルトキハ二者ノ間ニ不斷ノ脈絡ヲ保チ步調ヲ同一ニシ常ニ其確定成績ヲ迅速ニ當業者ニ普及周知セシムルヲ得ヘク本末徹底セル指導成績ヲ舉クル上ニ便益至大ナリ
- (二) 指導員ヲシテ場員同様常ニ試驗事業ニ接觸セシムルトキハ技術的智識ヲ増進シ指導者自身ヲ教育スル意味ニ於テ最モ効果アルヘク所謂適材適所ノ勤務タルノ利ヲ舉クルヲ得ヘシ
- (三) 以上ノ如ク指導員ヲシテ常ニ場務ノ一部ニ從事セシムルトキハ隨テ場務ノ進捗ヲ助クルト共ニ指導員ノ智識ヲ増進スルノミナラス場員亦除暇ヲ以テ指導ニ當ルニヨリ指導上常ニ圓滑機敏ナル行動ノ下ニ當業者ヲ益スルノ効果甚タ大ナルヘク延ヒテ經費ノ節約善用ニ資スルコト決シテ鮮少ナラサルヘシ

七 將來ノ指導方法

農事指導方法ハ逐年經驗ヲ重ヌルニ從ヒ改善セラレツ、アルモ更ニ倍々改善ヲ加ヘ以テ有終ノ目的ヲ達成スルニ易メサルヘカラス其ノ要項ヲ示セハ左ノ如シ

- (一) 各支應下ニ於ケル農事指導方針ヲ確立シ其改良事項中緊要重大ノ事項若干ヲ選定シ朝野一齋ニ其改良指導ヲ圖ルノ効果甚タ大ナルハ空知、室蘭、増毛、後志各支應ノ已設實例ニ徴シテ明カナルヲ以テ今後之ヲ各支應下ニ及ホスハ極メテ緊要有利ノコト、ス
- (二) 農事講話ト實地指導トハ各特有ノ長短アリ又其場合ノ目的及題目ニヨリテ異ナルハ勿論ナルモ概シテ農事講話ニ比シテ實地指導ノ效果甚タ大ナルモアルヲ以テ今後其方針ニ基キ指導計畫ヲ樹テ指導上遺憾ナキヲ期スルヲ必要ナリトス
- (三) 品評會ニハ立毛及成品ノ二種アリテ二者共ニ相應ノ效果ヲ收メツ、アルモ更ニ之ヲ大ナラシムルニハ其開催組織及出品種類審査方法ニ改良ヲ加フルノ要ニアリ而シテ從來ノ成績ニ徴スレハ品評會ハ常ニ立毛ノ場合ニ於テ効果勝レルモノアルヲ認ムルヲ以テ今後其方針ニ基クテ緊要トスヘシ尙ホ右ノ外ニ農業經營法品評會ヲ開キ營農智識ノ改善普及ヲ圖ルヘク之カ開催ハ先ツ模範部落ヨリ之ヲ始メ漸次各地方ニ及ホスヲ可トス
- (四) 農事講習會ハ理論ヲ避ケ實地ヲ主トスル大體ノ方針ニ基キ施行セラレツ、アルモ尙今後一層ノ注意ヲ以テ極メテ實地ヲ主トセサルヘカラス而シテ目下講習會ニ二種アリ普通短期講習會ハ其期間一週間内外ニシテ農業、畜産、蠶業其他ヲ合併開催ノ場合多ク特殊農事講習會ハ其期間長クシテ一二科ノ專門講習ヲ目的トスルモノナルモ從來ハ講師人員及經費ノ不足ニヨリテ前者ノ開催多キヲ占メ後者ノ開催甚タ少ナシ然レトモ時運ノ進歩ハ漸次後者開催ノ必要ヲ示シツ

- (五) アルヲ以テ今後適當ニ其開催數ノ増加ヲ期圖スルヲ必要トス
 新地移民指導ノ擴張ハ最モ必用ニシテ蓋シ本道拓殖ノ進歩ト共ニ新來移民ノ入地營農スル土地ノ種類ハ昔日ト異リ多クハ泥炭地、火山灰地、高丘地等ナルヲ以テ新來移民ニ對スル指導ノ緊要ナルハ彌々切實ナルモノアリ而モ從來地方費指導員ニ國費囑託ヲナシ少額ノ經費ヲ以テ僅カニ一部ノ指導ヲナスニ過キサリシハ甚タ遺憾トスル所ニシテ今後大ニ之ヲ擴張シ周密ナル指導ヲ行フコト肝要ナリ
- (六) 特殊事業ニ對スル實地指導ヲ昌シムルハ最モ緊要ノコトニ屬ス即チ製糸製綿及蕪細工實地指導ノ如キハ其効果ヲ收メタル實例ノ一ニシテ今後農家副業トシテ適當ナルモノハ隨時其熟練ナル當業者ヲ囑託シテ巡回實地指導ヲナサシムルノ道ヲ開クハ効果甚大ナルモノアルヘシ
- (七) 現在模範部落ニ對シ各戸巡回指導ヲナシ又養蠶ニ於テハ夙ニ之ヲ實施シ其實績良好ナルモノアルニ鑑ミ今後經費ノ許ス限リ此ノ良法ヲ以テ各村當業者ニ接シ倍々農事指導ノ實績ヲ擧ケサルヘカラス
- (八) 農事改良ハ農村婦女子ノ力ニ待ツトコロ尠カラス故ニ過去ノ實績ニ顧ミ爾今農村婦女子ニ對シ特ニ農事指導ノ途ヲ開キ生産物ノ加工調理法ノ講習ヲ始メトシ園藝及冬期副業等ノ適切ナル指導ヲ行フハ最モ機宜ニ適セル緊要事タリ

八 結 論

農事指導事業ヲシテ最モ意義アル事業トシテ其效果ヲ大ナラシメントセハ先ツ各種農事指導機關ノ統一ヲ圖リ其共同作用ニ據ルノ要アリ即チ農事試驗場、農事試作場、種畜場、農會、産牛馬組合、蠶業取締所及支廳勸業係其他農事指導ニ關係アル諸種團體等ノ聯絡状態ヲ良好ニ維持センカ爲メ農事試驗場主催ヲ以テ年々指導關係技術者ノ聯合協議會ヲ開催シ又農會及産牛馬組合技術員ノ智識増進ノ爲メ毎年一回特殊農事講習會ヲ開催スルカ如キハ甚タ必要ノコトニ屬セリ而シテ今後郡町村農會ニ技術員ノ充當セラレタル場合ニハ地方費指導機關ハ右技術者ノ智識増進及施設事業ノ督勵ニ當リ且ツ本廳

ヨリ獎勵ヲ要スル特種事項其他確定シタル試驗成績ノ普及指導ニ勉ムルヲ以テ職能トスヘシ
 由來農事指導員ノ任務タルヤ甚タ重ク其人格ニ於テ技術ニ於テ當業者ノ範タルヲ要スルヲ以テ可成之ヲ厚遇シテ優秀ノ材ヲ網羅スルニ努メサルヘカラサルハ勿論事業進行ノ上ニ多大ノ關係ヲ有スル旅費ノ如キモ充分ナラシメサルヘカラス現下ノ如ク一ヶ年百五十日以内出張指導ニ從事シ得ルニ過キスシテ其餘ハ直接指導ニ當ルコトナク農事調査農家應接等ノ職ニ服シツ、アルノ現狀ナルハ頗ル遺憾トスルトコロニシテ農事指導機關ノ將來ハ一面各種機關ノ連絡統一ヲ圖リ指導上遺憾ナキヲ期スルト共ニ一面其經費ヲ適當ニ擴張スルノ最モ緊要ナルヲ認ムルモノナリ

大正三年十一月十七日印刷
大正三年十一月二十日發行

北海道廳

印刷者

札幌區北一條西三丁目二番地

山中松

印刷所

札幌區北一條西三丁目二番地

文榮堂活版所

電話百六十番

321
144

321

111

終